

---

# 人形遣い

桜楼月華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人形遣い

### 【Nコード】

N3299T

### 【作者名】

桜楼月華

### 【あらすじ】

偶然にも、部屋が召喚陣に似た形になってしまったという理由で人形遣いとなった主人公「柿崎 悪慈」。その召喚陣によって召喚されてしまった人形：吸血鬼の少女「カルマ」。

偶然という運命か。

絶対という運命か。

運命が生んだ幻想ストーリー

## 出会い（前書き）

ストーリー上に出てくる魔術やら召喚陣だとかは、殆ど俺が考えて作るモノです（時折他小説やアニメをパくろうと思ってるけど）。深い意味などは全くございません。登場人物のキャラ名も、悪慈にどうという意味がある訳ではありません。

## 出会い

女の子が降ってきた、なんて言っただけ何人かの人信じてるのだからか。

ある者は頭がイカれたかと嘲笑するだろう。

ある者は頭は大丈夫かと心配してくれるだろう。

ある者は近寄るな、と拒絶してくるだろう。

しかし、事実なのだ。五月二十日。俺の家には女の子が降ってきた。それは偽りざるを得ない事実なのだ。

それは何の前触れもなくやってきた。

二階の自室でテスト勉強で忙しい、と飯も食わず睡眠も惜しんで机に向かっていた俺は『柿崎 悪慈』<sup>かきさき あくじ</sup>という。悪事じゃない、悪慈だ。殆どの友人は俺の名前を書くときは漢字を使わず「アクジ」とカタカナ表記。どういう意味でのカタカナ表記かは知らない。何故、こんな名前にしたのかは分からない。親はとつくの昔に死んでいて、聞こうにも聞くことができない。まあ、然程興味があるわけでもないから別段困っているということでもないのだが。お金も困るほどない訳でもないし、俺の兄は職に就いてる社会人だし。

そういえば、その兄が昨日ダルマを買ってきた。何か意味が分からない物を買ってくるのは兄の癖の様なものだ。別に直してほしいとは思わない。置き場がなさそうだからクローゼットの上に置いておくことにした。

俺の住んでる所は、所謂都会だ。闇を光が侵食する夜。その夜に、突然コイツはやってきた。

それは、まるで隕石が落ちたような音だった。

二階の窓を開けて庭を見てみる。砂埃で何があるのか分からない

……。しかも俺の庭に落ちてきたというのなら他人事じゃない。さっさと落ちてきた物を確認しなくては。

落ちてきたものが隕石だったらどうしよう。ヤフオクにでも売ってみようか。

そんなことを考えながら庭に出る。

「……はあ?!」

そこには、少女がいた。小柄だけど……何歳だ? 少なくとも高校生だなんてことはないだろう。なにかボロ布の様なフード付きのロングコートを身に纏っている。フードに隠れた表情は良く見えない。

「……………」

フードが夜風のせい、頭から自然に取れた。見ると、少し色素が薄い金髪。赤い瞳。輪郭は触れれば消えてしまいそうなほど細い。遠目でも分かった。これが美が付く少女なのだ、と。その少女がペタンと庭に出来たクレーターの中心に座っていた。

「対価」

少女がなんか言ってきた。対価……、どういうことだ?

「召喚した対価、ちょうだい」

召喚……………? ちょっと待て、俺はそんなことした覚えないぞ。「ちょっと待ってくれ。いまいち……」というか全然状況を把握できてないから」

そう言うと、少女はハテナマークを頭に浮かべ、目をパチクリさせて首を傾げた。そして怪訝そうな顔をしながら言った。

「状況把握できていない? 何故? あなたが召喚したんじゃないの?」

召喚という言葉自体、聞き覚えがない。

そう言った後の少女は、ちよつと泣きそうだった。

「私は、ただ肉体を持つて知識を得た人形とでも思ってくれればいい。こことは別世界から来たの。あなたは私の召喚者…所謂、人形遣いになったということ。そして……「うんちよつと待とうか」……なに？」

話を挟まれて不機嫌になったのか、ちょっと眉間に皺を寄せて首を傾げた。

五月は夜になるとかなり虫が出てくる。きつと外で話すのは嫌だろうと思ったので部屋の中に入れたのだが、その瞬間から意味不明な話をしだした。

まあ、話を途中で遮ったのは謝る…けどな、突っ込みどころが満載過ぎるぜいお嬢ちゃん。

「まず、肉体と知識を得た人形。それは正しく人間のことだ」

「……例えが良くなかった。私は………正体は隠しておきたい。だから詳しい話は避けたい……」

先程の様に泣きそうな顔になった。

「わ、悪かった。細かいことは気にしないでおくから泣くな……」

「……！？ 泣いてなんか、ないっ！」

おお、意外と負けず嫌い？

しかし、改めて見ると背がかなり低い。床に、先程の様にペタンと座り込んではいえるものの、外見はまるで子供だ。声も声変わりしていない。ていうか子供そのものだな……。

「で？ そんな正体不明のお嬢ちゃんはなんで上から落ちてきた訳で？」

「不完全な召喚陣の所為だと思う。見れば、この部屋自体が陣を模しているかのようになっているわ」

青を基調にしたベットが南側の部屋の角に置いてあり、茶色の机が西。北の部屋の出口の方にあるクローゼットの上には、俺の兄が

買ってきた赤いダルマが置いてある。東にはこれまた兄が買ってきた緑色の観葉植物が置いてある。

南には水を象徴する青。西には大地を象徴する茶色。北には炎を象徴する赤。東には自然を象徴する緑。これらの配置だけでも召喚は出来ているのだそうだ。まず魔法陣を描くべきだったのだが、その工程を抜かしての召喚だった、故に不完全なのだそうだ。

「はあ……私のことを知らない人に召喚されるなんて思わなかった  
……………」

ため息交じりに少女は瞼を閉じて俯いた。

……………」

……………」

……………」すう、すう。

気付けば、少女は座ったまま寝息を立てていた。凄く寝つきの良さである。

その姿はどこか眠気を誘ってくる。気付けば俺の意識はどこぞへ飛んで行ってしまった。

## 出会い（後書き）

これは、ある小説の俺的にこうしてほしかったと思うネタとかを、あくまで自作小説に組み込ませたい願望から書いているものです。とある小説のネタを完全にパクったりもしてます（笑）

まだまだ、じゅっくじゅくの未熟者ですが、まあ感想だとか文の間違いとかがあつたらご指摘お願いします。

## 秋太と伊織

あれから小一時間程度が過ぎた。あれから、というのは寝てしまつてからという意味である。

どうやら先に起きたらしい例の少女に肩を叩かれて、俺は目を覚ました。

「んー、どうした？ ……………あ」

「やあ、悪慈君、おはよう。……キミはいつの間に少女を連れ込む様な真似を出来るようになったんだい？」

すらつとした長身にグレーのスーツ。丸メガネを耳にかけていて茶髪のサラサラしたショートヘア。どこか優等生染みた顔をしたこの男は、間違えるはずもない。俺の兄『柿崎 秋太』だ。

「あ、兄貴！？ なんて……」

「僕が僕の家に戻つてくることは、大した問題じゃないだろう？ それよりも問題なのは、その幼女だ」

「そうですよ、兄さん」

女の声がした。兄の後ろに黒のポニーテールが見えた。まだ発育途中の体を私服で包みエプロンを着用している女がいた。妹というわけじゃない。近所に住む中学生の『神咲 伊織』だ。昔から人懐っこくて、俺に懐いていたのだが……俺と同じように両親が二年前に死亡。その時から、殆ど俺の家に入り浸っている。時には、俺の家に泊つていくこともある。

「なんで……なんで伊織までいるんだ？」

「秋太さんに勉強を教わろうと思って来たんです……。兄さんも勉強で頼りにしてたんですけど、無理ですね。潔く誘拐してきたことを警察の方に自首してきてください」

……？ 誘拐？ なんの話だ。と、惚けると伊織と兄が同時に例の少女を指さして言った。

「「その子、誘拐してきたんでしょ？」」

酷い誤解だ……。だが、この場合そう考えるのが妥当かと思った。

「それはそっちの勘違いだ。降ってきたんだよ。空から」

「……悪慈……。お前はいつからそんなことを言うようになったんだ？」

「兄さん……？ 頭は大丈夫ですか？」

まあ、こうなるよね……。あー、なんか悲しい……。

「おい、お前も見てないで誤解を解いてくれ」

ボロ布コートを纏った少女に言う。

「……………ん」

短い返答だった。少女は一度深く息を吸ってから、無言になった。

「どうした…………？」

『聞こえる？』

「うわぁ！？」

「ん？ どうしたんだ、悪慈」

少女の声があった。その聞こえ方が普通じゃなかった。脳内に直接話しかけられた様な感覚。

『実際にあなたの頭の中に話しかけてるのだけど……………』

少女の方を見ると、口を開かずにこちらをじーっと見ていた。

『私は……………は、恥ずかしいから声を出したくない……………。だから、悪慈。代わりに答えて』

いつの間にコイツは俺の名前を知ったんだ？ まあ、そりゃあ分かるか。さっきから呼ばれまくってるし。

『悪慈も私に話しかけるイメージをすれば、口を開けずとも私に声が届く』

『……………これで、いいのか？』

『うん、そう』

簡単だった。もっと難しいモノだと思ってたから拍子抜けだ。

「どうした？ 急に無言になって……………」

「いや！ なんでもないよ！ なんでも……………」

そして、また少女と無言の会話をする。

『お前の名前。なんて言うんだ？』

『……恥ずかしい……』

『恥ずかしいさん？ 凄い名前だね！』

『痛い痛い痛い痛い！！冗談だ、冗談！！』

耳を引つ張られた。それも凄い強さで。

数秒してから少女は手を離れた。

『で？ お前の名前はなんなの』

『……カルマ……』

お、答えた。

「えーと、コイツのこと説明するよ、兄貴。コイツの名前は『カルマ』って言うて……」

時々、無言の会話をしながらの説明は一時間を要した。

伊織がエプロンを着用していた理由は秋太の夕飯を作る為だった。時間は既に十一時だが……。

「はい、兄さん達二人はカルボナーラで良かったんですね？」

そう言いながら俺と兄の前に美味しそうなカルボナーラが置かれた。

「カルマちゃんは……これでいいの？」

「……ん」

短い返事はコイツなりに声を隠してるつもりなのだろうか。しかも、カルマを名乗る少女の前に置かれたのは、焼いた牛肉の山。

「……お前それ食いきれるの？」

『無論。食べきれないなら元から頼まない』

「そらご立派なことだ」

俺は、わざわざ無言の会話をする必要はないと判断したので普通に話した。兄と伊織は、既に慣れてしまって驚くことはない。……俺としてはこんなことに慣れないでほしい。

「それじゃ、いただきまーす」

カルボナーラを一口。……うむ。

「相変わらず、伊織は飯を作るのが上手いなあ」

「ありがとうございます」

笑顔で礼を述べる伊織はしかし、俺じゃなくてカルマの方を見ていた。

「……すごい食べっぷりだな」

兄が率直な感想を述べる。

確かに、それはすごい食べっぷりだった。

「は、早いな……」

牛肉を口に運んでは、また運ぶ。それが凄い速度で繰り返されていた。そして気付けば、皿の上には牛肉のタレだけしか残っていなかった。

「あ、悪慈。僕たちも、さっさと食べてしまおう」

「お、おう」

兄の言うとおり、俺はさっさと麺をドンドン口に運んでいった。

「兄さん。いくらカルマちゃんが可愛いからって変なことしたら、怒りますよ？」

「バーブー」

「いくらちゃんみたいに扱ってもらいたんですか？ いいですよ。ほら来なさい。頭などでしてあげまぢゅからねー」

「ごめん、俺が悪かった許してくれ」

「もう……、とりあえず、カルマちゃんに変なことしないでくださいね！」

「分かってるよ。ほら、帰れ帰れ」

手をヒラヒラさせて、さっさと帰れの意を表す。そうすると、伊織は意外と素直に帰っていった。時々、気にするようにこちらをチ

ラチラと見ていたのが印象的だった。

「……さて、風呂入ってくるかな」

「……あのなあ、カルマ。なんで風呂にまでついて来ようとしてるんだ？」

俺はバスタオル一丁。カルマは、首を傾げていた。何故、そんなことを聞くのだと言わんばかりに。

「私はあなたの人形。あなたの近くにいることは極めて自然なこと」  
「だからって風呂ん中まで入ってくんな！」

言って、入ってくることを拒絶する意を表すため、シャワールームのドアを思いっ切り閉める。

シャワールームなんて言えば聞こえはいいだろう。だが、普通の風呂だ。極一般的な風呂。

バスタオルを外して濡れない場所に掛けておく。そしてシャワーを浴びる

「はあ……前途多難だな」

そう言ってから、シャワーを止めて浴槽に入る。カラスの行水にも程があるかと思っただ、これからのことを考えるにあたって浴槽の中は丁度良かった。

さて、困ったモノだ。カルマの寝るベットがない。ベットがないだけで場所はあるのだが、床で寝させるのは可哀そうだと思った。  
「私に対して可哀そうだとかいう感情は持たない方がいい。私は、ただ人間の形をしてるだけの——」

「お前、いい加減にしろよ」

自分でも驚いた。勝手に口が動いたのだ。何も言おうとしていな

かったのに。

カルマは、首を傾げていた。この仕草は、どこか愛嬌がある。

……どうやら、俺の言葉の続きを待っていてくれるらしい。

「え、えーっとだな。お前はお前だ。お前が人間だろうが人間じゃなからうが、俺が人間だと思えばお前は人間なんだよ。いいな？」

なんと自分勝手なセリフだろう……。

しかし、それを聞いたカルマは意外にも泣きそうな顔になった。

今日一日……というか、ほんの数時間で一体、カルマのこんな顔を何回見たのだろう……。

「聖人形騎士団 副隊長」 坂城 美香

こうして起きるのは二回目か……。外はもう眩しすぎる太陽が昇っていた。

俺を起こしたのは、またもやカルマだった。無言で俺の体を揺すっていたらしいが、全く気付かなかった。結局俺が起きるのは、カルマが俺を起こし始めてから二十分後のことだったらしい。

「やつべ！ 遅刻じゃん……。カルマ、今この家の中に兄貴いるか？」

無言で首を振るカルマ。カルマは人形と言っていた。人形とはただの名称。コイツは、自分のことを戦闘兵器の様なモノだと言った。兄がいるかどうか分かった理由は一つ。カルマの能力「気配探知」だ。能力、というか人形と称されるものは誰もが持つ基本的なものらしい。

今、時計は午前の八時を指している。今から高校に行ってたんじゃない、間に合うわけない。どうしたものか。

「……サボるか」

放り出した。それから、ベットの中にもぐる。

「……んーんー」

カルマが体を揺さぶってくる。一体なんだというのだ……。

「お腹空いた」

……、しょうがねえ。

上体を起こして窓を開ける。それだけでも眠気はどこかへ飛んでいった様な気がした。下階に下りて洗面所で顔を洗ってから、冷蔵庫の中を探る。

飯になりそうな物は、何もなかった。

「はあ……カルマ。コンビニ行ってくるから留守番してろ」

「……ん……。……ん？」

首を傾げた。

コンビニ知らねえのか？ コイツ。

コイツの私服がなかったことに気付いた。あるのは、今着ているボロ布ロングコートだけのことだ。風邪をひきそうなファッションである。コートの下に何も来ていない、とはさすがに俺も考えていなかった。というか、考えなくなかった。

「……伊織に服でも貸してもらおうか」  
そんなことを考えているコンビニの帰り。無論、カルマもついてきている。留守番を頼んだのだが、断固としてついていきたいと言った。

袋の中には、カップ麺が一つ。それから牛カルビ弁当が四つだ。カップ麺は俺。牛カルビ弁当は四つともカルマのものだ。……コイツは牛が好きなのか。いや、昨日の晩飯で大体の予想はしていたが、というか、カルマを凝視しているコンビニの女店員が怖かった。こんなボロ布コート見てれば当たり前か。なんかカルマはカルマで、その店員を凝視していたが……。

それは突然のことだった。

『……悪慈、首を左に逸らして』

「はあ？」

と、カルマを見下ろした瞬間。「何か」が、俺の顔めがけて飛んできた。

「……なんだっていうんだよ。もう……」

ギリギリで避けたが、右頬から血が出る感覚があった。驚きを乗り越して、呆れてきた。もう面倒事はゴメンだと言うのに……。

その「何か」が飛んできた方を見る。

黒の地面にまで届きそうな長い髪。服は……さっきのコンビニの服に髪と同じく足まで届く長くて黒いロングコートを纏っている。さっきのカルマを凝視していた女店員だ。その両手にはさっき飛んできた「何か」と同じだと思われる物が握られていた。それを見て驚いた。

青白く光る剣。

「チツ……かわしたか」

物騒な世の中になったものですね。とか言ってる場合じゃないなこれ。

「あんた、なんなんですか？ いきなり襲われても困ります。そもそもなんですかそのゲームに出てきそうな剣は」

質問攻めしてみた。

「ほう……まだ余裕があるようだな。誰かに襲われるのは初めてじゃないのか？」

「初めてだからこそ疑問を多く持つてるんですよ。戸惑ってるんですよ。あなた何者なんですか」

「……その人形からは何も教えてもらっていないのか？」

人形。カルマの名称。

「まあ、力も封じようともせずに出歩かせているのだから、何も教えてもらっていないのだろうな」

力を封じる？ なんの話だ。カルマを見た。いつもの無表情だった。ただ、赤い瞳が揺れた気がした。

「お前は、人形遣い……そこら辺は、さすがに教えてもらったろう？ その人形というものは悪なのだよ少年。法に裁かれるべき存在……。許されるはずもない存在だ。そして、それを召喚したお前も同罪なんだよ。分かったか？ お前は犯罪者だ。人形に関する犯罪者を捌くのは私の仕事。なら、出会い頭に幾億の剣をぶつ放すのも当たり前だと思わないかい？」

言ってることが滅茶苦茶だ、と思った。黒のロングコートと言い、その口調といい……あんたのがよっぽど悪役に向いてますよ……。

「それを、出会い頭に幾憶どころか……二度目に会ってたつたの一本投擲しただけ……。有り難く思え少年。お前は私になめられているのだよ」

この状況で有り難く思えるほど、俺の器は広くない。

「……？ さっきから無言だが……。はっ、まさか、念話をしているのか！？ させんぞ！」

あんたが喋らせてくれないんだよ！ さっきから自分勝手に喋りやがって……。

とか、思ってる余裕は実はない。本当に幾憶もの剣が飛んできた。『うわ！ おわ！？ うわわ！』

さっきから同じ悲鳴しかあがっていない。情けないな、俺……。もうちょっと動体視力を鍛えておくべきだったか。それでも、ギリのところで剣を避ける。

「よくかわす愚か者だな……。！ さっさと神によって捌かれよ！」

どうすればいいんだ……。！ 防戦一方じゃないか。そもそも戦うだとか、そういう言葉が日常的に無かった俺が、これだけの数の剣をかわせているのは奇跡に近いのではないだろうか。

『悪慈……。！ ちよつとだけ我慢してね』

さっきから無表情で大して動くこともなく剣をかわし続けているカルマが、脳内に語りかけてきた。

『が、我慢つてなにさ……。！ ……。！？』

言った瞬間に、カルマが炎に包まれ消えた。それから、何かが体の中に入ってくる、嫌な感覚がした。例えるなら、身体の中を無数の蟻が這いずり回ってる様な感覚。息が……。できない。

「ぐ……。う……。……。！」

遂に立てなくなって片膝が地面に付いた。

「……。！？ 精神同体……。か……。……。？」

目の前の女が驚いた顔でこちらを見ているのに気付いた。

それから、あの嫌な感覚が少し無くなった。そして二酸化炭素を思いつきり出して、酸素を肺いっぱいにした。深呼吸を何度かして

立ちあがる。

「力、カルマ？ どこだ？」

「あなたの中」

んな無茶苦茶な……。しかし、脳内会話……。いや、念話をしてる感覚は無い。俺の胴体から声が聞こえてくるので、どうやら本当に俺の体の中にいるらしい。

「貴様ら……。！ 人形のタイプはなんだ！？ 悪魔か？ 傀儡師か？ それとも、吸血鬼か？」

まるで分からない。人形にタイプなんてあったのか？

しかし、さっきまでの嫌な感覚は完全消えて、どこか心地良い気分だ。体が軽い。

『悪慈。なにか、ない？』

……？

『何かつて、なんだよ』

『何でもいい。掴めて細くて長いモノならなんでも』

そんなもの持っているわけがない。俺の周りを見渡すが、あるのは木の枝くらいだ。

『この際、木の枝でもいいわ。すぐに燃え尽きちゃうだろうけど、媒介にはなと思うっ！』

もうカルマに従うしかない。そこら辺に落ちてた長い木の枝を拾う。瞬間、カルマが何かを呟き始めた。

「ターゲット  
目標確認。目標の構成物質を解析……。完了。目標の火炎による強化開始……。完了。術式発動」

そう言つと、俺の足元に魔法陣の様な物が浮かび上がり、木の枝に火炎が纏わりついた。

「熱っ！ ……あれ？ 熱くない？」

しかし、そう言ってるまに木の枝が焦げ始めた。

『それを相手に向かって投擲して……』

冷静に木の枝の攻撃手段を伝えてきた。

それに従い、槍投げの要領で相手に向かって投擲した。

当たり前だが、女はそれを簡単にかわした。その間に俺は他に落ちてる木の枝を集める。

『……………術式発動』

さっきの炫きはなく、いきなり木の枝が燃え始めた。

「おらあ！」

木の枝を数本纏めて投げる。

「ふん。そんなもので私に勝てると思っているのか？」

明らかに余裕ぶっている。しかし、その余裕も当たり前だろう。

木の枝は青白い剣によって風払われる。

剣で風払っている隙に俺は、足を踏み込んだ。普段の俺にはあり得ない身体能力だった。

女との距離、十メートル。その十メートルの差を、たった一瞬で埋めて女の懷に飛び込んだ。

「な——」

女が何を言おうとしたのか分からない。女が何かを言う前に俺がその脇腹を強く殴ったからだろう。

女が目を覚ましたのは、俺の家のリビングだった。縄で両手を封じてロングコートを一応脱がしておいた。そうなれば、女はただの女だった。…………その威勢の良さを除けば。

「ええい！ 離せ！ 私は、お前達を捌く者だ！ この縄を早く解かんか！」

「あんたの敵は俺なんだろう？ なら俺の敵はあんただ。敵の拘束を態々解くと思うか？」

今の俺は多分ニヤけているだろう。

なんせ、初勝負で初勝利したのだから。…………使ったのはカルマの力だけだった気もしなくはないが、気にしないでおこう。実質的に勝ったのは俺だし。

ちなみに、そのカルマは女の頬をツンツンとつついて遊んでいる。  
「んじゃ、まずはあんたの名前を聞かせてもらおうか？」

「き、貴様なんか教えるはず、ないだろう！」

「そうか、それじゃあ……やってやれ、カルマ」

指をパチンと鳴らす。するとカルマは無言でうなずいてから……。  
「う！？ う、うはははうはははははははははは！」

女の足をくすぐり始めた。すると、女は凄声で笑い出した。こんな笑い声あげて、恥はないのだろうか。……まあ、恥をかかせるのが目的だからいいのだけど。

カルマはカルマで容赦がない。さっきの戦闘で牛カルビが三つもお陀仏になったからだ。金はもう無かったから一つで我慢しろと言ったところ、涙目で頷いた。ちよっと可愛かった。

「わ、分かった！ 分かったから！ 喋る！ 私の名前でも何でも喋る！」

「ほう。本当だな？」

「ほ、本当だ！ なんだって喋ってやる！」

「ほほう、なんだって喋るって言ったな？ よし、もういいぞカルマ。遊ぶのは、また後だ」

カルマは無言で頷いてくすぐるのを止めた。

「じゃ、喋ってもらおうか？」

「う、うう……」

「……喋らないと……」

指をパチンと鳴らすことはいつでもできるのだ。というか、指を鳴らさなくても俺の一言でカルマは女の足をくすぐるだろうけど。

「ま、待て！ 分かった！ 話す！ 私の名は「坂城 美香」だ！」

坂城 美香と名乗る女は、既に涙目だった。くすぐられてるときから涙目だった気もするが……。

「坂城 美香。洗いざらい、吐いてもらうから……」

先程、この女の方が悪役に向いていると言ったが……訂正しよう。悪役は俺が適役だ。

## 対価

いろいろ吐いてもらった。いや、嘔吐させたわけではない。情報を教えてもらったのだ。この「聖人形騎士団」の副団長「坂城 美香」に。

聖人形騎士団とは、いわば警察の様なものらしい。その存在自体は政府側が隠しているが、この世には「人形」と呼ばれる者がそこから中に蔓延っているらしい。

人形とは、召喚されることによって人形遣いの言うことをなんでも聞く、まさにマリオネットになってくれる者だそうだ。しかし、定期的に「対価」が必要なのだとか。

人形にはそれぞれタイプがあるらしい。吸血鬼、傀儡子、悪魔、天使。今のところ確認されているのは、この四つのタイプだ。そして、聖人形騎士団に入り戦闘を行う際には、天使タイプの人形を用いているそうだ。

大まかに分ければ、「悪魔、吸血鬼、傀儡子」は処分の対象。「天使」は差し詰め人間の味方と言ったところか。前者は、召喚者の言うことを何でも聞いてくれる。その行為が犯罪行為であろうともだ。だが、後者は召喚者が行く道が正しいか見極めてから力を貸してくれる。

比較的、害のない天使は利用。害のある悪魔等は処分するのだそう。処分とは、即ち、死刑である。中には不死の人形もいるそうで、それらは封印の術式を用いての処分だそうだ。

カルマのタイプは吸血鬼、だそうだ。本人が言うのだから、間違いはあるまい。それを言った後の「悪慈には知られなくなかった」という寂しそうな顔が印象的だった。

そして、この女。美香さんは、天使タイプの人形「ミカエル」を用いているそう。あの青白い剣はミカエルの能力によるものだろうで……。

「……悪慈？ お前は本当に……」

「あ、兄貴？ 帰ってきてたのか。あ、その人の縄解いてもいいけど、暴れたら兄貴のせいだから」

時間はいつの間にか七時を過ぎていた。伊織は既に飯を作り始めている。

俺とカルマは、リビングの指定席に座ってテレビを見ている。カルマはいつもの無表情。その表情からは何も読み取れない。しかし、心がないというわけでもないそう。それを聞いて俺は安心した。何故安心したのか、それは俺自身良く分かっていない。

「はい、夕ご飯できましたよー」

言いながら、伊織が皿に持った牛肉をテーブルの真ん中にドンと置いた。

「……伊織？ カルマが全部食ってしまっただけ俺等が食べる分が無くなりそうな気がするのだが」

「大丈夫です！ おかわりは幾らでもありますから」

そう言いながら、伊織は美香さんに牛肉を食べさせている。優しいヤツである。

飯の途中で美香さんをじーっと見ていた兄貴からグッジョブサインを貰った。一体どういう意味だ。

昨日、結局カルマは俺のベットで寝た。俺も俺のベットで寝た。つまり、一緒に寝た。今日もそれは変わらない。明日、カルマの服

を持つてきてくれると約束してくれた伊織に預けようかと思ったけど、ただでさえ迷惑をかけているのにこれ以上の迷惑はかけられない。

そんなこんなで、今日も一緒に寝る。別に、俺としては困ったことはない。カルマも拒絶しないから、当分はこれでいいかと考えている。

「はあ……はあ……」

深夜、急にカルマの顔が赤くなり息が荒くなった。風邪でもひいたのかと聞いたが、カルマは首を横に振った。

目を硬く瞑ってとても苦しそうだ。

硬く瞑った目が薄く開いた。そこにはいつもの赤い瞳が――ない。

目は赤から青になっていた。

「お、おい。なにがどうなってんだよ」

「そいつの対価が必要な頃になったのだろう」

部屋の入り口から声が聞こえた。美香さんだ。たぶん、兄貴が紐を解いたのだろう。

「目が青くなってるのは、そいつなりの力が出なくなっているという訴えなんじゃないか？」

そう言うだけで、美香さんは部屋の入り口から動くつもりはない。

「た、対価ってやつを払うんですか……？」

「そうだ。対価を払わなければ、そいつは死ぬ。私的には、それがいいのだが……」

酷い話だ。

「まあ、死なせたくないなら、その対価というヤツを自分で探し出せ。私は知らないぞ……もしかしたら、人の魂が対価かもな」

そう言って、不敵な笑みを浮かべながら部屋から出ていった。

しかし、対価と言われても……。まさか、本当に魂…？

「悪…… 慈い……」

「な、なんだ？」

カルマの顔を覗き込む。

瞬間だった。カルマの両手が、抱きつく様に俺の首を捉えカルマの方に引き寄せられた。

「カ、カルマ？」

ちよつとでも抵抗すれば、この手は離れるだろう。だが、抵抗する気はなかった。

「私の、対価は…… 『悪慈の血』！」

そう言つて、首に噛みついてきた。

「う……う……？」

変な感覚だ。痛い筈なのに、どこか心地良い。ああ、もしかして、俺はマゾなのか？

それから数秒後。カルマの口が俺の首から離れた。

「カルマ？ もう大丈夫、なのか？」

「……うん、大丈夫。ごめん、勝手に血……吸っちゃった」

「構わないさ。それでカルマが生きてられるなら」

珍しく、「ありがとう」と呟いてから、カルマはまた目を瞑った。寝てしまったのだろうか……？

「……、俺も寝るか」

ちよつと、焦つて早くなっている心臓の鼓動をなんとか抑えてベツトの中に……カルマの横に体を滑り込ませた。

カルマの体温がこちらに伝わってきた。本当に生きている、という確証を持ててから、俺は深い眠りに落ちていった。

「もう一人の人形遣い」 佐藤 望

カルマの対価は、召喚者の血。

タイプとかいうやつが吸血鬼だということを考えれば極めて自然なことだった。美香が「対価は魂かもな」と言うから、そんなこと見失っていた。だが、美香が対価の存在を教えてくれたのも事実である。感謝すべきなのだろうか。

「美香さん、対価のこと教えてくれてありがとうございます」

一応感謝しておいた。

「……？ なにを言っているんだ？ 私が対価のことを話さずとも、その人形が対価を覚えてくれただろう」

「教える気はなかった。悪慈の血は、できれば吸いたくない……。悪慈が対価の存在を知らなければ、あのまま消えようとも思っていた」

卵焼きを箸で掴んだまま、美香は訝しむような目でカルマを見た。  
「……どうということだ人形」

「悪慈は私の人形遣い。傷つけることは許されない。だけど私の対価は、どうしても、主を傷つけてしまう」

寂しそうに目を伏せて言った。ちなみに、今の彼女の目は赤ではなく青である。対価を欲しているという訳ではない。「力の封印」。それをするので、対価の支払いが一週間に一回から一ヶ月に一回に延ばせるのだそう。昨日は、召喚した時に対価を払っていなかったから。それから、美香との戦闘で力を使ったから、その分の対価だそう。

「力の封印」とは、そのままの意味だ。本来の力を封じることでの力の出費を少なくする方法。その代わり、容姿相応の力しか出せない。カルマは見た目は十歳にも満たない子供。つまり、その子供の力しか出せない。しかし、食欲は変わらないように……。相変わらず、大量の牛肉を朝から食べているコイツに兄も伊織も

既に慣れてしまっている。お願いだからこんなことに慣れないでほしい。

「カルマ……。頼むから留守番してくれ」

今から学校に行く、という時に伊織が持ってきてくれた服を着たカルマは俺の制服の裾を引っ張って学校に行かせてくれない。容姿相応になったからか、その力はとても弱いものだった。振り払えば簡単にその小さな手は離れるだろう。しかし、容姿相応の力になったしまったが故に振り払えないのもまた事実……。

「兄さん、私は先に行きますね。……カルマちゃん、兄さんの言うこと。できれば聞いてあげてくださいね」

妙に機嫌が良い伊織はさつさと中学校へと向ってしまった。カルマは伊織の後ろ姿を見ている。

チャンス！

脱兎のごとく逃げ出した……。………筈だった。

「ちょ！ ええ！？ なんで背中に乗ってんだよ！」

カルマが容姿不相応なジャンプ力で、俺の背中に乗ってきた。

「逃げちゃ、ダメ」

珍しく、妙に楽しそうな口調だった。……俺を困らせて遊んでのかコイツは。

もうどうにでもなれえええ！そう叫びながら、俺は高校に向かった。

この世には、どんなに頑張ってもどうにもならない物がある。例えば、人間がなんの力も借りずに空を飛ぶこと。例えば、人間がなんの力も借りずに時速百キロの速さで走ること。例えば、高校に無

断で幼女を連れてきてしまい変に誤解されてしまい、その誤解を解くということ……。

「おい、悪慈？ お前は、不良だが、ほかの不良から見れば優等生だ。まだ戻る。そんなお前を俺は見離したくないんだ。誘拐なんてやめる。そして学校を巻き込むな。自分で何とかしろ」

「勘違いして勝手に話を進めないでください！」

校門にはいつも国語を担当しているゴリキというあだ名の教師が立っている。体がゴツイくせにスポーツが何もできないことで有名な教師だ。

「勘違いも何も……なあ嬢ちゃん。キミはこの人に誘拐されたのか？」

無音で頷くカルマ。

……何故頷くんだ、カルマ。

「おい、カルマ。誘拐の意味分かって言ってるのか」

無言で首を振るカルマ。

意味も分からない言葉に頷かないように教育しよう。

「とりあえず、俺は誘拐犯じゃないです。コイツが俺の家に居候してて勝手に学校についてきただけなんです。信じてください！」

「信じられると思うか！？ そもそも、お前この前万引きしてくれやがったばかりじゃねえか！ 停学させないでやってやった恩をもう忘れたか！？」

ダメだ。信じてもらうどころか、前科まで持ちだされた。しかし、あれは違うんだ……友人に罪をなすりつけられただけなんだ……。

そんなことを言ってる場合じゃないぞ。これは弁明の余地がない……。

酷い目にあつた……。カルマはあのまま誘拐された訳じゃないと言ってくれた。誘拐の意味も分かっているにしろ、否定してく

れて助かった。……いや、実は意味を分かかって俺を困らせるために頷いたのか……？ いやいや、いくらなんでも……。ヤバイ、あり得そうで怖い。

「オイオイ、随分なことやっちゃったらしいなあ、アクジ。噂になってるぞ、ロリコン野郎が出たって」

「……誘拐したんじゃないかな？」

話しかけてきたのは俺の席の隣に座っている白髪の友人。「倉井くらい恭哉きょうや」である。俺の不良仲間とでも言おうか。

周りからは狂ってる、と言われてるが、友人になれば狂ってるのかなんか一つもないということが分かる、なかなか良い奴だ。しかし、俺の友人の中で二番目にヤバそうなヤツでもある。万引きの罪をなすりつけやがったのもコイツだ。

ちなみに、カルマは当分姿を消してもらうことにした。これまた能力らしい。

同じ人形には効かないが、人間には姿を見られることはなくなるそうだ。

正直、怖い。授業中とか何をされるか分かったもんじゃなから……。

「ふふ、悪慈君も、遂に犯罪者の仲間入りかい？」

……出た。俺が一番苦手とするヤツ。俺の周りの人間で一番ヤバイヤツ。

黒い髪に黒ぶち眼鏡。制服もきちんと着こなすコイツは、自分がこの世で一番強い。一番偉いと勘違いしている人間だ。冗談で言ってるなら可愛げがあるが、本気で言ってるのだからヤバイ。

「なんだよ、佐藤。世界の王としてアクジを裁きに來たのか？」

恭哉も苦手としているこの男の名前は「佐藤望さとうのぞむ」。恐ろしいくらいに自己中心的な考えの持ち主だ。

「いやなに、人形の様な子を連れていた……と、噂を聞いたものでね。……ん？ どうかしたのかい、悪慈君」

人形、という言葉に過剰に反応してしまった。

「いや、なんでもないよ」

瞬間、時計の針が動き、朝のホームルームの始まる合図が鳴った。

カルマは意外と大人しかった。

授業中、いつどんな悪戯をしてきても驚かないように気負ってたので、ちよつと拍子抜けした。

学校の帰り、ケーキを買ってみた。伊織は喜ぶだろうけど、カルマはどうなのかなという興味からだった。

「……佐藤？」

ケーキを買って歩こうとした時、目の前に佐藤が現れた。

「……そのケーキって誰に買っていくんだい？」

「お前には関係ないだろう」

無視して帰ろうと思った。しかし、佐藤の言ったことに俺の足が止まった。

「その人形のために買っていくのかい？」

見えてる……？　しかし、カルマにはまだ姿を隠しておくように言った。現に、俺からはちゃんとカルマは見えていない。

「知らないとは言わせないよ、悪慈君？　人形は姿を隠しても、結局同じ人形からは見えてしまうんだよ」

コイツ、何を言ってる……。

「僕は、君の人形に興味があつてね。知ってるかい？　人形遣いになつてもね、召喚陣を描けば幾らでも人形を呼び出せるんだよ。……

……それに、特殊な陣を使えば、他人の人形だつて自分の物にできる……。」

一体、何を言いたいんだ。コイツは。何故人形を知っている。何故……俺にそんなことを言う。

「だけどね、どんなに召喚陣を描いても、吸血鬼タイプが出てこないんだ……。」

嫌な予感がした。嫌な寒気が肌を刺す。背中に、何かが這いずりまわる様な感覚に襲われる。

本能が告げている——逃げろ、と。

「そこで考えたのさ。なら、人形遣いから人形を奪えばいいじゃないかってねえ！」

「カルマ！ あの時みたいに俺の中に入ってくれ！ 単体で逃げた方が動きやすい。お前は逃げ道のサポートを頼む！」

瞬間、あの時と同じ感覚が来た。違和感の後に、心地良くなる。

そして、走った。精神同体だかなんだかをした俺は、異様な身体能力を持っていた。

「あつはははは！ 鬼ごっこかい！？ いいよお！ その代わり、楽しませてよねえええ！！！」

## 作戦

くっそ！ なんなんだ……なんなんだよなんなんだよ！

佐藤が人形遣い……？こんなことがありえていいのかよ！

『次の曲がり角を右』

カルマは冷静だった。俺はパニック状態。辛うじて、カルマの声は聞こえるが……とてつもない混乱状態であることは間違いない。今は、家に向かうことにしている。

理由を話すには、ちよつと時間を遡らなくてはいけない。

『まず悪慈の家に向かう。家へ最短、克つ安全なルートを探る。家に着いたら、ナイフか何かを使わせて。ナイフは、火炎強化を使っても火炎を制御すれば溶けたりしないから』

とのことだった。だが、ナイフ？ 俺の家にあるのはナイフなんてもんじゃないさ。

『俺の家には先祖代々伝わる刀が爺ちゃんの部屋にある。爺ちゃんには既に死んじまつてるから、勝手に取ってっても怒るヤツは誰もいない！』

『……！ わかった。まず、悪慈は家の中に入ってその刀を取ってきて。あの人と人形が家を壊さないように、私ができる限り対抗しておく』

『なあ！？ お前……対抗って………！』

『大丈夫、ちよつとくらいなら大丈夫……。それに、悪慈が早く刀を取ってくればいい話』

確かにそれはそうだが……。あいつらの能力が分からない以上、コイツ一人に戦闘させるといふのはちよつとばかり心配だ。

「おいおいおいおいおいおい！！ おそいよ！？ 悪慈君、も

つと楽しませてよお！」

……どう見ても、油断している。俺をなめている。なら、それを利用すれば……！

『悪慈？ なにを考えてるの』

『ちよつと、お前の力貸してくれ。……火炎強化以外に何かできる能力ってあるか？』

『……強化系は雷撃強化。後は、できる物は限られるけど物質変換。それから、気配分散くらい』

十分すぎた。刀を取ってくるまでには、十分すぎる能力だ。

『物質変換で、コンクリを剣にできたりしないのか？』

『それは難しい……あ、そこ左』

『オーケイ。……じゃあコンクリで壁作って相手の攻撃を防御するのは？』

『物質変換の応用すれば、壁を作ることとは可能。だけど、相手の攻撃方法が分からない今、それは得策じゃない』

『もし攻撃によって防御が碎ける可能性が高いなら、なるべくデカイ壁作って、気配分散させてから相手の死角について腕を火炎、或いは雷撃強化して受け止める……そこから反撃ってのはどうだ？』

『……うん、それならいける』

と、言う訳だ。もうすぐ俺の家の前に着く。問題は、カルマがどれだけ自分の能力を使えるか。そして、俺がどれだけの速さで刀を持ってこれるか、だ。刀を持った所で、今は体力が限界。カルマの力を限界まで使わせてしまいかもしれない。……限界まで力を使わせるということは対価も必要になるはずだから、明日は貧血になるかもしれない……。

## 「絶望―イブリス―」

家の中では美香が暢気に蜜柑を食べていた。

「美香さん！ 外に人形と人形遣いがある！ カルマが対抗してるけど、あいつ一人じゃ心細い…… 一時協力でもいいので、力を貸してくれ！」

言ってから刀を取りに行く。

美香は、驚いたように蜜柑を喉に詰まらせていた。

俺の爺ちゃんの部屋は一階にある。少なくとも、その間にカルマがやられるということはきつとないはずだ。

「お、おい！ 協力とはどういうことだ。人形遣い同士の喧嘩に私が首を突っ込むと思うか！？」

「人形に関する事件とかは、確かあなたの仕事なんですよ？ それに、あいつは危険だ……。最悪の場合、殺す」

俺の言葉はきつと冷え切っているだろう。だが、仕方がないのだ。あいつは本当に危険な存在。ただでさえ危険なのに、そいつが人形遣いだった……。これは、本当にヤバい状況だった。

「カルマ！？」

外に出ると、佐藤の手によってカルマは捉えられていた。首を掴まれたカルマは苦しそうに顔を歪めている。

「佐藤！ テメー、離しやがれ！」

「口より手が先だ！」

そう言つと、美香の背後の空中に幾百もの青白い剣が出現した。

「豪雷と共に吹き荒べ 白雷は空を焼き黒炎は地を焼く 屍を抱きし罪人を裁きし罪人」

美香は何かを唱え始めた。魔術？

「貴様を、剣千本の串刺しの刑に処す！」

言うと、手を前に出し振り払った。瞬間、空を裂く轟音と共に、幾千の剣が佐藤に向かって発射された。しかし、速度が俺の時のそれとは比べ物にならなかった。音速。

「チツ……騎士団か？　おいおい、悪慈君、そりゃないよ。騎士団を飼ひ馴らしてるなんて聞いてないよ！」

叫びながら、俺の方に突っ込んできた。相手の攻撃は単なるパンチだ。鞘に収まった刀を防御に使う。

カルマは……意識を失っているのか？　ということは、カルマの力は貸してもらえない。俺は、どうするべきだ……？

「なにをばーつとしている！　死にたいのか！？」

美香の声に驚き、しかし、それでもなんとか頭を伏せた。直後、頭の上を先程の剣が飛んでいく音がした。佐藤はそれを異様な動きでかわしていた。

『悪……慈………』

脳内にカルマの声が響いた。

『……無事か？』

『これが、無事に見える？　いや、そんなこと言ってる場合じゃないね。相手の攻撃パターンは単発のパンチ。だけど、人形の力を借りてその力を倍にしてくる』

『カルマ……精神同体。いけるか？』

『もちろん。これ以上体にダメージ貰いたくないし、悪慈の中にいた方が安全。……というか、既に体の中に入ってる』

やけに行動が早いカルマである。あの違和感とかがなかった。もうあの感覚に体が慣れてしまったのか？

「くそ！　騎士団だか何だか知らないけど、こんなの……！」

佐藤は、苦戦していた。そして、時折、恐ろしいことが起こる。

「……！？　ぐああ……！」

佐藤の体があり得ない方向に曲がることがあるのだ。そうして剣をかわしている。

「……おい、主の体をそんな雑に扱うんじゃないよ。イブリス」

『……！ イブリス……？』

カルマが驚いたように言った。

「イブリス……だが、ヤツの能力は何もないはず……低級にも程があるぞ」

「ん？ 何を言ってるんだい、君は。イブリスはちゃんと能力を持っているよ。……いや、能力を持った、というべきか」

意味ありげに顔に笑みを刻みながら、佐藤は言った。

「人形のタイプというものを持ってから、力を持つ者なんて、どこにでもいるさ。それが悪魔であつたとしても、傀儡師の人形となれば、物を操ることくらい造作もないと思わないかい？……ふふ、さあ『絶望』を味わえ！」

ダメだ。俺には理解の範疇を超えている。何の話をしているのか  
が全く分からない。

それでも、やるべきことはやろう。

鞘に収まった刀を抜く。……絶望した。刀は既に斬れるような代物ではなかった。サビだらけで刃は欠けている。

『か、カルマ……これでも大丈夫かな？』

『うん、大丈夫。……目標を確認、構成物質の解析………完了。』

目標の修正………完了』

言つと、火炎が刀に纏わりつき、サビが燃えて消えていった。更に、欠けていた部分もドンドン修正されていく。どうなっているんだ、これは。

『火炎による強化、術式発動』

美香との戦闘の時と同じ魔法陣が俺の足元に出現する。

精神を集中させて、相手の体を見る。見れば分かる。傀儡師と呼ばれる意味。人形が人形遣いを操る人形師になっていた。佐藤の体に無数の糸が絡まるように、巻き付いていた。

『傀儡師は私たちみたいに、精神同体できる者は少ない。糸を斬つてしまえば、簡単に力の増強はできなくなる』

俺は、短く「オーケー」と答えてから、跳び出した。相変わらず、通常の俺からは考えられない身体能力だ。一瞬で、佐藤との距離を縮めた。刀を横薙ぎにする。佐藤はギリギリ避けたが、糸は斬れた様だ。佐藤は、ぐったりと地面に倒れ伏してしまった。

## 逃亡

倒れた理由は一つだけ。

操り糸が切れたから。

既に佐藤の体は限界を超えていたのだ。それをイブリスとかいう人形が無理矢理動かしていたのだから倒れて当然だ。

「くっそお……！ イブリス！ 何をしているんだ！ 早く……糸を！」

「もう終わりだ。お前は負けたんだよ、望。お前との縁はここで斬れたんだ。ああ……お前との縁が斬れると思うと、清々しい気持ちになるな」

どこからか、野太い声が聞こえてきた。たぶん、イブリスと呼ばれる人形だろう。

コイツは人形にまで嫌われてるのか。ここまでくると同情してしまふな……。

今、倒れている佐藤の前にはその命を取ろうとしている二つの剣がある。俺の火炎の刀と美香の青白い剣だ。

「美香さん。どうしちゃいますか？ これ、人形に捨てられちゃったみたいですけど」

「そうだな。案外、殺してしまうのがコイツ自身のためかもしれないな」

俺と美香は不敵に笑いあった。

人形遣いと協力している、ということを美香は完全に忘れてしまっているらしい。

「や、やめろお！ 悪慈！ お前は俺の友達だろ！？ 中学からの仲じゃないか！」

「悪いが……俺はお前を友達と思っていないし、お前みたいなヤツを友達と呼ぶ気はないんだ」

戦闘中にメガネを落としてしまった佐藤の目は、今にも飛び出し

そうだった。それ程に見開かれていた。

それに対して、俺は一体どんな顔をしているのだろう。カルマみたいな無表情か。それとも笑顔か。

「ふ……ふふ………」

顔を伏せて、佐藤は奇妙な笑い声をあげた。

「言っただろ！？ 僕は！ 人形を！ 幾つも所持してるんだって！」

「なに？」

それに答えたのは美香だった。不敵な笑みはなくなり、眉間に皺を寄せて佐藤を睨んだ。

「プロセルミナ！ さっさと逃げるぞ！」

天に向かって叫ぶと、佐藤の体が徐々に透明になって消えていった。

「本当に知らなかったんですか？ 召喚を同時に何回も行えるってこと」

今日の晩飯は、タケノコご飯と牛肉カルビ弁当五つ。それから、豚カツだった。微妙過ぎる組み合わせだ。

「多分だが、天使タイプの人形達はそういうことを教えてくれないんだろう。……というか、さっさとその人形を始末してしまいたいのだが」

豚カツを齧りながら言われても……という感じだった。

「そうか、そういえば天使タイプは主を間違った道を歩ませないために行動するんでしたね」

うむ、とタケノコご飯を口に放り込みながら頷いた。しかし、美香もカルマと同じくらいの食欲の持ち主なのでは……？ そのカルマは、今俺の背中に隠れている。始末したい、という言葉が出たからだろうか。

「召喚を何回も行えると知れば、欲の強いモノは召喚しまくるだろうからな。……だがミカエルよ、私はそんなに信用がないか？ 私はそんなに欲は強くないぞ？」

食欲は凄いいけどね。あ、美香に睨まれた。人の心が読めるのか？「申し訳ありません。ですが、教える理由も見当たりませんでしたので……」

そう言う金髪の男こそが、ミカエルだと美香は言った。あまりにもイメージ通り過ぎてちよつと笑ってしまったら、殺されかけた。天使がそれでいいのか、と言ったら攻撃は止んだが。

「おい男。主のために茶を用意しろ。それが礼儀だろ」

この天使、なんか偉そうなのである。

まあ、お茶くらいなら出してもいいかと思つてペットボトルの日本茶を差し出したら、変な目で見られた。

「ミカエルさんは食べないでいいんですか？」

美香の後ろに立つミカエルに伊織が話しかけた。

「私はよろしいのです。お気遣い感謝します」

なんだこの態度の差は。

「ほれ、牛だ。遠慮なく食え」

隣のカルマが食べてる途中の牛カルビ弁当の中から一枚の牛を箸で取り、ミカエルの目の前にぶら下げる。

「はっ！ お前の様な男に貰う飯などないわ！」

その光景を見て、カルマが後ろから手を伸ばし「返して」と抗議してきたから、口に無理矢理押し込んでやった。

「ところで……僕の家は随分と人が増えたね」

兄は苦笑しながら言った。

確かに、ここ数日だけで三人も人が増えた。これは驚くべきところなのかもしれない。

ちなみに、カルマの力の封印はいつの間にか解けてしまっていた。俺がカルマの力を欲するだけで解けると言うのだから、不便なんだか便利なんだか……。再封印したが、今日はこの前以上に大量の力

を使用してしまったため、「今日の夜お願い」とカルマが言ってきた。そして伊織に睨まれた。……何故だ。

血を飲ませる時、俺は妙な気持ちになる。

首を噛まれるのはあまりいい気分じゃないから、という理由で腕から吸血してもらっているのだが……やはり、痛いはずなのに妙な心地よさに襲われる。理由は不明だ。

そして、数秒後に「ぷはっ」とカルマの口が離れる。噛まれた所からは血が滴り落ちたりしてのだから、なんか怖い。しかもそれを舐めてるカルマも怖い。

なんだか、こういう生活に慣れてきてしまった気がする。人間の慣れとは、怖いモノだ。

## 共戦

「私の目的は元々お前たちじゃなくて、別の人形の処分だな」

ファミレスで大きなハンバーグを食べながら、美香は言った。

ちなみに、当たり前だが学校は休んだ。今日はテストだったのだ  
が…… そうも言ってられない。学校に行って佐藤がいたらテストは  
おろか授業にだって集中できない。だからと言って、家にいるとい  
うわけにもいかない。家の場所を佐藤が知っている以上、安心とは  
言えない。いつ家を襲撃されるかも分からないからだ。

そう言うわけで、家からなるべく離れたファミレスで昼食を取っ  
ている。カルマは牛ステーキを既に三回注文している。それを見た  
店員さんが驚愕しているのは、言うまでもない。

「その人形っていうのはもしかして佐藤？」

俺は、カルマと同じ牛ステーキを小さく切り分けて、少しずつ口  
に運んでいる。

「いいや。あの男と私が探している男は特徴がまるで一致しない。

私が探してるのは特徴的だからな」

「特徴的？」

「そう、白いんだよ。髪が」

俺の知り合いじゃねえか。

いや、まだそうと決まったわけじゃあないが……、この町に白髪  
なんて爺さんとか婆さんを除けば、あいつ…… 倉井 恭哉しか知ら  
ない。

俺はなるべく動揺を隠し、冷静に聞いた。

「その白髪の男って、そこら辺にいるジジイってオチじゃあ…… な  
いですよね」

「それじゃあ特徴的とは言わないだろう。若い男だよ。なんでも学  
生らしくてな。お前といい、あのメガネといい、白髪といい…… 最  
近は学生の人形遣いが増えているのかもしれないな」

適当に相槌を打ちながら、切り分けた小さなステーキを口に放り込む。

あ、カルマが四回目の牛ステーキを頼んでる。……金、足りるかな。

ファミレスを出たのは午後の二時だった。あまり同じ場所には留まるべきではないかもしれない、というのは美香の提案だ。それが吉と出るか凶と出るかは分からないが、ファミレスで人が少なくなる時間は危険かもしれないと思った。そんな訳で、今は商店街に向かっている。何故か、あの商店街は人がすくなることを知らない。人が多いところであれば、臆病な佐藤のことだから攻撃なんてしないだろう。

だが――。

「見つけたよ。悪慈君」

心地の悪い、背中を唾液でベトベトの舌で舐めまわされた様な……妙に粘つく声が聞こえた。

「おや、騎士団様までいるのかい？ ふふ、でも今回はそんなに上手くないよ？」

この大勢の人間がいる中で攻撃する気なのか……この男は。

「プロセルミナ、優しくもてなしてやれ」

指をパチンと鳴らした。途端、寒気が走った。とてつもない、寒気。体温が奪われて行って……意識が遠のいていった。

「う……あ……？」

目を覚ますと、高級そうな部屋の一角に俺は座っていた。壁は白くて清潔に見える。その壁には美しい天使の様な女の人

彫刻されていた。絨毯はテレビに出てた、どこかの宮殿なんか見たことがある様な物だった。しかし、それ以外の物は何もない。高級そうな部屋には、俺一人だけだった。大きなテーブルも無ければ、シャンデリアもない。明りは窓から入る月光だけ。そして、俺が座ってる壁と反対の壁に妙な存在感を放つ木製の扉があった。

この部屋が誰の部屋なのか……予想は簡単だった。

「……佐藤、いるのか？」

その問いかけを持ってましたとばかりに、木製の扉が開いた。

「お目覚めかい？ 悪慈君」

珍しいことに、佐藤はメガネを掛けていなかった。

「メガネはどうしたんだ？ 佐藤」

「君にはがっかりだよ」

俺の問いかけには耳を貸さずに話し始めた。……あ、そうか。メ

ガネは昨日、俺の家の前に落ちてたな。

「君は、僕の言うことには忠実だと思っていただけだね。しかし、あの騎士団の女は何ものなんだい？ あの一瞬で、人形と精神同体して、自分だけ助かりやがったよ。憎たらしいこと極まりない」

なるほど……。となると、美香の力は貸してもらえないということになるのだろうか。……なら、唯一の希望に賭けてみるかな。

「あの女は自分しか守れない弱いヤツだよ。お前が気にする程の人形遣いじゃないさ」

しかし、俺の身を拘束する物が何もない。縄で縛りあげるという考えは無いのだろうか。否、縛りあげる必要もない程に弱いのだと判断したのだろう。

「ところで、その発言から考えるとカルマもここに連れてきたってことか？」

「ああ、なんとかね。かなり手こずったよ……。かなりの数の悪霊どもを焼き払いやがったからね」

悪霊……？ どういうことだ。

「ん？ 君はプロセルミナの立場ってやつを知らないのか？ 悪霊

の女王だよ。人形になった今も変わらず、ね。君達は悪霊の力を使いまくってここに連れてきたんだよ」

手の内をばらすというのは、何か考えてのことなのだろうか……。  
「悪霊を使う移動には、かなりの力を使うからあまり使いたくないんだけどね」

「ところで、なんで俺を連れてきたんだ？ カルマが目的なら、カルマだけ捕まえばよかったのに」

「君は自分の人形を見捨てるのかい？ 意外と酷いんだね」

「人形に見捨てられるヤツよりはマシだよ」  
言っと、佐藤は顔をしかめた。

「ふん、まあいい。そんなこと言ってられるのも今のうちだ。もう、カルマは僕の物なんだからね」

聞き捨てならないことを聞いた気がした。

……今、こいつはなんて言ったんだ？ カルマは僕の「物」……？

「おいふざけるなよ佐藤。カルマは物じゃあない」

「物だよ。人形は物だ」

「ふざけんなって言うてんだよ」

自分の声とは思えない、とても低い声が出た。

「……さて、もう話をするのも飽きたな……。そろそろ、君をここに連れてきた『理由』ってヤツを教えてやるよ」

佐藤は、入って来いとあの木製の扉に話しかけた。

そして、ゆっくり扉は開いて……。そこから入ってきたのは……  
…。

「カルマ……」

カルマの目は赤かった。つまり、力の封印は解けている……。俺はいつカルマの力を欲した？

「ふふ、カルマは僕の物になったんだよ？ 力の封印解除の権利は僕にあるんだ」

俺の心を読んだらしい佐藤が答えた。しかし……。なぜ……。  
「契約だよ。プロセルミナの力で強制的な契約を交わさせたんだ。」

今のカルマの主は僕だ。キミはキミが呼びだした人形に殺されるんだ」

悪趣味……。そう思った。

カルマの額を見ると、契約の証拠だろうか……。小さな魔法陣が描かれていた。

「さあ、カルマ。悪慈を殺つちまえ!!」

瞬間、カルマの体が弾けた様にビクンと跳ねた。そして、カルマは重心を前に持っていき……。カルマと精神同体した時の俺と同じ身体能力を見せた。俺との距離を一瞬で埋めた。

そして気付いた。あれは俺の身体能力じゃないのだ。精神同体することで、カルマの身体能力が俺に移ったのだろう。

「……どうしたんだ、カルマ？ 佐藤の言うこと、きかなくていいのか？」

カルマは、腕に火炎を纏わせていた。その紅蓮に爆ぜる炎は、とても熱かった。しかし、腕は俺の顔面すれすれで止まっていた。

「おい、何をしているんだカルマ。さっさとその野郎の顔を潰してやれ」

カルマの顔を見た。これまでで一番泣きそうな顔だった。やはり、人形は物じゃあないんだな。再確認できた。コイツは、ちゃんと生きてるんだ。感情を持っているんだ。

「さて、佐藤。もう一度聞こう。お前は、人形を物だと思うのか？」  
「……僕の考えに変わりはない」

そうか、と俺は立ちあがった。カルマは、まだ体勢を変えられない。たぶん、契約とかいう力を抑えるので精いっぱい身動きできないのだろう。それがどれだけ必死なのかは表情を見れば分かる。

「カルマ、もういいんだ。お前はもう十分頑張っただろ。力を抜いていい。もう、俺達の見せ場ってのはないんだ。なあ、そうだろう？」

俺は何もないその空間に話しかけた。いや、実はとっくの昔にいたのだろう。その存在は、恐ろしいけど、恐ろしいからこそ、頼り

になるのかもしれない。

コイツが俺のためにいるのかどうかは、分からない。俺の目の前のバカを殺すただけに來たのかもしれない。ただ、そいつは……。

バカでかい音がした。音の正体は、壁を破壊する音。壁を破壊した正体は――。

「よう、バカ佐藤。それからアクジ」

白い髪して学ランに身を包んだ男。……恭哉だった。

最初、美香が来るかと思っていたが、恭哉が先に來たらしい。

「なあ、恭哉。お前、いつから人形遣いだったんだ？」

「その話はまた後でな」

恭哉は俺に向かって笑顔で言ってから、佐藤の方を向いた。佐藤は、何が何だか分かっていないようで啞然としている。

「なあ、バカ佐藤。知ってるか？ 吸血鬼タイプって、実はそんなに珍しくないんだぜ？ お前の運がないだけ……もうちょっと頑張って召喚陣描き続けときゃ良かったのになあ。アクジに手を出したのは間違いだっただ。俺の、小学生の頃からのダチなんだからよお」

そう言つと恭哉は手を上にあげた。……元氣玉でも出す気なのかと思つたが、見ればその腕にはカルマが出す炎とは質が違う……俺が知ってる炎じゃない炎が爆ぜていた。黒い炎……。これを見て驚愕しない人間など存在するのだろうか。

「来いよ、リリス。……この小汚い魂を喰らい尽してやろうぜい」

「……………俺も、ちょっとくらいは手伝うよ。……大丈夫だろ？ カルマ」

カルマの額にある魔法陣に触れた。瞬間、魔法陣は砕ける様な音と共に、消えていった。

すると、腕に纏わりついていた火炎は無くなり、安心したような顔で俺を見つめるカルマがいた。それから数秒後、無言で頷いた。

「へっ！ 寝ててもいいんだぜい、アクジ？ コイツ程度、俺一人で十分だ」

「そう言うわけにもいかないな、一発殴らないと気が済まない」

そうかいそうかい、と投げやりに言っていると、恭哉は構えた。佐藤を見ると、唾然から恐怖に変わっていた。

カルマが体の中に入ってくる感覚がした。嫌な違和感などではなく、ただ、心地のいい温かさだけを感知取れた。

「オラいくぞ、アクジ！ あいつの首を狩る準備はオーケーか?!」  
「おう！」

俺と恭哉は、ほぼ同時に駆けだした。

## 倉井 恭哉（前書き）

恭哉が人形遣いということで、登場してしまいました！

恭哉が人形遣いになった流れなんかを説明しようかなあと思いましてね。ちなみに、恭哉を人形遣いにしようと思ったのは遂最近のことです。最初はなんでもない普通の友人にしようと思ってしました。

## 倉井 恭哉

ある一人の少女が、俺の目の前に現れたのはいつのことだっただろうか。

その少女の髪は、俺と同じ白い髪だった。白い髪のせいで大勢の人間に除け者にされてきた俺は、その少女に憐みを向けた。きっと俺と同じ境遇なのだろう、と。

少女は、突然部屋にやってきたのだった。急に、俺の部屋にあるストーブが爆発したと思ったら、そこにいた。

「……？」

少女は困惑していた。俺も同じくらいに困惑していた。少女はキョロキョロと周りを見渡し、俺は少女をじーっと見つめる。

「えーっと……」

少女は、頬を掻きながら俺の顔を見て苦笑して言った。

「よろしくお願いしまーす……」

「……ああ!？」

大声を出すと、白い少女はビクツと肩を震わせた。

それから、いろいろな説明を受けた。力の制御、対価、精神団体。「ちよつとお、聞いてよお」

俺は聞かないふりをしてテレビを見ていた。

リリスと名乗る少女は、自分は人形として生まれ変わった悪魔だと言った。そんなとんでも設定持ちだすんじゃないやねえ。そう思ったが、今さっきストーブから出てきたことを考えれば、信じないというわけにもいかなかった。

「で？ なに、そんな悪魔様が俺になんの用があるってんだ？」

「用があつて来たわけじゃない。ちよつと興味があっただけ!」

「お前らは召喚陣だとかがないとこちらには来れないんじゃないのか？」

「別に、私達がこの世界に来るのは自由なんだよね。ただ、召喚陣を描かれたら強制的に転移させられちゃうの」

嫌な話だ。

「じゃ、お前帰れ。来るのが自由なら帰るのも自由だろ」

「そうでもないんだよねえ……。帰るのは自由じゃないよ。主が…

…つまり、あなたが死んで、初めて帰る権利を得られるんだよ」

…いつ俺はコイツの主になった。

というか、俺が死なないと還れないなら……。こいつは俺を殺す気か？

「それはないよ。言っただでしょ？ 私はあなたに興味があったから来たんだもん！」

迷惑な話だ。俺の唯一の友人もそうだが、俺には親という物がいない。事故で死んでしまった。バイトを中学側に内緒でやってるだけの俺がコイツを養える訳がない。

そう伝えたコイツの答えは意外なものだった。

「じゃあ、私も働けばいいんでしょ？」

「……それもそうだな。お前、外見ガキだけど大丈夫なのか？

…痛い、離せ」

耳を引っ張られた。

「言っとくけど、私は姿を自由自在に変えられるんだよ？」

「なら、ナイスバディな高校生くらいの女になってくれ」

「アイアイサー！」

瞬間に黒い炎がリリスを包んだ。そしてそこにいたのは、白くて長い髪を靡かせる、ナイスバディで美が付く少女となったリリスがいた。

それが、俺とリリスの出会いってヤツだった。親友には、さすがに隠しておくかと思った。

## 「黒炎の悪魔」 リリス

「ぐあっ！」

精神同体しているらしい恭哉は強かった。

佐藤はプロセルミナの力で悪霊を呼び寄せ、その悪霊を操っての攻撃。それに対し、恭哉は漆黒に染まった炎を腕に纏わせてそれを振り回している。しかし、一回振り回すごとに腕から鞭のように……というか、まさしく火炎放射のように炎を扱っているため、中距離にいる悪霊にまで攻撃が届いている。

俺は精神同体したカルマの力を使って、恭哉と同じように紅蓮の炎を腕に纏わせている。俺は、火炎放射というより爆発だった。攻撃が当たる度に、周りの悪霊を巻き込んで中規模な爆発が起きている。その爆発は時に、佐藤に届くらしく、時折短い悲鳴が聞こえてくる。

「くっそ！ プロセルミナ、悪霊の力を使って脱出するぞ」

戦況が不利だと判断した途端これだ。

「なに？ ふざけるな！ 悪霊を消費しすぎたなら、また呼べばいいだろ！」

佐藤が一人で騒いでいるように見えるが、たぶんプロセルミナの方は念話を使っているのだろう。そして、悪霊を消費しすぎたという言葉で分かった。……あいつは逃げられない。

「恭哉！ 佐藤は逃げられない、殺るなら今だ」

後ろで黒い火炎放射を派手にぶっ放している恭哉は、それを聞いた途端に佐藤の方へ方向転換した。俺もそれを真似て方向転換。そのまま、佐藤を一発殴ってやろうと、一瞬で距離を詰める。そのまま佐藤の顔面を思いっきり殴る。

「オラアア！」

佐藤を殴った瞬間、さっきよりも大きな爆発がした。どうやら、カルマはご立腹の様だ。

しかし、佐藤は生きていた。死んでいてもおかしくない攻撃を受けて尚、立ち上がった。恐らく、プロセルミナが悪霊の力を用いて防御に入っただろう。

「右に避ける、アクジ」

後ろから声がした。咄嗟に右に飛んだ。

瞬間に、轟音と共に漆黒の火炎放射が佐藤を飲み込んだ。火炎放射が止んだ頃には、佐藤は一欠けらの肉片も残さず消えていた。そこには黒い焼け跡が残る廊下だけが残っていた。

その後は、少し登場が遅れたせいで出番が無くなった美香がその家……というか屋敷の中を捜査をしていた。そして地下に幾つもの召喚陣と一つの契約陣というものが発見されたいらしい。

契約陣というのは、他人が持つ人形を強制的に自分の物にしてしまうという恐ろしいものだった。ただ、この契約陣には自分の人形の力も必要なのだと美香は言った。

契約陣に使う力は契約ということに長けている恭哉が持つリリースの様な悪魔タイプの人形やカルマの様な吸血鬼タイプの人形が適しているのだが、佐藤が持っているのは傀儡師タイプの人形ばかりだったらしい。故にカルマに対する契約の力は弱く、カルマも抵抗することができていたのだった。カルマが抵抗していて、ただでさえ契約の力が弱くなっていたところに俺という異物が介入してきたことで契約陣の力は崩れ、契約は解消されたということだった。……ふむ、俺には理解できない話だぜ。

「さて、恭哉……。きちんと話してもらうぞ。お前はいつから人形遣いだっただのかな？」

「まあまあ、いいじゃねえの。それよりラーメンが旨い店しっただけで、一緒に行かねえ？」

「あそこのラーメン屋さん行くの？　じゃあ、私は味噌ラーメン！」

この恭哉の腕に張り付いているナイスバディな女の子が悪魔タイプの人形というのだから驚きだ。悪魔とかいうから恐ろしい形相の人ならざる物を想像していたのだけれど……。

「おし、そこで話をじっくり聞いてやろう。カルマも、ラーメン食うか？」

無言でうなづくカルマ。ラーメン知ってんのかな、コイツ。

「よおし、じゃあ決まりだな。さっさと行こうぜい」

恭哉を先頭にして向ったラーメン屋は、しかし、ラーメン専門店ではなくてカレー専門店だった。確かに、カレーよりもラーメンの方が旨そうだったけど……。

「黒炎の悪魔」 リリス（後書き）

さて、リリースってどんな悪魔だったわけ？ていうか、そもそも悪魔だったわけ？EVAに出てきた奴の名前盗っただけだから分かんねー。  
まあ、ここでの設定は黒い炎を操る悪魔タイプ人形という感じです。  
そもそも、カルマも炎を操るとかいう伝説無かったと思いますし。  
そもそもカルマって何者？なんかのサイトで、ある吸血鬼の妻とか書いてあったから使っちゃったけどさ……。

## 戻ったはずの日常

青白い剣と交わるは火炎の刀。

「悪慈……貴様……！」

まあ、こうなることは目に見えてたけどね……。

何があつたのか……それを今からお伝えしようと思う。

最近起こった、ある事件。佐藤が人形遣いとして起こした事件は、あれだけの爆発や壁の破壊がありながらもニュースとして新聞やテレビに流れることはなかった。美香が言うには、やはり政府側が伏せているのだという。学校でも、佐藤は急な転校をしたということになっている。

今日は、金曜日。

カルマは、学校に来ることも無く、留守番をしてくれるようになったので、安心できるというものだ。しかし、その対価として甘い食べ物……主にショートケーキを買ってくる様に言われた。牛肉以外にも好みがあつたのが驚きだ。ちなみに、ケーキを買い忘れると血を吸われる。それも結構な量を……。

「おい、アクジ。今日お前の家行つていいか？」

放課後となつて人が流れる様に教室から出ていく中、一人だけ俺の方に逆流してきた者がいた。言うまでもなく、恭哉だ。

「来ない方が良いと思うけど？ ほら、騎士団副団長様とかいるし。お前だから忘れてるかもしれないけど、あの人はお前を目標にこの町に来たんだぞ？」

「分かつてるつて。……俺とお前なら、その副団長様にも勝てるんじゃないね？」

「俺は戦いつてヤツは、もううんざりなんだよ……。巻き込まない

でくれ」

「分かったよ……。お前は巻き込まないから、お前の家に行かせてくれ」

「巻き込む気満々だろ、お前。てか、俺の家で戦うな。全壊しかない」

ちなみに、美香はターゲットである恭哉を処分するまで居候させてもらう、と言っている。迷惑な話だ。どっかの宿に泊るという選択肢は無いのかと問うたところ、「宿を探すの、めんどくさいだろ」という返答が来た。ちよつと殺したくなった。というか、騎士団の方で宿くらい準備しとけよ。

「なあ、いいだろ？ カルマちゃんに会いたいんだって、リリースがうるさいんだよ」

ちなみに、リリースは姿を隠してるだけでこの教室内にいる。カルマもそうしてやった方がいいかなと思ったが、面倒なことになりそうだから止めた。

「あーもう、どうなっても知らねえからな！」

投げやりになう言うと、恭哉は「ようし、じゃあ行くかあ！」と俺を置いて、教室を出ていった。

それを追いかけて教室を出ると、既に人は少なくなっていた。

廊下から外を見ると、校庭を走ってる生徒が見えた。野球部だろうか。部活に忙しい皆さまは大変そうだ。俺は部活なんてモノをやる気にはならない。力を合わせてがんばろーとかいうヤツは、少し苦手なのだ。

俺は徒歩での下校だ。故にボロい小屋の様な自転車置き場に用は無い。さっさと学校の校門を目指す。

「オイオイ、待ってくれよアクジ」

後ろから、さっきまで話をしていた男の声がした。

「なんだよ。さつさと教室出て行っちゃうから、俺の家に来る話はなくなったのかと思ったぞ」

「俺が遊びに行くって言ったらそれは絶対に実行されるってこと、忘れたのか？」

確かに、小学校の頃から、遊ぶ約束をしてドタキャンされた覚えが一度もない。まあ、友人とかには優しいヤツだから、当たり前と言えは当たり前なのだが。

ということとで回想終わり。

「悪慈……貴様……！」

思った通りだった。玄関に入った瞬間に美香がそこに立っていた。俺が帰ってくるのが遅くなると、飯が送れるというのが理由で美香は玄関の中で仁王立ちしている。どうやら、恭哉と話をしていた門限である五時を過ぎてしまったらしい。いつもは部活などがないので遅れることはない。あるとすれば、ゲーセンに行ったときくらいだ。ていうか、門限五時って言うのがあり得な過ぎる。

すぐにカルマを念話で呼んで、精神同体できたから良かったというモノだ。炎の刀の媒介は玄関にあった鉄製の杖。爺ちゃんが生きてた頃に愛用していたものだ。しかし、俺はカルマの本当の力の片鱗を始めて見たかもしれない。刀の時は、火炎が纏っていただけだった。だというのに、今回は、炎自身が刀身としての形を成している。

その、正に炎の剣と化した杖は青白く光る剣を受け止めるのに十分すぎた。

「危ないですよ……美香さん」

「何故邪魔をする。それは、私の目標だ。完璧なまでに特徴が一致している！」

「でも、人形は見えねえでしょ？」

「何を言っている、そこに立っているではないか」

「え……！」

後ろを振り返ると……。

「なんで姿を現してるのおおお！」

思わず叫んだ。いや、ここで冷静になって「あれはクラスメイトです」と言えば良かったか……。だが、人形だとばれたということは、やはり人形と人間はちょっとした差異があるのだろうか。

「き、聞いてください美香さん。恭哉達は、あの佐藤の事件で俺を助けてくれたんですよ！？」

「……！ それは本当か？」

「あ、ああ。まあそうだけど……」

恭哉は、まさか副団長の美香がここまで野蛮だとは思わなかったのだろう。目を丸くして驚いている。

「……ふむ……、一度本部に戻って団長様に判断を貰うか」

判断を貰う、というのは日本語として正常なのだろうか。まあ、俺の国語力というものは壊滅的だからな。きっと合っているんだらう。

「いいか、悪慈。私の飯、ちゃんと残しておけよ」

そう言って、美香は走って道路の彼方へ消えていった。

一晩で帰れるほど本部という物は近いのか。ちよつと聖人形騎士団本部とか言う場所に興味が出てきたな。

「ようし、じゃ早速お邪魔しますかあ」

さっきまで目を丸くしていた恭哉だったが、美香がいなくなったから安心でもしたのか、さっさと靴を脱いで俺の部屋を指す。

『カルマ。もういいぞ』

念話で話しかけると、身体の中でカルマが頷く感覚がした様な気がした。そして、身体から抜けていく感覚がして、俺の隣にカルマが炎に包まれて現れる。しかし、精神同体する度に、カルマとの関係が深まっていったる気がする。のは、きっと気のせいだろう。

恭哉が俺の家に来た、ということに戻ったはずの日常が壊された

ら嫌だなーと思った。しかし、カルマやら美香がいる時点で日常に戻っていないことに気付いた。俺に日常が戻るときなど、来るのだろうか……。

## 日常になりつつある日常

「悪慈……ケーキ」

「すいません忘れましたああ！」

こんな幼女に土下座する時が来るだなんて……前までの俺なら思ってもいなかっただろう。

幼女に土下座をする俺をケラケラと笑っている恭哉が憎い。……。

「ですがですね、カルマさん。悪いのはあの白髪の男なんですよ。」

カルマさんにケーキを買っていかなくちゃって言ったんですけどね、『あんなガキにケーキなんか買ってどうする』と言ってきてです……」

「なあ……！？　ちょ、アクジ！」

爺ちゃんの部屋から持ってきた刀をカルマが構えた。

「ま、待ってくれカルマちゃん！　……お前アクジ！　汚ねえぞ！」

俺は、「っふ」と勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「まあまあ、カルマ。後で私が手作りクッキー作ってきてあげるから、ねっ」

恭哉の危機を救ったのはリスだった。さすが恭哉の人形と言ったところか……。

カルマは「クッキー……」と呟きながら涎を垂らした。

そうこう話をしているうちに、誰かが階段を上がってくる音がした。

「兄さん。そろそろ晩御飯……あれ？　恭哉さん？」

伊織だった。

「おう、久しぶりだなイオリちゃん」

伊織は小さくお辞儀をしていた。恭哉は、俺と昔からの友人だったから成り行きで伊織とも仲良くなってしまったのだ。兄貴は恭哉を嫌っていたが、今じゃあ親しく話をする事が多くなった。

「兄貴はもう帰ってきてるのか？」

俺の疑問に伊織は「もう六時前ですよ？ 帰ってきてます」と言った。いつもは五時半ごろに飯だから、ちよつと遅くなったな……。五時半に飯を食つと夜、腹が減るから良いんだけど。

「恭哉さんもご飯、食べていきますか？ ……そちらの方も」

伊織は恭哉だけでなく、リリースにまで問いかけた。優しいヤツである。優しすぎて悪い虫に集られないか、お兄ちゃん心配です。

「どうせなら、食つていこうぜ。な！ リリス」

「ほーい！」

なかなかの巨乳（どちらかという和美乳……？）を揺らしながら手をあげて答える。時折テンションが高くなるのは何故なのだろう。疑問に思つたが、わざわざ問うほどの問題でもないかと判断して黙ることを決めた。

「なんでお前はいるんだよ、ミカエル」

「ふん、主の飯が無くならぬように見張っているだけだ……なんなら、お前の飯も寄せ。主は空腹だ」

俺は睨んで、ミカエルは目をそらす。

「おい、あれつて天使タイプだろ？ やっべー、始めてみた」

恭哉は、なんか感動していた。

「天使タイプつて言つても、性格は天使なんかじゃねえぞ。ちよつと笑つただけで俺を殺そうとしてきたんだぞ。それに見ろ、あの我欲たつぷりそうな顔を……ペットは主によく似るっていうけど……」

なるべく小声で恭哉に言つた。だが……。

「聞こえてるぞ、男。……俺様がペットだと……！？ 侮辱するのもそこまでにしとけよ下郎！」

「ミカエルさん。僕の弟は頭が残念な子なんだよ。そんな「下郎」とか言つても伝わらないと思うよ」

兄までミカエルの味方かコンチクショ！。そもそも下郎とか普通

に意味知ってるからな？

今日の飯は、牛丼だった。しかし、ただの牛丼ではない。伊織の手作りだ。旨いということをわざわざ伝える必要もあるまい。

相変わらず、カルマは凄い勢いで食べていた。恭哉はそれを見て驚愕していた。兄貴はミカエルとなにやら話をしている。伊織はカルマの頬についた米粒を取ってやっている。

もう、これが日常でも構わないのかもしれない……ミカエルに罵られるのはムカつくけど、それが無くなったらなくなっただで何かが物足りないと思うてしまうと思う。

カルマがいなくなったら……あれ、想像できない……………。

## 処分命令

深夜、三時四十五分。喉が渴いたので、一階に下りて冷蔵庫の中を探った。視界に入ってきたのは、ただの天然水。刺激が強い炭酸水などよりはいいだろう、と眠気のせいか殆ど働かない脳が判断した。

人形との精神同体は人間にかなりの影響を与えるのではないだろうか。精神同体してる間は、カルマの身体能力を使用しているが故に瞬間的に相手との距離を埋める事ができる。だが、当然として、普通の俺の体ではそんなこと無理だ。それでも、精神同体していても運動神経や感覚が鋭くなってきた感じがする。

そう思った理由は一つ。ぞくり、と背中に刃物を突き立てられた感覚が走ったからだ。酷く冷めた、冷徹な刀身で服を裂き、今まさに皮膚の内側に入り込み肉をえぐろうとしている様な……。それが殺意や殺気なのだと気付くのに数秒の時が必要だった。

天然水が入ったペットボトルのふたを閉め、冷蔵庫に戻す。

『……カルマ、聞こえるか？』

念話が寝てるときに通じるのかどうかは知らない。

……返事はない。つまり、通じていない。それが俺のカルマに話しかけるというイメージができていないだけなのか、実際寝てるときには通じないようになっているのかは定かではないけど。

とりあえず、頭をフル回転させる。眠気なんてとくに吹っ飛んでいる。

呼吸を整え、後ろの『気配』を見遣る。

「なにを、そんなに殺したがってるんですか。美香さん」

後ろに立っていたのは美香だった。だが、その眼光は鋭く研ぎ澄まされた剣そのものだった。暗闇のせいでよく見えないが、たぶん、鬼神の様な顔をしているのだと思う。

美香は右手に何かを持っているようだ。引きずっているように持

っていることからして、そんなに大したものじゃあないだろう。しかし、結構大きな荷物の様だ。

「本部からの報告だ。……残念だが、目標とお前が手を組んで『悪事』を働かす前に速やかに処分せよとの命令が出た」

「そりゃビックリですね。ホント、心臓止まっちゃうくらい笑えないジョークです」

美香の片眉がぴくつと動くのを見た。

「カルマ……！ 起きてくれ！ 俺じゃあ、美香の相手にならない……」

余裕など全くない。いつ、幾憶もの青白い剣に串刺しにされてもおかしくない状況。

そして、気付いた。美香の右目が、青く光っていることに。ミカエルの能力か何かだろうか。一体何をしようとしている……。

「ジョーク……そうだな。私もそう思いたい。だが、本部にはジョークなんて言う人間はいない。どれもお堅い頭を持つてる人たちだ。……できれば、抵抗はするな。カルマは殺すが、お前は殺したくない」

カルマを殺す。そう言った美香は、完全に仕事モードだった。それも、始めて会った時以上に。

「カルマは殺させない……。俺はあいつの人形遣いだ。勝手に殺されちゃ困る……」

「だが、残念だ……」

そう言って、美香は右手の荷物をゆっくり俺の前にかざす。

「……………」

カルマだった。

「分かっただろ？ もう、お前の人形は助からない。お前が抵抗を示すのならば、今すぐ、ここで人形を殺す」

何故、すぐにカルマを殺さなかったのか。それはたぶん、俺に抵抗させないためだろう。カルマも起きていればきつと抵抗しただろうけど、力は封印されている。幼女の力が、美香などに敵うはずが

ない。しかし、そもそも寝ている少女の力など……美香にとって皆無であり絶無だ。

「で？ 俺はどうすればいいんだ」

「速やかに本部に連行される。今、この家は全方位を誇り高き騎士たちが囲っている。抵抗は無意味だからな」

仕方ないだろう。カルマがこんな状態で、家は囲まれている。この状況の俺はさながら、幼女を誘拐し、立て籠もった犯人そのものだった。

「オーケイ。分かった。だが、本部に行ったらカルマは絶対に殺されるのか？」

「無論だ」

「なら、お前の人形も殺せ」

「……なに？」

俺は、一体なにを言っているのだろう。

美香は目が飛び出してしまう程に見開いて驚愕を示した。

「ミカエルを殺せと言っているのが、分からないか？ 人形のカルマが処分されるのに、人形のミカエルが殺されないのはおかしいだろう」

おかしくなどない。ただ、有害か無害かの違いがあるからカルマは処分されてミカエルは生かされる。そんなこと分かっているのに……。しかし、この際その違いは関係ない。そうこれはただの時間稼ぎ……。

『……悪戯。これは一体何事？』

目を覚ましてくれたらしいカルマが念話で聞いてくる。さすが、空気を読んでくれるカルマである。

『騎士団の本部からの処分命令だよ。……聞くけどさ、お前このまま殺されるなんて、ご免だよな？』

『……うん』

カルマは頷いた。その声は、鈴の様に静かに脳内に響く。カルマの声は、俺の心を落ち着かせてくれる。

「……………」

「何を無言になってるんですか、美香さん？ 早く答えてください。ミカエルを取るか、仕事を取るか」

美香は歯を食いしばっている。たぶん、かなり困惑しているのだろう。急な俺からの要請。そして、仕事を取るべきなのにミカエルを手放したくないという心が、美香に隙を作っている。

「……分かりました。じゃあ、少しばかり待っててください。兄貴に手紙を書いておきたいんで」

そう言つて、俺は美香とカルマの二人を残し、二階に上がった。

実際、兄に手紙など書く予定などない。ただ、俺の部屋に刀があっただけ。

『……カルマ、精神同体』

すると、カルマが俺の体の中に入ってくる感覚がする。同時に下から、階段を駆け上る音が聞こえた。

「さつさと逃げますかねえ。……伊織にくらいは会っておきたかったな」

無論、逃げ切れる自信などない。美香は家の周りを騎士団が囲っていると言っていた。俺の家は大きくはないが、決して小さいわけでもない。なら、かなりの数の騎士団が待ち伏せしているだろう。

俺は、窓を開きカルマの身体能力を貸してもらい、隣の家屋根に飛び移った。

このまま、行く宛てもないまま走り続けなくてはいけないのだろうか……。否、行く宛てはある。だが、あいつの家にも騎士達が行っている可能性がある。……いや、だからこそあいつの……恭哉の家に向かうべきだ。恭哉と協力体制に入れば、なんとかなるかもしれない。

足を方向転換させ恭哉の家に向かった。

## メアリー・シャーロック

今の時間は、きつと四時頃だろう。追手は来ない。その安心できるはずの状況が、逆に恐怖を駆り立てた。もう日も出始める頃だろうか。

恭哉の家は、かなり近いのだが、騎士団が来ているかもしれないという状況からするとあまり近づきすぎるのは良くないとカルマに言われた。俺はなるべくカルマの意見を尊重したかったが、「ごめん」と一言だけ、独り言のように呟いて恭哉の家に向かった。カルマは、いつもの無言のままだった。

案の定。カルマとの精神共同体で視力がよくなっている俺の目に騎士団だと思われる集団が入ってきた。

一分くらい、赤い屋根の上でその状況を見ていたが突然、恭哉の家から黒い爆発が起きた。それが恭哉の抵抗だと瞬時に判断しその爆発の中から現れるだろう恭哉を探す。

「よう、アクジ。やっぱお前の家にも来たのか？」

「うわぁ！？ お前、いつの間に……」

探す必要も無かった。精神共同体していて感覚が敏感になっているはずの俺が気配というものが感じ取れなかった。この男、恐ろしいにも程がある。

「さあてと、さっさと逃げるかぁアクジ」

そう言つて、踵を返しさっさと走っていつてしまう恭哉の背中を追いかけた。

「なんで俺まで処分の対象にされなくちゃいけないんだ？」

俺は既に分かり切ってることを愚痴として言った。

「俺の友人で人形遣いだからだろうが、それくらい分かっての」

丁寧にも教えてくださりやがった。

さて、しかし、逃げるも何も一体これからどうする気なのだろうか、この男は。

「まずは、メアリーの元に向かう。……メアリーってのは金持ちのお嬢様だ。母国に追われて日本に来た人形遣い。ほら、あの町役場の近くにある幽霊の目撃談が絶えない屋敷があるだろ？ あそこに住んでんのさ」

確かに、聞いたこともあるし見たこともある場所だ……というか、恭哉とおふざけ半分で侵入したこともあった。この町では有名すぎる場所。有名すぎるが故に、騎士団もまずその屋敷に俺達が隠れるだなんて思わないだろう。恭哉がそんなことを考えてる様に思えた。

屋敷は、久しぶりに見た。俺が小学校の頃、恭哉と悪戯をしようとして企んで忍び込んだとき以来だ。あの時は、本当に恐ろしかった。幽霊の存在をホントに信じてしまうほどに。

しかし、その恐ろしい記憶と違い、今は美しい作りとなっていた。廊下は淡く揺れる蝋燭の火に照らされ不思議な雰囲気放っていた。どこか、佐藤の家を思い出してしまう様な壁画。その壁画を眺めながら歩いていくと、大きな木製の扉にぶつかった。

「いつてえ……」

「何やってんだよアクジ。それでも、俺達は追われてんだぜ？ もうちょっと緊張感持っていこうぜい」

そうは言われても、妙に現実味が無いのだ。

俺は「すまん」と言っただけ顔をを見た。何故か笑っていた。

「さあ、ここにメアリーが待ってる。メアリーならきっと助けてくれるさ」

そう言っただけ、木製の重そうな扉を簡単に押し開ける。

そこは、とてつもない部屋だった。シャンデリアの放つ存在感。小さな置物から大きな家具、それら全てに異様な圧迫感を覚えた。  
「あら、恭哉さんじゃありませんか。こんにちは。……そちらの方は？」

その部屋の窓際で木製の貴族が使っていそうな椅子に座っている者は、清楚というのが最も似合う女性だった。

カルマよりも薄い金髪と、ピンクのドレスがとても似合っている。膝の上に気持ちよさそうに寝ている猫が羨ましい……。目は碧眼で、顔に浮かべている笑顔はとても優しそうだっただ。

「紹介するよ。こいつは俺のダチで……」

恭哉が俺の紹介をしてる間にも、俺はそのメアリーという女性に見惚れていた。

「……ほら、どうしたアクジ。自己紹介」

「おう……。えっと、柿崎悪慈つています、よろしくつす」

なにも面白いことを言えない自分が憎かった。まあ、面白い人生を送って来たわけじゃあないから当たり前といえば当たり前なのだが。

「はい、これからよろしくお願いします。私は、メアリー・シャーロックと言います。以後、お見知り置きを」

その笑顔は、美しいとしか言い表すことができなかった。声も落ち着きがあつて、カルマと同じように鈴のようで、すぐに消えてしまふけど、俺を落ち着かせてくれる綺麗な音色だった。

「黒ネコ」 アーチャー

午前九時。先程までメアリーのベットを貸してもらって寝ていた。その所為で、頭の回転が妙に遅い感じがする。それにしても、いい匂いだった。

「なるほど……大方の話は理解しましたわ。では、この屋敷に二、三日泊ってくださいませ。それ以上の滞在は、騎士団の方々に怪しまれますわ。私も、あなた方についていきますけど……行き先はどうなさいます？」

メアリーは話をすぐに飲み込んでくれた。伊織と同じ……否。もしかすると、伊織以上に優しいのではないだろうか。

「お金とかの問題を考えると国外は無理ですよね。とりあえず、俺達が人形遣いだなんていうことは公に出る事はないと思うから、バイトくらいはできそうなものですけど……」

「だけどよお、住所がないぜ？ それに、金ならメアリーが……」

「私だつてここに来てもう数年も経ちます。それだけ長い間住んでいれば、かつてのお金なんてどこへやらです。……確かに、住所がなくなるというのは厳しい話ですわね……」

行き詰った。逃げ切るには、金が必要だ。住所がないんじゃないかとうしろもない……。

「あ、そうでしたわ。私の別荘に行くというのはどうでしょうか。長い間野放しにしていたので、かなり汚くなってしまっていると思いますけど……」

別荘を持つてるなんて、やっぱりお嬢様なんだなあ。お金が少なくなつても、それは変わらないのだろう。

「じゃあ、とりあえずその別荘を拠点としてバイトや仕事を見つけましょう。……そういえば、メアリーは何歳なんですか？」

本当は「メアリーさん」と呼びたいのだが、メアリーから「メアリー」と呼んでくださいと強く念を押された。

メアリーは人差し指を俺の唇にあてて微笑んだ。

「レディーに大してその発言は、少々デリカシーが無いと思いませんか？」

「あ、すいません……」

「……………」

メアリーの膝に乗ってる黒ネコが急に立ち上がり、窓を見た。

「……いけませんわね、早くも嗅ぎつけられたみたいですね」

「……そんなバカな。」

「悪態、対価……」

俺の隣にいたカルマが俺の背中の中を引つ張って対価を要求してきた。こんな時にか。

「こんなときだからこそ」

昨日で結構使っちゃったってことか。……昨日というか、今日の

朝か？

「分かったよ」

言って、袖をまくる。ちなみに、恭哉は制服で俺は執事服を着ている。

恭哉は、学校の制服を着てきたから良いモノの、俺はパジャマのまま逃げてしまったのだ。故に、メアリーから服を拝借しようとしたところ、危く、ヒラヒラのドレスを着せられることになりかけた。それで、適当に目に入った執事服を貸してもらったことにしたのだ。

「はむっ……………」

……皆さま分かってくださると思うが、今のは俺の腕をカルマが噛んだ音だ。決して、ハムを食べたいとか言ってるわけではない。

「あらまあ」とメアリーが驚いた表情をした。「あなたの対価は悪態さんの血、なんですわね」

「……………」

「はい、貧血で戦闘中に倒れたら元も子もないですけどね。だからと言って対価を払わないわけにはいかないし」

無言で血を吸うカルマの代わりに俺が答えた。

「それでは、お昼ご飯はニンニク炒飯にでもしましょうか」

最高の笑みを見せてくれた。ちよつと和んだ。

「お前はアクジを殺す気か？ ニンニクは貧血してる動物に与えるのはよくないんだぞ」

「お前うるせえ。せつかくメアリーが作ってくれるって言うてるんだからさ」

「……俺はお前のためを思ってるんですけど……」  
とても追われている人間の会話とは思えない。

「あら、大変」

メアリーが急に大声をあげた。

「騎士団の方が屋敷の中に入ってきたそうですわ」

……やはり、こんな会話してる暇など無かったのだ。カルマの力は封印してある。

「……精神同体、しておくか」

カルマは無言で頷いた。目の色が青から赤に変わり炎に包まれて消えた。

「おし、リリスは既に準備ばっちりだぜい」

リリスは警戒してずっと恭哉の中にいたらしい。恭哉が腕を構えると、黒炎が絡まる様に出現した。メアリーは椅子から立ち上がり、猫はメアリーの肩の上に乗った。

「お願いできるかしら、アーチャー」

「いいのか？ 俺では、相手にならんぞ」

どこからか、低音の地面を轟かす様な声が聞こえた気がした。俺では相手にならない……か、弱気な発言だ。

「お願い」

「……御意」

途端、黒ネコが肩から下りた。そして、酸素を飛ばす勢いの突風が黒ネコを中心に吹いた。

「さて、この姿になるのはいつ以来だろうな」

突風が止むと、そこには、驚くことに黒ネコの面影などどこへやらな男が立っていた。髪や服は黒い。肌は普通というべきか。まあ、日本人の特徴である黄色人種であることは間違いない。

「ほら、さっさと逃げろ。安心しろメアリー。俺も、後から追っ

「……絶対よ」

「yes, my master」

メアリーが行きましょう、と言って窓を開け放つ。

「……えっと、俗に言うお姫様抱っこかをしてくれませんか？」

「アクジ、やってやれ」

「俺かよ、別にいいけど」

メアリーは人形遣いだと言ったけど、精神同体できないのだろうか……？ だとすると傀儡師タイプなのだろう。

「じゃ、行きますよ、メアリー」

精神同体した俺の力では、メアリーは鳥の羽よりも軽く感じた。

窓を飛び出し、隣家の屋根に飛び移った瞬間に、扉が勢いよく開く音がした。その後、振り返ると窓から強風……というか爆風が吹き荒れているのが見えた。

もしかして、さっきの黒ネコが……人形？

## 別荘

アーチャーは、人間の成り損ないであり、人形の成り損ないである。メアリーはそう説明した。

「アーチャーはですね、元は人形遣いだったんです。ですが、人形に取り込まれてしまつて……だけど、なんとか自我だけは保つてしまった……。猫の姿をしているのは、俗に言う力の封印をしているからです。人形に取り込まれて、人間とも人形とも馴染めない彼を、私が拾つたんです」

人形に取り込まれる、なんて話があり得るのかという疑問が頭に浮かんだ。だが、メアリーが言うのだから、きっとあり得てしまうのだろう。

——人形は人形遣いに取り込んで、更なる力を求めた……。ですが、失敗に終わった。その結果がこれなんです。

メアリーは俺の胸の中で寂しそうな顔をして言った。

「でも、俺にとってアーチャーは羨ましいです」

本音を言つた。メアリーは「何故ですか？」と言つて首を傾げた。「だってメアリーの膝で寝れるんですから」

結局、こんな理由だけどネ！

それを言つとメアリーは一瞬きょとんとしてからクスクスと笑つてくれた。

「膝枕をご所望ですか？ 私の膝なんかで良かったら、いつでもよろしいですよ？」

「おい、そのアツアツカップルさんよう。これからどうするのか決めてからにしてくれないかな？ そういうの」

空気を壊すことに長けている恭哉が言つた。

「とりあえずですが、このまま私の別荘へ行きましょう。あの別荘は海の近くにあつてですね、そこから見る景色はまた格別なんです」  
メアリーは笑顔で言つた。きつと、自慢の別荘なのだろう。

「よし、じゃあ、さつさとその別荘に行きましょう。夜になったら、その格別の景色も見れませんか」

その時、俺の中にいるカルマが揺らいた気がした。

『どうかしたか、カルマ？』

『……何か、来る』

「……！？」

カルマが言ってから数秒後、爆風が吹いた。

「すまない、遅くなった。なかなか、腕のいい奴を持ち始めたのだな。騎士団も」

アーチャーだった。

「さつき、俺では敵にならないって言ったくせに、随分とお早いお帰りですね。アーチャー」

「ああ、正しくその通りだ。あいつらなんかじゃ、俺の敵にならない」

アーチャーは余裕で、不敵な笑みを浮かべていた。

「……その少年、主が世話になってるな。疲れただろう。代わってやろうか？」

「お気遣い無用。精神同体してるから、あまりカッコよく言えたことじゃないけど、まだ全然疲れてなんかいないよ。ていうか、軽過ぎで投げ飛ばしちやいそうで怖いよ」

「……決して、投げ飛ばさないでくれよ？」

メアリーはクスクスと笑いながら、そのやり取りを見ていた。

しかし、アーチャーには愛嬌が持てる。それこそ、ちょっと笑ってしまっただけで殺そうしてきた野蛮な天使なんかよりは、全然いい奴だと俺は思った。

……今頃、美香達はどうしているのだろうか。俺の搜索とか、諦めてくれればいいんだけどなあ。

いや、もつと先に気にするべきことがある。兄と伊織だ。ただでさえ迷惑を掛けてきた俺が、今度は家から消えたのだ。帰る事ができる日が来たら、まず速攻で謝ろう。それから、小学生の頃、よく

やってあげた様に伊織の頭をクシャクシャに撫でてやろう。家には、兄のせいでまた意味が分からない物が増えていて、俺を驚かしてくれることだろう。

そんな、来るかも分からない日を想像して、メアリーの様にクスクスと笑ってしまふ。……ダメだ。俺じゃあ様にならない。そんな俺を、メアリーは不思議そうな目で見ていた。

メアリーの別荘は、かなり大きなものだ。水やガスは止まっているから、コンビニまで行って水を買って来なくてはいけないのが不便だが……かくまってくれる場所があるというだけでも有り難い話なのだ。気にしないでおう。

そして、メアリーの別荘から見る海は、まさしく絶景。見た瞬間に戦慄してしまった。太陽が太平洋の彼方へ沈んでいく様など、絵画の中に入ってしまったのではないかという錯覚を覚える程だった。正しく、これは芸術だ。自然が織りなす、最高傑作。

「お手洗いは、水を流した後、替えの水をかならず入れてください。そうすれば使い物にはなります。火はカルマさんカリリスさんにお願いたいのです……」

「……………」と、無言で頷くカルマ。

「まっかせてー！」と、ハイテンションなりリス。

この二人のテンション差は、本当になんなのだろうか。

「じゃあ、なるべくこの家から半径一キロ以内で行動してください。そこまでならアーチャーが楽に見貼れるので」

「ああ、俺の楽のために頼む」

自己中だ。

「それでは、後は自由行動です。海に行ってもいいですけど、もう太陽も沈んでしまつでしょうから、部屋の整理や掃除をするのをオススメしますわ」

ふむ……俺はどうするかなあ。メアリーさんの部屋に行って、膝枕を頼んでみるか。……そんな勇氣、あるわけない。てか、膝枕とか恥ずかしい。

「仕方ない。部屋の掃除をするか」

そう言って俺は、これから自分の拠点になる部屋を掃除することにした。

## メアリーの過去

別荘の部屋は落ち着くことができない。

純白の壁、綺麗なシャンデリア、真っ白なベッド。床には高級そうにも程がある絨毯が敷かれていた。ベッドで寝ようとしても、寝る事ができなかった。部屋を無駄に歩き回ることもできなかった。

「まったく……こんな場所にかくまってもらっちゃっていいのかな……」

そんな疑問が浮かんでしまう程だった。

「いいんですよ。もう、使うこともないのですから」

いつの間にか、部屋の扉が開いていた。

メアリーはいつもの優しい笑顔で部屋の中に入って扉を閉めた。

「なにか用ですか？」

「用がなくては部屋に来てはいけないのですか？」

「い、いや、そういうわけじゃあ……」

メアリーは笑顔を崩さぬまま、部屋の中央に立った。そのまま、クルリとピンクのドレスを翻してベッドに座る俺を見ながら言った。

「これで、二人きりですわね」

「……鼻がむず痒いですね」

俺は鼻を掻きながら言った。メアリーは「恥ずかしがらなくても結構ですわよ」と、笑顔を崩して苦笑した。

「さて、恭哉さんとリリスさんは買出し……カルマさんは別部屋にいます。今のうちに、二人だけでこの後どうするか、話し合いませんか？」

そう言いながら、俺の隣に座った。

こうして見ると、メアリーは本当に美しい女性だった。気品のあふれる動作が俺の視線を釘付けにさせた。ちょっと長いまつ毛に、淡い色をした碧眼。真っ白な肌に、薔薇の様な唇……。

「……どうかなさいました？」

「いや！ なんでもないです……」

いつの間にか見惚れてしまっていた。

「私はですね、これでも十七歳なんですよ」

「へ……？ え？！ じゃあ、俺と同じ年なんですか？」

素直に驚いた。だって、もつと年上だと思っていたから。

「なんですか、その驚きようは。まさか、年上に見られていたなんて…… ショックですわ」

本当にショックだったのだろうか、メアリーは笑顔を崩した。

「え、いや！ そうじゃなくてですね……。だって、母国を追われて数年経って……」

メアリーは、「ああ」と思い出したような仕草をした。

「あれは私が十二歳のときでしたからね……。確かに、それをお伝えしていなければ年上に見られて当然ですわね」

納得してくれたようだ。なんか助かった……。

それから、メアリーは急に真剣な顔になった。

「私のお母様は何事に対しても厳しかった……。それに相反して、お父様は何事に対しても優しい方でしたわ。ですが、そのお父様はマフィア関係の仕事に手を出してしまって……。ある情報が漏れてしまったのです。お母様は殺されて、お父様は私だけでも助けようと自家用の飛行機を用意してさっさとマフィアに殺されてしまいました。たわ。私は、最終的に極東の地……日本に降り立ってその数年を、お父様の隠れ家であるあの屋敷に静かに暮らしてきました。あのアーチャーと一緒にね」

「アーチャーとだけ……ですか？」

「まあ、殆どアーチャーだけでしたわね。時折、恭哉さんがご飯を持ってきてくれたりしましたが」

「へえ……そういうば、アーチャーとか恭哉とはいつ出会ったんです？」

「恭哉さんは、あなたと一緒に屋敷に忍び込んだときに会ったんです。あなたは、さっさと帰ってしまいましたけどね」

クスクスと、思い出し笑いをした。確かに、俺は幽霊が出たと思って、恭哉を置いて一目散に逃げてしまったけど……まさか、その正体がメアリーだとは思うまい。

その思い出し笑いに、俺は苦笑を返した。

「それで、アーチャーはですね……私がいた国はイタリアなんですけど、そのイタリアのある裏路地で傷だらけの黒ネコ……アーチャーを見つけたんです。それで、人形について教えられて対価を払ったところ、私が人形遣いになってしまったということです。……マフィアに漏れた情報の一つが、私が人形遣いであるということです。……マフィアは一度、廃業してしまいましたが、人形を持ったマフィアが突然現れ出して……」

なるほど、話の流れは大体把握できた。

「大変……だっただすね」

「そうですね。命が幾つあっても足りないというのは、ああいうことを言うのでしょうか」

正にその通りだろう。マフィアに追われて、極東の地に来て……しかし、人形遣いだから下手に出回るわけにもいかなかったと……。十七歳にしては、壮絶な人生を送ってきたようだ。

「えっと、なんで急にこんな話を？」

「ああ、それは……あの屋敷で、あなたが私の年齢を聞いたでしょう？ だから、あなたが気にならないように、いろいろ話しておこうと思ひまして」

いつもの笑顔で返してくれた。確かに、これで気になることの一つは消えたと言っていていいだろう。人を気遣えるお嬢様……。素敵だ。それはきつと、厳しい母と優しい父の教育がとてもよかったからだろう。

「そういえば、その日本語はどこで覚えたんですか？ とても上手ですけど」

「私のお母様が、どこの国に行っても大丈夫な様にと十三カ国語くらい覚えておけて……」

驚くを通り越して呆れてきた。十三か国って……。

この同じ年齢だというお嬢様には驚かされるばかりだ。

「それで、今後のことです……」

それから一時間程話し合いをして、メアリーは自分の部屋へ帰っていった。メアリーの過去を知ってしまったが……果たして、メアリーはこんな過去を喋ってしまったって良かったのだろうか。いや、俺が気にすることでもないのだが。

## 「騎士団の刺客」 エリザベス

別荘にある部屋のベッドに入ってから小一時間の時間を要して、やつと眠れた。が、すぐに起きる羽目となった。

それは、カルマとの出会いを思い立たせる……隕石が落ちたような音と衝撃だった。

「悪慈……」

「大丈夫ですか、悪慈さん！」

メアリーとカルマが俺の安否の確認をしに来てくれた。その数秒後に恭哉とリリスも俺の部屋に来た。

一体何が起こったのか……。その答えはすぐに分かった。

「ふむ……この部屋で良さそうじゃな」

部屋のガラスを割って部屋に突然入って来た者は、女の子だった。カルマと同じ体形。長い銀髪が美しい。

「なんじゃ？ お主ら、まさかとは思うが……騎士団がお主らの居場所を特定するのに時間が掛かると思っていたのか？」

口調とか仕草とかが昔の人みたいだ。顔にはニヒルな笑いが浮かんでいた。

「……ん？ 今、騎士団って言ったか？」

「あなたは騎士団の……エリザベス？」

「その名で呼ぶな。虫酸が走ると何度言ったか覚えてられんぞ！ リズと呼べと言っておるだろ！」

「は、はあ……」

メアリーはその妙な気迫に頷くしかなかったらしい。

「一体何事だ……」

遅れて登場したのはアーチャー。

「お？ 貴様は……ハハ！ 珍しいモノを見たな。貴様が表に出て活動するとは」

「……リズ、か」

メアリーとアーチャーはこのリズという女の子と顔見知りなのだろうか。心なしか、アーチャーは呆れているようにも見える。

「で、リズ……キミは一人で来たのか？」

「まさか……そんなことがあるわけなかるう。イブは連れてきている」

「ご無沙汰しています」

リズの後に立っている少女がイブだろう。金髪でゴスロリ……何故だ。

「あの……なんでそんな服を……？」

「ああ、これは……趣味じゃ」

「……は？」

「だから、わしの趣味じゃ！ 悪いかな？ こんな趣味じゃ悪いのか！？」

なんかキレられた。いや、だから何故だ。

「こういう人なんです」

メアリーもアーチャーと同じように呆れている様だった。

「あの……この変な人、なんなんですか？」

メアリーはちよつと考える仕草をしてから教えてくれた。

「えつと……まあ、騎士団の一人ですわね。変な人ですけど、実力は本物です。変な人ですけど」

大事なことなので二回言いましたってヤツだろうか。

「ちょ！ 誰が変な人だ！ ……っは！ メアリーこそ、いつも変らぬ服で……小汚くって発育も悪いただの小娘ではないか」

「な！ 小汚くなんかいいです！ 服は替えがあるんです！ とうか、誰の発育が悪いですって！？ これでも、結構あるんですからね！ ……あなたこそ、全然成長の兆しが見えませんか？」

ほほう、結構あるのか……。

「……発情するなよ、少年」

「発情……」

「んな！？ し、してねーよー！」

カルマはその二文字を聞いて何を思ったか、俺の顔を面白くなさそうに見ていた。

アーチャーは何かを悟りきっているような顔になっていた。

「この二人は会う度にこんな感じだ。まあ、良きライバルとでも言っておこうか」

ライバル……。一体なんのライバルだ。

「……発育のライバル、かな」

どんなライバルだよ！ それにどう見てもメアリーの方が勝ってるじゃん！

そう叫ぼうと思ったらアーチャーの手が俺の肩を押さえて首を横に振った。やめておけ、という意味だろうか。

「ふ、ふん！ まあいい。わしの目的は貴様らの捕獲だ。さっさと捕まっておけ」

「嫌です」

「即答しなくてもいいではないか！ ああもういい！ 力を尽くしても捉えて……。や……。……。るう……。…」

「ああ！ わが主よ！」

「また……。か」

「またですわね」

なんかリズが倒れた。イブはそれを咄嗟に支えて、アーチャーとメアリーは「はあ……」と大きなため息をついていた。カルマは何故か、メアリーの胸部をじーっと見ていた。恭哉は一体なんなんだ、と寝ぼけているような口調で言った。実際、半分寝ているのだろう。一言も発していなかったし。そんな恭哉を見てリリスは「大丈夫？」と心配そうに恭哉の顔をうかがっている。

そして、リズが倒れた後は、嵐が去った後の様な静けさだった。

## 理想の関係

メアリーが本当に優しい女性なのだと再認識した。

突然倒れた、敵であるはずのリズを自分の部屋で休ませたのである。俺には理解できない、とアーチャーに言ったところ、「リズとは昔からの仲だからな。……あいつ自身、優しく接することしかできないヤツだから」とのことだった。

「そういえば、メアリーとリズの会話のとき、メアリーの本性を見た気がするんだけど……」

「ああ……決して、あれが本性というわけではないさ。ただ、リズとメアリーは特別でな。ほら、リズは人に本音をバンバンぶつけるタイプってことはなんとなく分かるだろ？」

俺は曖昧に頷いた。

「だがメアリーは逆に他人の機嫌を損ねないように、と気遣いばかりをしている。……母親が厳しかったからな。我儘を言っと、酷い仕打ちがあつたものだよ。あの時は毎日びくびくして過ごしていたからな……」

アーチャーは、寂しそうな目をした。いや、懐かしい……？ 違う。……分らない。

「で、リズとメアリーは相反する性格の持ち主なわけだ。その相反する性格が生み出した関係なんだよ。あれは。……理解できるか？」

「……羨ましがってる」

答えたのは意外にもカルマだった。アーチャーにとってもカルマが答えたことは意外だったのだろう。一瞬、驚いたのが見て取れた。「そうだ、正にその通り。リズは気遣いを知らない。だから他人を気遣えるメアリーを羨ましがる。メアリーは本音を言うことができる。ない。だから、他人に対して本音をバンバンぶつけることができる。リズが羨ましい。……メアリーは、リズの前では本音を言えるように努力しているのだよ。リズも、あれでマシになったほづさ。昔

はもつと酷かったからな」

「なんかなだで、あの二人の相性はいいってことなのか？ ……まあ、懂れるけどな、そういう関係」

「そう、だな。ああいう関係を持つ人間は、とても強いものだよ」

アーチャーは、どこかの優しいおっさんの様な顔をしていた。

自分の部屋に行く前に、海に出てちよつと涼んで考え事でもしようかと思った。だが、アーチャーに止められた。

「リズが来たということは、他の騎士団も来ているかもしれない。……お前個人の問題なら別にいいのだが、お前達を守るのが今の俺の仕事だから俺の面倒事が増えない様に、勝手な行動は控えてもらおう」

やっぱり自己中だコイツ。そう思ったが、別にアーチャーの言ってることが間違いいではない。というか、正当だ。

「分かったよ。……カルマ、俺と一緒にの部屋で寝よう。近くにいたほうが良いに越したことはないし」

「……ん、ついでに対価もお願い」

「……なぜ？」

「対価が多い方が力が出る。だから、今のうちに吸えるだけ吸っておくことが得策」

アーチャーは、いつの間にか無言で立ち去っていた。あいつも、良く分からない人だよなあ。

「まあ、別にいいけどさ。……吸い過ぎるなよ？」

「ん」

カルマの「ん」という短い返事を聞いたのは、久しぶりの様な感じがした。

カルマの顔を数秒間だけ眺めていた。カルマはそれを敏感に感じ取ったのか、俺の方を見て訝しむ様な目で言った、

「……なに？」

「いや、なんでもないよ」

碧眼が揺れた気がした。……紅眼のカルマと碧眼のカルマ。俺には、二重人格の様に思えてしまうことがある。だって、紅眼のカルマはどこか言い知れぬ恐怖を俺に植え付けているのだから。

力の封印。それは、カルマの力だけではなく人格さえも抑えている様にも思えてしまって、俺はちょっと吐きそうな嫌な気分になった。

## メアリー（失敗）（前書き）

この話は別に大した話ではありません。

メアリーのキャラが定まっていらないから、いろいろおかしな点もいくつかあります

この話は読まなくてもオーケー、です。

## メアリー（失敗）

私の部屋のベッドには銀の長髪を持つ女の子が寝ている。  
寝てるだけなら可愛いのに……と、いつも思ってしまう。

「ん……あ？」

「お目覚めですか？ エリザベス」

「ん、わしはまた倒れたのか……？」

「はい、いつも通り。突然ね」

やってしまった……と嘆いている彼女に淹れたての紅茶を差し出す。

「いつも、すまぬ……じゃない！ 待て待て、わしはここに何しに来たんじゃ？」

「まあまあ、いいじゃない。偶には休みも大事よ？」

「それはそうだがな、わしはお前の捕獲も命じられているのだぞ？  
これまで恩を返すためにわざと見逃してきたが……もうダメじゃ。  
あの政治家共、メアリーを処分しなくてはわしを反乱分子と見て家族共々処分すると言ってきた。私だけならいいけど、家族にまで手を出されたら……」

彼女は偶に、一人称が「わし」から「私」に戻る。あの口調は、ある意味強がっているのだろう。本当は弱いのだ、このエリザベスという子は。

「じゃあ、私だけが処分してくださいな。悪慈さん達は、私が殺してしまい跡形もなくなっていた、と言えばあの頭の固い人達も納得するんじゃないかしら」

「な——！？ 何を言っているんだメアリー！ それは逆だ！ あの男達を殺してお前を助け——」

「悪慈さんと恭哉さんはとても優しい方です。私なんかよりもずっと……あなたにも優しくしてくださると思いますけど？」

「……だが、そんなこと……」

あら、ちょっと残酷すぎたかしら……。この案は、エリザベスの数少ない友人である私を亡くすということ。確かに、エリザベスが困惑するのも無理はないのでしょうか……。

「なにを、言ってるんですか。メアリー」

「……え。」

「悪慈……さん？　いつからそこに？」

「メアリーにいろいろ教えてもらったかそのお礼をしようと思ってきたですけど……一体、何を言っているんですか？」

悪慈さんが、微妙に怒っている気がした。

「なあ、リズって言ったか？　お前さ、なんで政治家なんかの言うこと素直に聞いてんの」

「……わしの家族を助けてくれた人達だからだ」

「でも、今はその助けくれた人達つてのがあんたの家族を殺そうとしてんだろ」

「そ、それは……」

悪慈さんの顔は、最早見てられないくらいの形相だった。だけど、私は悪慈さんにお任せしようと思った。悪慈さんは、きっとこの屋敷の中にいる人達が血を流さないで済む方向に話を持っていく。何故か、そんな信頼が私の心を支配していた。

「今、ここで誰かが血を流すのは嫌だ。そもそもだな、お前が従ってるヤツは無力なんだぞ？　持つてる力は権力だけ。知力なんざ持ち合わせちゃいねえし、腕力や脚力だつてない。どいつもこいつも金で這い上がって来たバカ共だ……。違うか？」

「違う……ない」

「なら、話は簡単だ。俺はこの別荘の中にいる奴らを全員守る。そんでもって、お前の家族も守ってやる。それでどうだ？」

「……！　な、なにを……言っているんだ、貴様……。敵である私の家族を、守る……と？」

「お前の家族だけじゃねえぞ。もし、あいつらが権力使ってお前を殺そうとしたら、お前も守る」

先程までの恐ろしい形相は無くなり、優しい顔で悪慈さんは告げた……。

あれ、私……空気になってません？

まあ、この際いいでしょう……。それにしても、悪慈さんに任せて良かった。エリザベスもきつと嬉しいことでしょう。

「き、貴様なんかに守られるほど、わしは弱くないわ！」

あらあら、頬まで染めて……。

「……あ」

悪慈さんが急に悪慈さんの部屋の方向を見た。……なにかあったのでしょうか。

「すいません、なんかカルマが呼んでるんでそろそろ行きますね」

「はい……」

悪慈さんの本題を聞いていない気がするけど、気にしないでおきましよう。

「なあメアリー。あの男は何者なんだ？」

「……お強い人……です」

「それは答えとして成立しているのか？」

エリザベスは眉を八の字にして私を見ていた。

## メアリー（失敗）（後書き）

ダメだああ！ メアリー視点とか、マジ無理だったああ！  
なんとなくてメアリー視点でやってみようと思ったが最後だったか  
……。

## 再会

さて、カルマから呼び出されてすぐに部屋に戻ったところ、急に抱きつかれた。何故だ。

「おい、カルマ。なにかあったのか？」

「……なんでもない」

そう言っていると、抱きついていていた手が離れた。てっきり血を吸われるのかもと思っていたから、ちよつと安心。

「……ごめん」

何故か謝れた。謝られる、というのはどこか新鮮だった。初めてカルマが俺の血を吸った時以来だろうか。

「なにかあったのか？ 話してみろよ」

「なんでもないから、大丈夫」

やべえ、何があったのか気になる。だがカルマが大丈夫というのはだから大丈夫なのだろう。……大丈夫と言うからこそ大丈夫じゃないという気もするが。

朝、目が覚めた瞬間に嫌な音がした。拡声器の、あの「キイイイ  
イイン！」的な音。

もうめんどくさくなってきた。部屋から出ないでもう一度寝てしまおうか、と思ったその時。

『——聞こえるか、犯罪者共！ 柿崎悪慈、大人しく出てこい。お前の家族がお前に会いたいそうだ！』

……今、あの野太い声のヤツはなんて言った？ 俺の……家族？ 『兄さんは犯罪者なんかじゃありません！ あと、なんで拘束されてなくちゃいけないんですか！ 離してください！』

伊織の声が、響いた。本当に、伊織……なのか？

『落ち着くんだ、伊織ちゃん。僕達から話がしたいと言ったのだから、これくらい仕方ないことだよ』

兄貴の、落ち着いた声もした。

「カルマ、行けるか？」

「……………ん」

長い間を置いてからカルマは頷いた。

海の方に出ると妙に筋肉質で迷彩服を着たおっさんと、手を後で縛られている伊織と兄貴がいた。

「兄……………さん！」

「悪慈……………良かった、無事なんだな」

伊織と兄貴が泣きそうな声で言った。俺が二晩いなかっただけで泣いてくれる家族がいることに感謝しなくてはいけないのかもしれない。

「悪慈……………戻ったほうがいい」

伊織、兄貴！ と叫びながら砂を蹴って走ろうとしたとき、カルマが俺の服を引っ張って言った。顔はいつもの無表情だった。

「なんで……………家族と会えたんだぞ！？ お前だって、伊織が焼いた牛肉好きだったろ？」

「でも……………なんか嫌な予感がする」

カルマは、言うことを聞かない俺にとうとう泣きそうな顔で服を引っ張り出す。目は青い。力は少女のそれと同じ物だった。このときは、カルマの言うことを聞くべきだった。だが、俺はバカだった……………。

「俺の守りたい者は家族でもある！ 悪いけど、その提案は聞きつけられない」

カルマの手を振り切った。うしろで「あ！」という声があったが、気にしてられなかった。

あと数歩走れば伊織と兄貴に触れられる——！  
その時、筋肉質のおっさんがニイツと笑った。

「やれ！」

「豪雷と共に吹き荒べ　白雷は空を焼き黒炎は地を焼く　屍を抱き  
し罪人を裁きし罪人」

懐かしい、声がした。

「貴様を、剣千本の串刺しの刑に処す！」

瞬間、見覚えのある青白い剣が次々と音速で降って来た。精神同  
体は……間に合わない……。

「にいさ——！　い、いやああ——！」

伊織が目を硬く瞑ったのが分かった。

——ああ、こんなにあっさり……俺は死ぬのか。

「悪慈……！」

「……な、カルマ？！」

炎の盾……？　いつの間にか俺の目の前に立っていたカルマの手  
から炎が円状に放たれ、紅蓮の盾として幾憶もの剣を防いでいた。

「——ぐっ！」

カルマの炎を出している手から血が出た。

「カルマ！？」

険しい表情のカルマは、俺の呼びかけに応じる余裕もないのだろ  
う。必死になって炎を放出する。

「もういい、もういいから……」

俺は、今泣きそうな顔をしているだろう。

尚、防御を止めないカルマ……。

「……っ！　防御を止めて下がれ！　命令だ！」  
「嫌っ！」

カルマの……初めてカルマの大声を聞いた気がした。目を見開い  
て、カルマの後ろ姿を見る。なんで……目は青いままだったはずな  
のに。

そして、カルマが遂に倒れた。炎の放出は止まり、瞬間に青白い

剣がカルマを襲う。

「——っ！」

その前に、カルマを抱き、剣に向かって背を向けた。幾つか剣が刺さった感触があった。あまりの激痛に悲鳴さえあげられない。だが、それ以上、背中に突き刺さる感触は無かった。カルマの無事を確認……俺の腹部を貫通している剣がカルマに届くことは無かつたらしい。だが、血が滴る剣を見て、更なる痛みが走った。

「よう、随分なざまあだなあ、アクジ」

「……恭哉、来るのが遅いんだよ……くそつたれ」

「ハハッ、正義のヒーローは遅れてやってくるもんなんだよ」

巨大な黒い炎が青白い剣を風払った。精神同体をして、目の色が赤黒くなっている恭哉だった。……あれ？　じゃあもしかして、精神同体した俺の目も青だったり赤だったりすんの？　などという疑問はすぐにふっきた。あまりの痛さと、それから……さっき聞いた女の声によって。

「久しぶりだな、悪慈」

ちゃんと見れば、筋肉質なおっさんの後ろに長い黒髪が靡いていた……。

## 覚醒「紅蓮の業火」

筋肉質なおっさんの後ろから出てきたのは見間違えるはずもない、美香だった。

「美香さん、あんた……。……。？」

美香の目から生気が感じられない……。もしかして……。

カルマに確認を取ろうとしたが、気絶してしまっている。なににより、手からの出血が酷い。

「すまない、来るのが遅れた」

アーチャーだった。メアリーをお姫様だっこして連れてきたらしい。

「さて、あれは……。……。っふ、相手をするのは大変そうだな」

声と不似合いな若い顔は汗でぬれていた。

「メアリー。君は屋敷に戻ってカルマの手当てをしる。人形だって人間と同じ……。失血死するぞ」

メアリーは、はいと頷いてからカルマを抱いて屋敷に戻っていった。

「さて、君も戻るべきだと俺は思うが……。どうする？」

「どうするもなににするもねえよ。美香さんの目から生気を感じられない。たぶん、操られてるんだ」

「……。だろうな。あの筋肉男の人形は傀儡師である可能性もある。

……。騎士団も堕ちたな。傀儡師を仲間に加えるとは」

刀は屋敷の中にある。カルマがいない俺はただの人間……。一体なにができる？ 考えろ。思考回路を極限まで張り巡らせる……。！

「……。ダメだ……。……。できることが、何も無い……。」

「そうだな。なにより、君の腹の傷は重症だ。屋敷に戻り、カルマと共に治療を受けるのが得策だろう」

クソったれ……。何も、できないのか……。

俺は背を向け、屋敷に向かって重い足を持ちあげようとした。

「いいのかね、君の家族が話をしたそうだが？」

「……………」

あの筋肉男の声が聞こえる。振り向くと、気味の悪いニヤケ面をしていた。筋肉男に拘束された伊織と兄貴に向かって言った。

「わりい……………」

「兄……………さん。大丈夫、なんですか……………？」

大丈夫大丈夫、なんて言おうとした瞬間。意識がぶっ飛んだ。俺は、砂浜に倒れた。

——あなたは何が欲しい？

どこからか、声が聞こえてきた。……………カルマ？

——全てを焼く業火？ 全てを助ける力？ この世を支配する権力？ この世を支配する大金？

……………どれも、俺が欲しいモノじゃあないなあ。

——じゃあ、なに。

お前は、もう知ってるんだろ？

何かが揺らいだ気がした。まるで、風に吹かれた小さな炎のように、何かが揺れた。

——私は、なにも知らない。だって、私は……………。

言葉は、続かなかった。

「う、ぐあっ」

「大丈夫か、少年」

アーチャーの声が聞こえたが、答えてられなかった。何かが熱い。体の中で、何かが爆ぜる様に燃えている。

格好悪くうつ伏せで倒れていた俺は、足に力を入れて、立ちあが

ることに成功。

「……………少年、それはなんだ…………？」

アーチャーが驚いたように言った。俺自身、驚いている。手に、炎が…………カルマの放つ様な紅蓮の炎が纏わりついていた。炎を潰すように手を握った。

足を一步、踏み出した。それだけで、砂浜が焼けた。

その一步は何らかの威圧があつたのだろう。目の前の筋肉男は一步後ずさつた。

「く、来るな！ この女がどうなつてもいいのか！？」

美香が作りだした剣を取り、男は伊織の首にそれを突き立てた。

熱い。熱い熱い熱い熱い熱い。腕が、足が、頭が、身体全体が、熱い。

もう一步、相手との距離を埋める。熱い理由は、なんとなく分かつた。炎が纏わりついている。体中に。それは全てを焼き払う業火。なにより、何かを守るための業火だ。

「アクジ……………お前……………」

今更、俺の異変に気付いたのだろう。青白い剣を防いでいた恭哉が、こちらを見て驚愕を現した。

「く、くそお。やれ、ミカエル！」

「……………！ え、ああ……………」

青白い剣が一本刺さつた。…………伊織の、腹に。瞬間、俺の中で最大の爆発が起きた。

「ふ、はは。どうする？ このまま近づくと、今度は百本の剣がこの女を突き刺すぞ？ ……………！？」

男は、驚いただろう。俺も驚いた。勝手に手が動いた。空中で柄を握る。瞬間、刀が生まれた。炎の刀…………。刀身は、鉄。もはや、炎から生まれた刀なんかじゃあ説明もつかない。

更に、驚くべきことが起きた。自分の後ろに、幾億の刀が出現する気配。そう、あの美香の技のように。炎の壁も出来上がった。自分でも何が起こっているのか理解が追いつかない。カルマもない

筈なのに、なぜ力を使っているのかが分からない。いや、そもそもカルマの力……なのか？

「……人形遣いの、覚醒………！」

アーチャーが呟いた。覚醒？ 知るか。今はそんなこと言ってる暇じゃない。

「が、があああああああああああああ！」

吠えた。最早、俺は人ではないのかもしれない。

息をするたびに、炎の熱気が肺を支配した。

炎を発する刀は、その熱気を持ってしても溶けることはない。炎を吐く竜に炎は効かない。そういう理屈だろう。

炎を発する刀に熱は効かない。

「ぐ、ぐああ」

男の顔が歪んだ。

「う、うわああああ」

男は逃げた。だが、逃げ場などない。ここは炎に包まれた、いわば結界なのだから。

「……………る」

「は、は？」

「焼いて炙って焦がして殺して喰らい尽してやる」

何かが聞こえた。まるで、俺が生まれた瞬間から存在した台詞の様に、その言葉は存在した。

そこに、人の形は無く。

ただの、雷炎の人形が一人。

紅蓮に爆ぜる墓場から。

夜空に浮かぶ月に吠える。

身体は虐殺の炎に包まれた。

闇から生まれるは光。生から生まれるは死。

灰から生まれるは、紅蓮の業火。

「……な、ん……だ。それは……」

「四肢を潰せ」

俺の眩きと共に刀が四本、相手の四肢に向かって飛び出した。

「ぐあああああ」

眩き通りに、四肢に刀が突き刺さった。

伊織と秋太は先程、逃げた男の手から解放されていて、地面に倒れ伏していた。

そこにはもう砂浜なんてものは無かった。周りを見ると、デコボコした岩ばかり。その岩の周りには炎が纏っている。……まるで地獄の様だった。

「喰らい尽くせ」

言葉は、周りの空気に対抗して酷く冷たかった。

周りにあつた炎が男に向かって飛んで行く。その様は龍の様なった。

「ヒッ——」

叫ぶ暇も無く、その筋肉がついた体は、灰も残さず燃え尽きた。

その瞬間に、また俺の意識はどこか遠くに飛んでいった。

## 守りたい『者』

目を覚ましたのは、自分の部屋だった。俺の両腕は火傷により包帯がぐるぐるに巻かれており、刺された腹部にもぐるぐると包帯が巻かれていた。

「あー、体中いてええええ！」

「自業自得……」

ベッドの隣の椅子に座って看病をしてくれているカルマも、炎の盾を出していた左手は包帯が巻かれており血が滲みだしていた。

「私はあの時戻ったほうが良いって言った。なんで言うこと聞かなかったの？」

なんか怖い。これまでに見たことが無いカルマだった。

「いや、あの……えーつとですね……俺の守りたい者があったからだ！」

とりあえず、力強く、恥ずかしいセリフを吐いてみた。

「………私の」

カルマが顔を俯かせて肩を震わせた。

「私の守りたい者は、無視するの……？」

カルマの、守りたい者……？

眉を八の字にして首を傾げた。カルマはそんな俺を見て溜め息をつくと、俺の顔を右手の人さし指で刺した。

「悪慈……私の守りたい物は悪慈」

「な……？ 俺？」

コクコク、と首を縦に振った。

「あまりカルマちゃんに苦労掛けさせたらダメですよ、兄さん？」

扉の開く音と共に伊織が兄貴と一緒に入って来た。

「兄貴はともかく、伊織は大丈夫なのかよ。腹に一本刺さってたろ？」

「兄さんに比べれば軽傷ですよ、こんなの。そりゃあ、痛いと言え

「は痛いんですけど……ほら、秋太さんもいますし」

「僕じゃあ、頼りないことこの上ないけど……医学は専門外だしね」  
苦笑いで兄貴は言った。

「あら、もう大丈夫なんですか、伊織さん？」

「今度はメアリーが入って来た。なんか、部屋が賑やかになってきたな……」

「あ、はい。すいません、迷惑掛けて……」

「いえいえ、大丈夫ですよ」

「いえ、でも……」

「無限ループって怖いよね」

俺の空気を読まない発言でループを阻止完了。

「そうそう、あの美香さんっていう騎士団の人は無事です。ちょっとした火傷があったけど、殆ど無傷でした。意識も、先程戻りまして、悪慈さんに『申し訳ない』と言っておりました」

自分で言いに来ればいいのに……。ああ、でも俺とか伊織に怪我をさせたからここに来づらいのか？

そういえば、アーチャーが言ってた『人形遣いの覚醒』とは一体どういうことなのだろうか。こういう肝心な時にアーチャーはいつも居ない気がする。

「……人形遣いの覚醒……か」

独り言で呟いた、はずだったがメアリーには聞こえてしまったらしい。

「……それは、後ほどアーチャーから聞いた方がいいですね。私は、あまり詳しくごいませんし」

「やっぱりアーチャーか。カルマは……まあ、教えてくれないだろうな。何故だか知らないけど。」

「痛っ！」

伊織がいきなり痛みに膝をついた。

「おい、大丈夫かよ。やっぱり寝てた方がいいんじゃないか？」

「大丈夫です！……と、言いたいところですけど、今回ばかりは

休ませてもらいますね」

そして、秋太と共に部屋を出ていった。

「そついえば、恭哉は？」

「ああ、恭哉さんは今部屋にいますわ。見た物がかなりショッキングだったんじゃないでしょうか？ 外から見ても、凄い炎でしたし

……」

確かに、友人である俺があんな風になったらショッキング映像以外の何物でもないのだろう。

「おいおい、誰があんなもん見たくらいで部屋に引きこもるって？」

「……」

「なんだ？ 思った以上に元気そうじゃねえか。心配して損したぜ

……」

俺の表情とか一切無視して、ドンドン話を続ける恭哉。

「にしても、前も言いたかったんだけどよう。お前の妹ちゃん、随分と可愛くなつたよなあ」

「ああ？ あれは妹じゃねえぞ」

「妹みてえなもんだろうが……んあ？ なんだ、リリース」

急に天井を仰ぎ見てリリースと会話を始めた。俺にリリースの姿は見えない。

「すまん、リリースが甘いモノ食べたいってうるさいからちよつと買ってくる」

「大変だな、気を付けて行ってこいよ。……あと肉まんも頼む」

「……売ってたらな」

「私は美香さんに何か欲しいモノがないか聞いてきますわね」

「俺をパシらせるな！」

言いながら、恭哉とメアリーは部屋を出ていった。嵐みたいだと思つた。……そついえば、あのリズっていう子はどうしたんだろうか。……まあ、海のときも来なかったし、寝てるのかな。

「悪慈、さっきの話の続き」

「……あー、なに？ カルマの守りたい者は俺って話？」

「ん、あなたに守りたい者があるように私にだって守りたい者があ  
る……だから……」

俺は、目を見開いた。驚愕した。だって……。

「もうちょつと、自分の体……大切に、して……」

カルマが、泣きながらそんなことを言ったのだから驚きもするだ  
ろ？

「ああ、悪かった」

カルマは、何かが弾けたみたいに体をビクツとさせた。瞬間、俺  
の胸に飛び込んできた。……傷が痛くて、吃驚してる暇もない……。  
「ごめんな」

それでも、さすがの俺もここは空気を読む。胸にあるカルマの小  
さな頭に右手を置いて、左手でカルマの体をしっかり包んだ。……  
まるで恋人みたいだな、と苦笑しそうになった。

あと、もちろんだけど、火傷してる腕が痛い痛い。

それでも、その痛みに耐えようと思った。俺が傷つくことでカル  
マの心が傷ついたなら、こんな痛みで嘆いてなんていられない。そ  
う思えた。

## 『覚醒』の理由

カルマを抱いてから数秒、或いは数分……いや、下手をすれば数十分か。アーチャーが部屋に入って来た。

「……………ロリコン……………」

「なんか言ったかゴラァ！」

「いや、すまない。俺は部屋を出ていくから続きを……………」

「違う！ お前は変な方向に勘違いしている！」

「いや、気にするな、俺は無粋な真似はしたくない」

「だから違うって言ってるんだろ！」

「いや、だから大丈夫だって」

「さつきからセリフの始まりが『いや』ばかりだぞ。動揺しまくりだなオイ……………」

もう突っ込む気にもなれなかった……………。

「んでさ、お前に聞きたいことがあんだけどよ」

「ああ？ なんだ、ロリコン」

「……………」

「どうしたロリコン」

「殺されたいのかお前」

「早く本題を言え、このロリコン」

「……………あー、もういつそのこと殺してくれ……………。……………お前、あんときに『覚醒』とか言ってたよな？ あれはどういう意味だ」

アーチャーは、一度深いため息を吐いてから言った。

「あれは、危険な状態だった。下手をすれば、俺と同じ状態になっていたぞ」

……………人形に取り込まれる……………？ 俺が？

「ああ、そうだ。まあ、俺とは違う状態で、だがな。俺の場合は人形に干渉され咄嗟に踏ん張った結果がこれだ。俺の場合、踏ん張んなければ体は俺で中身は人形になっていた訳だが……………。お前の場合

はちよつと違う。人形との完全同一化だ。二人とも意識は残るが……、カルマと一生精神同体することになると考えてくれればいい」「ま、待ってくれ！　だって……あの時は精神同体していなかったぞ……？」

「そうだな……そこが不思議なことなんだ。……あり得ないことだが、もし、カルマの意識だけがお前の精神世界に入り込んだと考えれば……」

「私は、意識を完全に失っていた。たぶん、それはない」

カルマは淡々と言った。

「ふむ、なら残る可能性は一つだけだな」

アーチャーの顔がさつき以上に険しくなった。俺もそれに圧倒されてか、真剣に耳を傾ける。

「人形との望みの一致」

「……望みの一致？　なんだそれ」

「まあ、お前とカルマが同じ望みを持ったということだ。お前らはあの時、何を望んだ？」

「俺は、家族を守る力」

「私は、悪慈を守る力」

「……まあ、『守れる力』って言うのがワードだったのかもしれないな。一時的の気絶なら欲望が強ければ強いほど消える事は無いだろうからな……（たぶんだけど）。その欲望の一致にカルマが無意識のうちに力を与えたのだろう。これがその結果だと思っるのが最適だ」

「たぶんだけど」ってセリフが見えた気がするが、まあそういうことだったのだろうか。

カルマとの望みの一致……。『守れる力』か。

「それで、話はそれだけか？　俺はもう行くぞ……さつさと下階に下りて昼飯を食ってしまえよ……カルマに不純な行為はするなよ口リコン。そいつは人形だということを忘れるな」

最後にそれだけ言い残し去っていった。次会うときは金玉を膝蹴

りしてやろうと思った。

「くっそ、メアリーにべた惚れのくせによく言つよ……」

「悪慈……」

「ああ？ …… って、ええ！？ な、なにをしていらっしやるのでしょかカルマさん！」

俺の体に覆い被さるように抱きついてきた。俺の首に両腕を絡ませて。

不純な行為をしてるのは俺じゃない。俺じゃない。俺はロリコンじゃない。どっちかというとりリスみたいなナイスバディの方が……。

「いててててて！ なんで！？ 耳痛い！」

カルマに耳をつねられた。

俺の耳、大きさ変わってきてないか……？

「血、吸うからおとなしくしてて」

首から吸うのかよ……。首からは嫌だって言ったの忘れたのか、コイツ。

それにしても、いい匂いがするな。頭がふらふらしそうなくらいに甘い、けど、凄くいい匂い。

「……悪慈、変なこと考えてたでしょ」

「な？！ い、いや、変なこととか！」

とりあえず、腹が痛いからどいてくれ……。てかこの状況で吸血とか、俺マジで死んじゃう……。

そう言おうと思った瞬間には、既にカルマの歯は容赦なく俺の首に噛みついた。

## 昼食

下階に下りるとメアリーと美香が共に昼食を食べていた。美香の方にはバタートーストが三枚。メアリーはなんと蕎麦だった。和食を食べるメアリーというのも、なんか新鮮だ。にしても、バタートーストが昼食ってどうなんだ……。

「あ、えっと……お久しぶりです、ね美香さん」

「……うむ」

お互い視線を合わせられぬまま変な空気が部屋に充満した。美香はいつも通りの黒いロングコートを着ている。その姿が懐かしい……はずなのに、まるでこの前までの美香とは別人のように見えた。

「そうそう、悪慈さん。今度アーチャーに会ったらお礼を言っておくといいですよ。傷の手当てをしたのは殆どアーチャーですから」

「え、これはアーチャーが……？ でも、あいつの能力って……」

メアリーが紅茶を淹れてくれた。

礼を言いながら一口啜った。味は言うまでも無く美味である。

「アーチャーが得意とするのは風を操ること。ただ、私達なんかよりもずっと長生きしているからでしょうね、治癒系の術の知識も結構豊富なですよ。まあ知識があるだけで魔力が足りないのです、そうやって傷を塞ぐくらいしかできないし、ちよっと動けばまた傷が開いてしまいます。あまり過激な運動は控えてくださいね」

はあ、と頷いてもう一口紅茶を啜った。

カルマは美香の方を見上げていた。美香もそれに気づいたらしく、皿に乗った二枚のバタートーストに目を落とした。

「……食うか？」

美香はカルマと目を合わせて言った。

「……ん」

いつもの短い返事だったが、美香はそのカルマの反応が懐かしいようだった。

「私は……未熟者だ……。操られていたとはいえ、お前達を傷つけた……」

バターストをカルマに渡しながら泣きそうな目で言った。

「大丈夫ですよ。ていうか、美香さんは騎士団の副団長なんですから俺に刃を向けるのは当たり前です。……………そういえば家で俺の処分命令が出された、と言ったときの美香さんは操られて……？」

「いや、あのときは操られていなかった。処分命令を出された時は嫌なジョークだと思ったかった」

美香は、やっと俺と目を合わせてくれた。しかし、その目には前までの威勢の良さは無かった。

その時、階段から誰かが下りてくる音がした。

「……美香？ おお、美香ではないか！」

「……リズか。お前も処分命令でここに？」

「ああ、そうなんだが……良い様に飼われてしまっただけ。その悪意とか言う男のせいだな」

え、俺のせい？

ああ、あの「守ってやる宣言」のときか？ 今思ったけど、俺が守りたい者……かなり増えてね？

「お前が飼われる様というのも面白そうだな。首輪でも買ってきてやろうか？」

「要らんわ！」

リズの首輪姿……うほっ。

「……………」

「あの、カルマさん？ 目が怖いです」

どうやら、カルマには俺の思っていることが伝わってしまっているらしい。プライバシーの侵害だと叫びたい。

「おー、なんだ。皆さんお集まりですかい？」

恭哉が買いだしを終えて帰って来たらしい。後ろには気が早い気もする半そで姿のリリスが機嫌よさそうにアイスを食べていた。左手には、大量のアイスを袋に入れて……。

「腹、壊れないのか？ あれ」

「俺も腹が壊れるぞと言ったんだがな。大丈夫だって言い張るから買ってやった。今のうちに小便とか済ませといた方がいいぞ」

「おう、昼飯食ったら行っておく」

そんな大量のアイスを、食べたそうにカルマが見ていた。……とりあえず、カルマの小さな頭に手を乗せ「やめておけ」と釘をさしておいた。俺の手を払いのけようと抵抗したが、カルマの力は封印してある。幼女の力に負けるほど俺は弱くない。

……バタートーストは既にカルマの手から消えていた。食つの早いな。

「そういえば、アーチャーは？」

メアリーに聞いてみた。メアリーはちよつと考える様な仕草をしてから答えた。

「たぶん……ですけど。野菜の様子を見に行っただんじやないでしょうか」

「や、野菜？」

「はい、あの人意外と農業が好きなんですよ。……本当に意外ですよ？」

意外過ぎだよ。

それにしても、あいつが農業ね……。あとで畑荒らしでもしてやろうか。

そう考えていたらカルマが俺の服を引っ張りながら「ダメ」と言ってきた。アーチャーを庇うカルマは、ちよつと可愛かった。

……最近、カルマの表情が豊かになった気がする。まあ、喜ばしいことだろう。無表情だと、何を思っているのは分かりづらかったからなあ。

「ああ、そうそう。悪戯、気を付けておけ。近いうちに騎士団長が来るかもしれん……」

美香の言葉を聞きながら紅茶をもう一口啜った。ぬるくなって、あまり美味しいとは言えなくなっていた。

## 微笑ましいひと時

昼食を取り終えたリビングでは、平和な時が流れた。

俺はソファに座って自家発電しているというテレビでニュースを見ていた。どつかの国で爆破テロがあったという内容だった。爆発……人形の力？ いや、考えすぎか。

イブとリス、リス、カルマの四人はメアリーと美香にあやとりを教えてもらっていた。イブとリスは手に紐が絡まり「むー！」と唸っている。リスなんか、イライラしすぎて黒い火がめらめらと……紐を焼き尽くしていた。カルマは、いかにも頑張ってます、という表情でメアリーの手を見て真剣に作業に取り組んでいた。

ちなみに、今メアリーの髪型はポニーテールだ。かなり可愛い。「似合ってますよ」と言ったところ、「じゃあ、これからはなるべくポニーテールで過ごしましょうかしら」と、おどけていた。

恭哉はアーチャーと共に野菜を取りに行ったとかなんとか……。恭哉が真剣にやるとは思えないが、アーチャーの手を煩わせるようなら、いいぞもつとやれ、と言いたい。

伊織は腹の傷をいち早く治す為、兄貴の看病の下、ベッドで寝ていることだろう。昼食はメアリーが運んだらしい。

ふとテレビ画面に目を戻すと、爆破テロの犯人はカシオペアという組織だという情報が流れていた。現在アメリカに潜伏中だなんていう情報も入っていた。だが、俺には関係ない。アメリカなんて夢のまた夢の様な場所だ。もし、日本に潜伏しているなんて情報が入ったとしても、きっと俺には関係ないのだろうけど。

ニュースの内容が、今度は万引きオヤジ逮捕なんていうテロップに変わった。いい歳したオヤジが万引きとは、世も末である。

後ろから、カルマが近づいてきた気配があった。後ろを向くと、俺の予想は当たってカルマが立っていた。だが、様子がいつものカルマからは想像もつかないものだった。

笑顔。それもとびつきり可愛い。

俺が絶句している間にカルマは両手を俺の目の前に差し出した。そこには、紐がグシャグシャに絡まっている。いや、良く見るとあやとりの技の様だ。確か、二段はしご……だったかな。

「二段はしごか？ 上手いじゃねえか」

褒めてみた。ここで技名を間違っていたら一生の恥であり、なにより、カルマの機嫌を損ねてしまうだろう。

「んっ！」

どうやら正解だったらしい。目を猫の様に細めて大きく頷いた。

それから、二段はしごを解いて別の形を作り出した。

それから一分くらいして形はできたらしく、また、俺の目の前に突き出してきた。

「……………ん？ これは見たこと無いな……………」

わっかがあつて、その上の紐の中心にもう一つの小さなわっかが掛かっていて、そのわっかに一本の紐が通っている。その形の技は覚えていない。

そもそも、あやとりなんてしたことがない。二段はしごという技を知っていたのだって子供の頃、テレビで紹介されていたからだ。二段はしごだけが記憶に残り、後は形も思い出せない。いや、形を思い出せば名前を思い出すかもしれないし、名前を思い出せば形を思い出すかもしれないけど。

「山の上のお月さん」

なんだそれは、と思ったがなるほどと思った。

小さなわっかは月で、掛かっている紐は見れば、山の様に見える。

「へえー……器用なんだな、お前」

そう褒めながら頭を撫でた。先程の猫の様な笑顔を更に深めた笑みだった。

本当に表情が豊かになった。なにより、その表情の一つひとつが可愛い。母性本能的な何かが刺激される。まるで、娘を持った父親のような気分だった。俺、まだ十七歳なのに……。

「悪慈さんもどうです？ ニュースを見ているよりも楽しいと思いますけれど……」

「いえ、俺はいいです。……ほら、カルマ。他の技も教えてもらってこい」

「ん！」

ああ……セリフまでもが父親の様に……！

まあ、カルマの笑顔にはそれほどの威力があった、ということだろうか。

それにしても、カルマの笑顔なんてものが見れるのはこれが最初で最後になってしまうのではないだろうか。牛肉を大量に焼くとか、いろんな種類のケーキを大量に買い込む以外でコイツが笑顔になりそうなことが浮かばない。牛肉はともかく、ケーキが好きというのは普通の女の子らしい。カルマの普通な部分というのを探すのも、面白いかもしれない。

今日の暇つぶしはそれにしよう、と決めた瞬間だった。海の方から眩い光が満ちた。

「これは——！」

「騎士団長……の光、か？」

美香とリズはさっきまでの微笑ましい景色の一部から外れていた。いや、全員だ。騎士団長が来たとなれば、あやとりなんてやってられない。

とりあえず……。

「一日で二回も襲ってくるとか……騎士団って案外暇なんですね。てか海好きだなオイ」と言ってみた。美香とリズは無言で外を見ていた。

見れば、「そんなことない……」とでも言うように目をそらして様にも見える。が、その視線の先にあるのは、騎士団の最強と言われる者なのだろう。なんて言っただけで、団長なのだから。

どこぞのSOS団なんかじゃない。聖人形騎士団の長だ。政治家共の言うことしか聞かない堅物だったら嫌だな、と思った。

「……さて……。抵抗せずに連行されてくれれば、傷を付けずに済むのですが……」

光から現れたのは、カルマ……。かと思間違うほど無表情の、白の戦士だった。しかし、ポニーテールだからだろうか、妙に愛嬌のある女剣士だった。

「私は戦いを好まない。できれば、投降してほしいのですけれど……」

白の騎士団長は、黄色い目を俺に向けて言った。

「それは、できない相談だ」

「では、不本意ではありますが……実力行使で」

彼女は構えた。瞬間に、そこに白い大剣が現れた。そして、その後ろに……。幻想であるはずの『それ』が姿を現した。鼻息荒く、地面を蹴るそれは白い「天馬」<sup>ペガサス</sup>。純白の角と純白の翼をもつ『それ』は、数秒間見惚れてしまうほど美しかった。

「さあ、ゼウス……。行きましょう」

大剣を振りかざした彼女もまた、美しいと思った。

## 「白の戦士」

戦いは別荘の中では狭すぎた。俺達は、外に出て海と逆方向にある森の方に出ていた。

戦いは騎士団一人に対して、俺と美香とリズの三人は苦戦していた。

「美香もまだまだ、攻撃パターンが統一されすぎてるし技後硬直が長い」

「なっ——！？　ぐはっ……」

白の戦士の一振りで美香は別荘の白い壁に叩きつけられた。

青白い剣など粉々に砕けてしまい、攻撃の手段に成りえなかった。俺は、カルマに刀を取りに行かせてる。故に戦いに参加せず木の陰に隠れている。

リズとイブの力は氷系だった。だが、地面を凍らせてもペガサスに乗った白の戦士の空中からの攻撃がくる。

リズも空中に舞い上がり空気を凍らせながら小さめの槍を幾つか作り、それを射出させながら対抗した。勿論、白い戦士はそれを一振りで吹き飛ばしたが。

「う……ぐう……」

「美香さん、大丈夫なんですか？」

青白い剣を杖代わりにして俺の方に歩みよって来た美香の服はボロボロになっていた。

「一応、大丈夫だ。あれでも、騎士団長は手加減している方なんだろう。私達、騎士団の者が死ぬのは戦力が減ることに繋がるからな」

美香は、木に背中を預け息を整えながら言った。

「やばいな。リズは槍を持っていない……」

「槍……ですか？」

「ああ、あいつの主な攻撃方法だ。神槍と言ってな……。イブと一緒に召喚された、と私は聞いている。その神槍を使用しながらの氷

での攻撃。それがあいつのスタイルだ。だが、今は神槍が無い。苦戦するのも当たり前だ」

「――ぐああ！」

言ってるそばから、リズは俺の近くの地面に叩き落とされた。それを見ていたら目の前の茂みがガサガサと動いた。

「悪慈……、刀持ってきた」

カルマだった。刀を両手で大事そうに抱えながら息を整えていた。「ありがとうな、カルマ。……おし、ほんじゃまあ行きますか！」カルマは無言で頷き炎に包まれた。さっきまで痛かった腹と腕の痛みが引いていく。心地の良い快感。とても、これから戦に参加するような気分じゃなかった。だが、参加しないという訳にも行かない。なにより、さっきからペガサスから降りたのだろう白の戦士がこちらにゆっくりとした足取りでこちらに向かってきているのが分かった。

「気配を隠す必要もない、と言っているのだろうか。」

「くそ、ふざけやがって……」

そっちがその気なら……と、いつの間にか炎に包まれていた刀を一振り。木を切り倒す。横を見ると、美香が「なにやってんのコイツ」みたいな目で見ていた。

「あなたのせいで、私の部下達が道を外してしまった……それを片付ける身にもなってくれませんか、柿崎悪慈？」

知ったことか、と心の中で叫んでから足に力を入れる。

白の戦士はそれを見て、突っ込んでくると警戒したのだろう。歩みを止め、白い大剣を構える。

「っは！」

ひと吠えして足裏を爆発させ、瞬間移動にも近い速度で距離を埋めた。爆発はカルマの力だから、俺の意思じゃない。それを思うと、前よりも連携プレーというものが取れてきている気がする。だが、相手が相手だ。距離を埋めてからの俺の斬撃は簡単に受け止められてしまう。

「一気に距離を詰めて大振りで切り刻む……あまり、綺麗な戦い方ではありませんね」

それから、白の戦士の手に入るのが大剣から刀、刀から俺に伝わった。それから一秒も経たずして、俺は白の戦士の一振りに吹き飛ばされた。

『悪慈、相手が騎士団長ということは忘れて。自分の出せる力を出せばいい。私も、頑張るから』

「ああ、分かってる」

とは言ったものの、忘れていられる余裕がない。念話をする余裕すらないのだ。相手のあまりの存在感、威圧感、圧迫感から、俺は逃げ出したい衝動に駆られた。

——クソ、クソクソクソ……！ 動け、俺の足。恐怖を忘れる。

相手はただの可憐な少女。壊すのは容易い筈だろうが……！

そんなことを吐いてる自分が心の中にいるが、そんなの気休めもいいところだった。即座に足に力を貯めた。それから、距離を埋めるためではなく、より高くにジャンプするために地面を蹴った。

「空中戦をご所望ですか。それは、あなたにとって得策ではないと思います……」

そんなことを言ったのが聞き取れた。それから、ペガサスが森から颯爽と現れ白の戦士を乗せ、俺の方へ飛んだ。大剣を片手に持つて振りかざす様は正に、騎士。白いドレスのような服ではなく、甲冑であれば完璧なる騎士だ。

それから、数秒も経たずして俺と相手の距離が埋まった。相手が大剣を振り下ろそうとする中、俺は刀を左手に持ち、右手で拳を作った。カルマはすぐに俺の右手を紅蓮の炎で包んでくれた。

「はあっ——！」

大剣を、ギリギリで交わしてペガサスに一撃、爆発を喰らわせた。ペガサスは叫ぶこともせず、重力に逆らおうともせずに地面に落ちていった。

「……………」

砂埃が立ち込めた。この状況はよろしくない。どこから攻撃が来るかが分からない。

「……悪慈！」

「——！」

カルマが叫んだ。それから、後ろを振り向くと、ペガサスを捨てた白の戦士が大剣を振りかざしていた。

「うぐうつ……ぐ……」

両手に持ち直した刀で受け止めた。空中にしながら、足を踏ん張っていられるとは何事か……。

『足場として炎を作ってるから……』

なるほど、そういうことか。

さて、納得している場合じゃない。これはヤバイ……。

「……へ。あんた、美香さんに言ったことそのままですよ。攻撃パターンがなさすぎるっ！」

とは言ったものの、この際攻撃パターンなどないのは、手加減をしてくれているからなのだろうけど。

「あなたはもつと、自分の力を高めるべきです。人形に力を頼り過ぎて……」

「っは！ あんたらで言う犯罪者ってヤツにアドバイスとは、随分となめられたものですね！」

これは本当に力チンと来たので、怒りに任せて刀を支えている手に力を入れた。

「……！？」

それだけで、相手が吹っ飛んだ。始めてみた、白の戦士の驚愕の表情。

しかし、空中戦は確かに不慣れ……俺が不利なことに変わりはない。俺はさつさと地面に降りた。足が痛いかも、と覚悟したがカルマのおかげか、痛みはなかった。

「ふう……」

一息ついてから後ろを見ると、美香とリズが驚いた様な表情でこ

ちらを見ていた。

「私を吹き飛ばした人とお会いするのは久しぶり……ですね」

前を向き直すと、砂埃などがついていないドレスを靡かせながら大剣を構えている白の戦士がいた。後ろにはペガサスが鼻息荒く、敵意剥き出しで立っていた。

さて、これからどうしたものか。一度仕切り直し、という感じだろうか……。

「……いいですね。とてもいい。是非とも、騎士団に欲しい人材です。……吸血鬼カルマ、ですか。こちら最近方針が変わってしましてね。いやなに、天使ではなくとも善意を持つ者は加入を認めていることにしたのですよ」

「なるほど……この前の傀儡師はそういうことか？」

無言で頷く白の戦士。

「それで？ 何が言いたい」

「騎士団へ加入してほしい、と言ったつもりなんです……」

「連行と同じだろ？」

「いいえ、違います」

ゆっくり首を横に振った。

それから、大剣を鞘へ収めた。それと共に、後ろにいたペガサスが粒子となり消えた。

「カルマの処分はなくなります。それだけでも、大きな違いだと思いますせんか？」

確かに、それは大きな……というか、大きすぎる違いだ。だが、だからと言って騎士団に加入って……。

「いいじゃんかよ、アクジ」

右から、聞き覚えがありすぎる声が聞こえた。

「恭哉、お前は呼びじゃないんじゃないか？」

「へ？」

見ると、白の戦士はやはり、剣を抜いていた。

「……ちょっと待ってくれ、あいつは俺の友人だ」

「関係ありません」

「……分かった。俺は加入する。あいつも加入させる。あいつが何かしたら俺が処分する。……それでいいだろ？」

テメー、俺のこと処分するとかできんの？ と、言ってるコイツは助かりたくないのだろうか。

「……まあ、いいでしょう」

と、剣を鞘へ納めてくれた。

「お、おい悪戯。いいのか？」

後から歩いてきたのは美香とリズ。二人とも、既に精神同体は解いている様子だったが……ミカエルの姿が見えない。俺とは会えないのだろうか。

「いいですよ。カルマが殺されるよりはマシです」

「……団長さん」

美香の後ろから聞こえた声の主はメアリーだった。

「随分前から処分命令が出ているはず……ですよね、メアリーさん。リズ、あなたは何をして——」

「……え、えつと……その、だな……。……聞いてくれ、団長！

コイツは私の恩人だ。……飢え死にしそうなところを助けて貰った。こいつは善意を持つ人間だ！」

リズは、「やつと言えた……」と安堵するように体の力を抜いたようだった。

「……いいでしょう。メアリーさん、あなたの人形を連れてきてください」

「俺ならとつくにいますよ」

そう言って、団長の後ろから現れたのはアーチャー。

「まったく……俺の畑に傷が付いたらどうしてくれる気だったんだ、少年」

……ホントに金玉蹴ってやろうかこの野郎。

その姿を確認した団長は、別荘の中で話し合いをしようと提案をした。

勿論、全員が賛同した。

## 我が家が宿代わり

たった数日だけ家を出ただけだというのに、我が家に帰ると随分久しぶりに感じる。自分の部屋は相変わらず、兄貴が買ってきた意味の分らないモノであふれていた。

「さて、と……ホントにリズは床でいいのか？ 体が痛くなるぞ？」  
クッションを抱えて座っているリズを見下ろして聞いた。

「ふむ……ちと不服といえば不服だが、まあ良いだろう。体が痛くなるのは慣れておる」

「……やっぱ布団持つてくる。兄貴が余分に持つてたはずだから」  
「ん？ わしは別に大丈夫じゃと言っておる。そう構うな。そもそも、なんで貴様の兄は余分に布団を持つているんだ？」

「後になつてから体が痛いとか文句言われるのが嫌なだけだから気にするな」

兄貴が余分に布団を持つてる理由は、まあ、大方の想像はついていると思うがあの癖のせいだ。

それから、いろいろあつたせいで痛くなつた足を引きずりながら、リズとカルマを残して部屋を出た。

兄貴の部屋はすぐ左隣にある。その部屋にはイブだけがいた。ベッドに座り跳ねて遊んでいたらしい。俺が部屋に入った瞬間「わぁ！」とか言つて焦つてたから間違いないだ。

「あれ、兄貴は？」

「え、えと……麦茶を取りに」  
「そうか」

俺もあとでリズになにか飲み物を持つていくか。

そう思いながら、兄貴の部屋の隅に置いてある布団を「よっこらしょ」と持つて部屋を出る。

「兄貴に布団貸してもらうからって言つていてくれるか？」

「ああ、はい。承知しました」

イブは結構いい子だった。人形つてものに害があるとは、到底思えない。

あとでイブにメイド服を着せて家事をやらせてみようか、などと思いつながら自分の部屋へ戻った。

布団はいつもなら軽いのだが、今日は重く感じた。それなりに疲れているのだろう。

「むう……悪いな、悪慈」

「ああ、あとでこの借りを十倍にして返してくれ」

「んな……！ お前が勝手にやったことに対して恩を返すなど、するわけなかるう！ それも十倍だと？ わしがそんなことすると思うか？！ この下郎！」

どっかで聞いたことのある罵声を浴びた。

そうそう、なんで今、こんな状況になっているのか……教えなくてはいけないな。本日、午後三時に白の騎士……名を「サラ」という騎士団長に騎士団への加入を勧められたことが事の全てだ。

「俺の家をリズや美香の住処にしてほしいだ？　なんでまた……そもそも、宿くらい騎士団が用意してやれよ」

白の騎士はメアリーから貰った紅茶を優雅に啜りながら冷静に答えた。

「宿に泊れば、当然お金が掛かります。騎士団側からすると、なるべく無駄な出費は避けたいのです。そこで、あなたの家を貸してほしい。……そういえば、倉井恭哉の家も破壊されたままだ。倉井恭哉も泊めてやってくれと、こちらとしては嬉しいのですが……」

「恭哉は自分で壊したんだろ？　なら、責任は恭哉自身にある。俺は知らない」

「ひつでえ……。お前、それでも俺の友人か？」

「いいことじゃねえか。綺麗な夜空を見ながら寝れて」

「虫がウザくて絶対寝れねえよ……」

さて、しかし困った。リズと美香とイブとミカエル。四人も止まれるほど広い家じゃない。二人だけならマシだが……。

「じゃあ、もう二人は私の家に泊ればいいんじゃないでしょうか」  
言ったのは伊織だった。確かに、伊織の家は部屋が有り余っている。

「なるほど。伊織さんも、両親は確か……」

「はい、もういません」

「では、美香とミカエルをよろしく頼みます。イブとリズは柿崎悪慈の家に…… よろしいですね」

一見、疑問形の様なセリフだったが、その言葉には妙な強制感があった。

俺はどうせ断つても断れないんだろうし、なにより二人減ったのだからまあいいかと、了承した。そんな訳で、俺「柿崎悪慈」は騎士団の一人として騎士団の二人を泊めることになった。

しかし、今思えばメアリーの屋敷の方が広いわけで……四人ともそこに泊めれば良かったのではないかと思っている。だが、あの心優しいメアリーがそれを言わなかったのだから、なにか不都合なこともあるのだろう。

「……今思っただけどき、兄貴、イブ相手に何かしでかさないだろうな……」

「なにかって……なに」

カルマが変な目で聞いてきた。リズもカルマと同じような目で俺の顔を見ていた。

「なにかってというのは……まあ……。いや、まあ兄貴なら大丈夫だろうからもつ寝よう」

変な想像が脳内に浮かんでしまったから強制的に思考をシャットダウン。さっさとベッドにもぐる。

カルマがベッドの中に入ってくる感覚がした。カルマの体温は、なんだか温かく抱擁されている様な錯覚に陥れてくれる。その体温が無いと、もう寝れないかもしれない。随分と、カルマに依存しているなあと自虐的に考えながら意識は遠くへ飛んでいった。

「む……わしはまだ眠くないのだから……」

リズのそんな一言が俺の意識を呼び戻した。

うるせえ。さっさと寝ろ。……あ、飲み物を持ってくるの忘れてたな……。まあ、いいか。

心の中で言ってからもう一度目を閉じて、今度こそ、電池が切れるように意識が消えて、俺は眠りに落ちていった。

## 転校

「んー、あー……眠い」

朝起きたのが七時。現在時刻、七時半。眠気は未だ拭いきれず、それでも高校へはいかなくてはいけないわけで……。俺の家から学校までの距離はかなり長い。早ければ四十分、遅くなれば一時間以上かかる。だがまあ、通学路でなんの問題もなく普通に歩けば一時間以上かかることなんてことないと思うが。だがこの通学路では、何かしらの問題が起こる。……かなりの高確率で。

その時、後ろから変な音が近づいてきた。

ゴロゴロゴロゴロと何かが転がってくる音。俺が今立っているのは、生きは天国帰りは地獄の急な坂道。なんだか、嫌な予感しかなかった。というか、この音はもう聞き飽きたと言ってもいいだろう。

「うわわわわ！ どいてどいてどいてー！」

「言われなくても、もうどう避ければいいかなんて分かって……フンガ！」

なんで……。

「だ、大丈夫？」

「大丈夫なわけですよ……由さん」

紺色の短髪。胸はなかなかの二十歳。この女の人よしいは「吉井 由よし」なんていう、ちょっと珍しい名前をしたフリーターさんだ。就職活動を初めて、もう一年以上経っている。この人はこの坂道から数百メートル離れた屋根から壁まで真っ赤という、目が痛くなるような家に住んでいる。

ちなみに、なにが転がっていたかというところ……まあ、この由さん自身が転がっていたわけで……。

「いい加減、その坂道なら転がれば早いじゃん走法とかいうのやめてくれませんか」

そもそも、走ってすらない。

「そんなこと言われたってえ、楽なんだもーん」

この人はずっとこれだ。バイト先に行くのにこの坂を降りる必要があるため、この様な形で俺とぶつかる。ちなみに、二日に一回以上の確率で転がってくる。時間をずらして登校すれば、会うこともないのだが……。

「ていうか！　なんで今日に限って右側を転がってくるんですか。いつも左側を転がってるのに……」

「ごつめーん、疲れちゃって右と左が分からなくなっちゃった」

「いつも転がってるから右脳と左脳がぐしゃぐしゃになっちゃったんじゃないですかね？」

「そんなことになったら動けなくなっちゃうよー。悪慈君って意外と知識ないんだね」

うぜえ。

まあ、いつものことだ。これはもう朝の恒例行事と言ってもいいだろう。

「ていうか、珍しいねえ。この時間に会った」

「え、ああ……そうですね。ここ最近、学校すら行ってませんでし  
たしね」

あと会わないように時間ずらしてたしね。

そんなこんなで、今日も遅刻寸前で学校に到着した。

だが、今日は更に驚くべきことが起きた。

学校についてから、恭哉のどうでもいい話に付き合い、チャイムが鳴ってからの朝のホームルーム。

俺の後ろに四つほど机が増えているが……なんのためだ？　という疑問はすぐに解消された。

俺は片肘を机について、窓から外を見ていた。いつものことだ。どうせホームルームの内容は変わらない。なら、雲の形とかが変わっている空を眺めていた方が有意義な時間の使い方だろう。

「よーっし、じゃ、今日は転校生を紹介しちゃうぞー！」

……？ 転校生？ そんな話聞いていない……ゾ！？

「転校生のカルマちゃんとリスちゃん、それからイブちゃんにエリザベスちゃん。この四人が転校生。というか、留学生？」

な、な……なん、で……？

「ちょ、やば！ 美少女じゃね？」 「てか、髪白いのとかいるぞ」

「銀髪と金髪キター！ 白髪もなかなかの美少女じゃねえか！？」

「うほ いい女」

野郎共は騒ぐ。まあ、無理もない。確かに、美が付く少女ではあるが……。

「えーっと、順番に自己紹介よろしく」

「カルマ」

「そ、それだけ？」

「ん」

カルマ。もうちょっと喋れ！

「リスでーっす！ 趣味は、読書！ あと花火とか好きでっす！ これからよろしく！」

揺れる美乳に「うおおおお！」と叫ぶ野郎共は放っておくとして…… テンション高いなオイ。

「えと、イブといます。ふ、ふ、ふちゅ、不束者ですが、よろしくお願いします！」

うん、いい子だ。是非、メイドにしたい。

「わしの名はエリザベスという！ わしがここに来たことを光栄に思えよ愚鈍ども！ 私のことはリズと呼ぶがいい！」

おーみんな引いてる引いてる。

てか、口調くらい変えてこい。

「一体……どうなってんだ……？」

「なんだあ？ アクジ、聞いてないのか？ 生徒の中に人形遣いがあるかどうか……。いたとして、その人形遣いは善意を持った人間かどうかを調査するために転校って形で侵入するんだとき。これが俺とアクジの初任務って訳だ。俺達だけじゃ不安だからリズもついてきてるけどな」

「美香さんは？」

「別任務だつてさ」

「そうか」

にしても、どうなんだ……。これ。

俺のすぐ後ろにカルマ。その後ろにイブ。その後ろにはリズ。更にはリリスという席順だった。

……授業中、サボることもできない、ということか。

案の定。一時間目からサボろうと教室から出ようとしたらカルマに止められた。と、同時に野郎共が一斉にこちらに向かって来た。

「ねえ、カルマちゃんって言ったよね？ かなり背低いけど、もしかして飛び級小学生！？」

「リリスちゃん可愛いよねえ！ どっから来たの？ てか、その髪は天然？」

「イブちゃんの金髪綺麗だよな！ てか可愛すぎる！」

「リズ、て呼んでいいんだよね？ その口調どしたの……？」

質問攻めされていた。まあ、大方予想はしていた。

「あ、悪慈……」

ああもう、そんな縋る様な目で俺を見るな！

「え、なに？ 悪慈君とカルマちゃん、知り合い？ ダメだよ、カルマちゃん、あんな不良と……」

同級生のメガネ少女になんか言われた気がするが、気にしないでおこつ。

「あ、悪慈は不良じゃない……」

「逆にそれは空しさを誘うだけだぞーカルマ……」

ん？ とカルマは首を傾げた。

リリスはなにやら「イエーイ！」とか騒いでる。ヤバイテンション高い。

イブは何が何やらであわあわしている。右往左往してどの質問に答えればいいのか困っている様だ。その姿はお持ち帰りしたい程愛嬌があつたが……まあ、自重しとこう。

「おい悪慈！ なんなのだこれは！ ひ、人が寄って集って……うぎゃー！」

「え、なんだよ悪慈。 お前リズちゃんとも知り合い？ お前どんだけ出会いあんだよ。この男の敵め！」

うるせえ！

こんな出会い、俺は要らない……。

俺の平凡な毎日よ、カムバアアアアック！

「神隠し」

はあ……。

ただ、溜め息をつくしかない。

カルマは学校で習うような知識を、あまり持っていなかった。教師に指名される度に、泣きそうな目で俺を見てきた。

「家帰ったら、勉強教えてやるからそう落ち込むなよ……な？」

「……ん」

なぜ、学校に入れさせたのだろう。姿を消せるのだから、それを存分に使うべきだ……。

そう呟いたら、カルマは「悪慈と一緒にいたかったから……」と言った。姿を消したら、カルマは俺から見えなくなる。姿が見えないというのは、きつと一緒にいるとは言えないのかもしれない。まあ、クラスの野郎共はカルマの美がつく容姿に釘付けた。きつといふように付き合ってくれるだろうから、あとは勉強の問題だけだ。

「あー！ 悪慈君、どうしたのぉ？ 今日帰るの遅いんだね！」

…… 由さんだった。

「俺はいつも通りですよ。由さんこそ、どうしたんですか。バイトは？」

「ああ……。それがねえ、最近変な事件が多発してるんだってさあ。だから早めに帰って良いよって言われちゃったから早帰り」

変な事件……？

「ん？ 悪慈君、知らないの？ 最近ね、人が行方不明になっちゃうんだって。事件かどうかはまだ分からないって言ってるらしいんだけどねえ……。ここの辺の人は『神隠しが再発した』って騒いでるみたいよ」

神隠し。数年前、大量の人がどこかへ消えた原因不明の事故。事故なのかどうかすらも怪しい。

「あ、すいません。ちょっと俺用事があるんでそろそろ帰りますね」

「ん、由ちゃん寂しい」

うるせえ失せる。

「ま、仕方ないか。可愛いガールフレンドと一緒にだもんね」

「……？ ああ、はいそうですね」

ガールフレンド。たぶん、カルマのことだろう。

そして俺はさっさとカルマの手を引いて歩きだした。カルマは後ろを気にしているようで、チラチラと由さんの方を見ている。

「ホント……人形みたいに可愛いわよね。その子」

思わず、歩みを止めた。その発言が、あまりにも恐怖を感じさせるほどに冷たく感じた。

「ん？ あ、そんなに深い意味ないからさっさと帰って青春してこい！」

本当に深い意味がないのか。……気にしても仕方がない、とさっさと帰ることにした。

「え、神隠し？」

家に帰ると、兄貴が会社を休んで新聞を読んでいた。そこでまた聞かされたのがこの『神隠し』の話だった。

「そつ、また始まったんだってさ。怖いよなあ……」

兄貴は他人事のように、だけど、顔を歪ませて本当に怖そうに言った。

「えつと、兄貴。俺思っただけどさ……」

『神隠し』は人形の仕業なんじゃないだろうか。

「……まあ、あり得ないだろうね。どうなんだい、カルマ？」  
「……人を殺して食す人形なんてどこにだっている。だから、これが二度目の『神隠し』だというなら、また人を喰らう人形が現れたと考えるのが妥当……だと思っ」

人を喰らう。

肉片も残さず。骨も残さず。……魂も残さず。

「……なあ、カルマ。ちょっと、ロールケーキ買ってくるから……  
…兄貴のこと頼む」

そう言つて、財布を持つて家を出た。

本当の行き場所は恭哉の家。実際、ロールケーキは買つて帰る予定だから、言つたことは間違いではない。

恭哉の家は屋根にぽっかり穴が開いていた。これを改めて見ると、ここまでしなくても良かったんじゃないかなと思つてしまう。

さあ、さつさと恭哉と情報交換でもしてケーキ屋さんに行つてきますかね。

## 真相

恭哉の家に行っても、なんにもならなかった……というのが結果的な話だ。あいつはまず『神隠し』が再発したこと自体知らなかったらしい。まあ、大方予想はしていた。

『神隠し』が人形の仕業。だとすれば、騎士団の一員となった俺が首を突っ込まなくてはいけない事件ということになる。

恭哉宅からの帰り道にあるケーキ屋さんには由さんがいた。なんか今日は良く会うな……。

「最早これは運命の糸……！ 悪慈君と私は赤い糸で結ばれていたのねー！」

「血塗れの糸みたいですわね」

店員さんにロールケーキを三個頼んだ。このケーキは例外なく美味しい。故に、三個頼もうが四個頼もうが、十個頼もうが驚く者はいない。

「それで、由さんは何をしにここへ？」

「ん？ ケーキを買う以外にここに用なんてないわよん。私はショートケーキ三個とチーズケーキ五個頼もうかしら」

やはり、店員は驚くこと無く仕事を徹底的にこなす。

「そうそう、さっき話した『神隠し』のことだけどね」

「……なんですか」

「悪慈君もう真相しってるんじゃないのかなって、私は思ってたかと思っただけ」

「……」

「そんなわけないじゃないですか。神隠しなんて非科学的なこと……。そもそも、ただの行方不明でしょ？」

「ただの行方不明じゃないから『神隠し』って呼ばれてるのよ」

なんだか息苦しかった。理由は、きつと由さんが妙に真剣だから

だろう。

「……ただの行方不明じゃないって……。集団での行方不明だって言いたいんですか？ 襲われてる人に共通することがあるとでも？」  
「うん、さすが悪慈君。分かってるじゃない」

……。

そんなバカな。それじゃあ、まさか……。

『人形の対価は魂』なんて話も聞いたことがあるが……。

「それに、やっぱり悪慈君。この『神隠し』がどういうものなのか分かってるんでしょう？」

「分かりません」

「だって今、『襲われてる人に共通することがある』って悪慈君本人が言ったのよ？ 私は『行方不明した人』って言おうと思ったのだけだね」

抜け目ない。

まさか、由さんがこんな人だとは思わなかった。

「すいません、家にガールフレンド待たせてるんで」

「……そうね。寂しくさせちゃいけないわね。」

最後、何かを小声で言ったのが聞こえた。聞こえてはいけない類の言葉だと思った。だから、聞こえないふりをして、早足で自宅に向かった。

家に帰ってまずカルマと部屋で話をすることにした。ちなみに、リズとイブは校内をいろいろ探ると言っていた。帰るのは夜になるそうだ。

「で、カルマ。どう思うよ」

「……人形の仕業で違いはないと思う」

カルマがそういうのであれば間違いはないのだろう。ともなれば、早速行動をしなくちゃいけない。

「とりあえず、これまでの被害者の特徴を捉えなくちゃな。次に被害者になるだろう人を予想しなくちゃいけないしな」

そう言っと、カルマは黙って頷いてから立ち上がった。

「どこ行くんだ？」

「聖人形騎士団本部」

## 聖人形騎士団本部

騎士団の本部なんて場所、知ってるのかよ。

そんな質問にカルマは口で答えたなつた。その代わり、行動で答えた。

「うお!？」

俺の体が一瞬で炎に包まれる。目の前には先程の目と変わらない、揺らぎないカルマの目が青く輝いていた。かなりの熱があると思つた炎は、しかし、熱気など無く……ただ、カルマと精神同体しているときの様な心地良い感覚に体が包まれていた。

「……ここ、は？」

気付けば、炎は消え去り、見覚えのない場所に立っていた。

「騎士団本部」

静かに、カルマは答えた。

「……つまり、瞬間移動してきたということか。」

「力を封印しててもできるもんなのか？」

「ん、これくらいなら」

そう答えて、さつさと歩き始めた。

しかし……騎士団本部、ねえ。カルマと俺が瞬かにどうしたのは廊下らしい。無機質な色をした壁がずっと先まで続いている。青い天井に描かれている白い魔法陣の様なもの連なっているのが気にかかるが。

俺は廊下を一通り眺めてから、無言で歩くカルマの背中を追い始めた。その背中には、なんだか頼りがいのない……しかし、見て落ち着く小さな背中だった。しかし……伊織の小さな頃の服は、白いフリフリがついていて、カルマに似合わないと少々吹き出しそうになる。

この変わり映えのない廊下にも飽きた頃、カルマが立ち止つた。左側を見ると、廊下と変わらぬ無機質な色をした扉があつた。だが、

この扉にも魔法陣の様なものが描かれている。……魔除け？

「魔除け……まあ、あながち間違いではないでしょう」

後ろから聞き覚えのある声がした。騎士団長のサラだった。

「もしかして、団長って読心術とか……？」

「団長じゃなくて、サラでよろしいです……あまり、お堅い肩書きは好きじゃないので。それと、読心術などは持ち合わせていませんよ。ただの勘です」

「そうなんですか」

サラは俺とカルマの間を通過って扉のすぐ右にある物に手をかざした。

「……？」

数秒後、ピーっという音がした。

「これで鍵は開きました。さあ、どうぞ。立ち話は疲れるでしょうからね」

「ああ、どうも……」

サラに促され、俺とカルマは団長室だと思われる部屋に入った。

「なんだか、随分と私室のような部屋……ですね」

部屋の壁は純白。ただ、その一角にあるベッドもまた純白であり、そのベッドが置いてある壁側にはカレンダーが張られている。更に、丸いテーブルの周りに四つの赤いクッションが置いてある。純白の壁に対して、床は薄いピンク。唯一、団長室らしい箇所は「社長室にありそうな机」くらいだ。

「ええ、ここは私の部屋ですからね」

「え、住んでるんですか？」

「はい、ここは私の部屋であり私の家です」

さすがにそれは想像もしていなかった。そりゃあ、団長という立場上本部内での寝泊まりはあるのだろうとかは予想できた。けど、

住んでるなんて……。しかも、床がピンクなんて……。

「……床がピンクだと、なにか不都合でも？」

「え、ああ、いえ、そんな不都合なんて……」

やっぱり心を読めてるんじゃないか？ それも凄いレベルで。

「それで、あなた達はなにをここにこへ？」

本題は、カルマが話した。

「ここ最近の『神隠し』と呼ばれる行方不明が多発している。その原因は『人形の対価』だと、私と悪慈は考えた。魂、と言っても『女の子の魂』とか『子供の魂』とか限定されている可能性がある。だから、過去の被害者の資料が欲しい」

「……ここがその『神隠し』と呼ばれる事件を『人形の仕業』と考えている。確かに、そうですね。ですが、あなた達に資料をお貸しする理由が見つかりません。そもそも、あなた達はまだ訓練すらしていない素人です。まずは訓練をするのが——」

「そんなことしてる場合じゃないでしょう」

このままだと、きっと事件に首を突っ込むと言われるだろう。

だから、サラの言葉を遮った。

「俺の住んでる町で人形が暴れてるかもしれない。だというのに、俺は訓練をしているって？ 俺はそんなの嫌ですよ。この町は俺の好きな場所だ。俺に守らせてくれ」

「……そんなことをしている場合じゃない……ですか。そうですね、あなたにその言葉そのまま返してあげましょう。『そんなことしてる場合じゃないでしょう』」

「……どういう意味ですか」

「あなたは基礎的な訓練さえしていないド素人。そんな人に、この任務は重すぎる。あなた達はそのまま生徒に人形遣いがいないかを探してくれればいい」

「そんな——」

「あなたは、『覚醒』しかけたらしいですね」

さっきの仕返しとばかりに、言葉を遮られてしまった。

「カルマは本来、そんなに力を持たない人形だと言われています。けど、それはカルマの主が弱いモノだったからそう言われるようになっただけ。カルマはこれまでに『覚醒』する様な人間と組んだことがない……。柿崎悪慈、あなたの『覚醒』は危険です。全てを灰に帰すかもしれない。そうなれば、町が火の海になりますよ。あなたが、『大好きな町』を壊してしまうかもしれないですよ？」

……反論は、できなかった。

カルマが裾をクイツと俺の服を引っ張った。見ると、「ここは退こう」と言っているようだ。

「……分かりました。分かりたくありませんが、とりあえず分かりました。なら、さっさと訓練ってヤツをしましょう。訓練をして、一人前の騎士団になれば首を突っ込むことも許されますよね」

「……………。ま、いいでしょう。訓練は『覚醒』をコントロールできる程になるまで続きます。いつ『覚醒』するかも分からない人を前線に出すわけにはいきませんからね。では、一度部屋を出てください。訓練の準備をします。……………いいですか？ 生半可な気持ちで訓練に挑まないでくださいね。死ぬかもしれないので」

その時のサラの顔は、あの時の様な 存在感、威圧感、圧迫感があった。逃げ出したい足を必死に抑えて、俺は不敵な笑みを浮かべた。

## 訓練

サラに連れられやってきたのは地下だった。

「……広っ！ これ、周りの家の地下も使ってるんじゃない？」

「ええ。……ちゃんと許可は取ってます。騎士団だって、なんでも好き勝手やっていいわけじゃあないんですから」

それもそうだろう。警察が人を殺せば法律によって裁かれるわけだし。

しかし、広い。

無機質な色などは変わらないが、床と天井、壁に廊下にあつたそれとは比べ物にならないでかい魔法陣が描かれている。これも魔除けのための魔法陣なのだろうか。

「いいえ、この魔法陣は魔除けじゃありませんよ。破損などしてもすぐに元に戻る、いわば、再生を象徴する魔法陣ですね」

確かに、廊下にあつた魔法陣と形が違うように見える。

しかし再生……ねえ。随分と便利そうな魔法陣なこと。

「ですが、人体に影響は全くありません。……怪我をしても再生されることはないので、ご注意くださいね」

だが、本来……魔法陣は壊れればその効果無くすのではないだろうか。

「いえ、この魔法陣の再生力を活かしているんですよ。魔法陣が壊れても再生をしようとする力は、描かれている床にも影響しますからね」

……つまりなんだ？ 再生するのは魔法陣で、床や壁が再生するのはついだってことか……？

「ま、そんなところですね」

「あんた、やっぱり心を読めてるでしょ……」

俺は声に出していない疑問を次々と答えられてしまい、何故か不愉快になった。心を見透かされている恐怖感。これほどのメンタル

な負担は、そうそうないだろう。

「では、早速訓練を始めましょうか」

俺のセリフには答えずに、さっさと話を進めていくサラ。すごくウザいです……。

「まずは基礎的な訓練です。……この地下は五キロメートルの正方形です」

「それで？」

「走ってきてください」

「は？」

素っ頓狂な声、とは即ち今の様な声を言つのだろう。

「マラソンです。ここを何周走ることができるか……自分が限界だと思つところまで走ってください」

……はつきり言っておこう。

「一周しただけでぶっ倒れそうな気がするんですけど……」

「一周しなくてもいいです。とりあえず、自分の限界まで走って……いや、限界の限界まで走ってください」

限界の限界……？

「要するに、限界だと思つても暫く走るといことです」

「……………」

「やらないと任務に就けませんよ？」

「あーもう！ やればいいんだろ、やれば！」

もう投げやりだった。

「は……は……は………」

もう、息を吐くのも吸うのも辛い状況だった。これで何周めだろうか。二週目……だろうな。

『……良く走りますね。そこら辺にいる騎士だって、ここまでの体力がある人はそういないと思いますよ』

応えられる余裕はない。

イヤホンから届くのはサラの声。サラといつても通信できるよう、と通信機を持たせてくれた。

しかも後ろから変な空飛ぶメカ的なものが追いかけてきている。形状からして、監視カメラの役目をしているのだろう。監視される理由は、きつと倒れても即時救護室に運べるようにだろう。……違う理由だとするならば、「元は剣を交えた敵。信用はできない」というところだろうか。

『よく分かりましたね。大半の理由は後者です。カルマはこちらで直に監視できますが、あなたは違いますからね』

『ま、そう仰らずに。心を読まれたくないなら、何事にも揺るがない心を手に入れることです』

何事にも揺るがない心……。そう、復唱した瞬間。

——プツン。

電源を切ったテレビの様に、急に意識が切れた。

「ん……あ？」

目を覚ました。……あの独特な薬の匂いがする。保健室……？ いや、違う。ここは、どこだ？

「ありや？ 目、覚めましたかー？」

俺の上に何かが乗っている……？

意識がようやく覚醒してきた。状況を見る。どうやら、騎士団の救護室の様な部屋らしい。そして、俺はそんな救護室の白いベッドに寝ている。その上に女性が乗ってる。……何故だ？ ホワイ？

「ここは救護室なんですねー。分かりますかー？」

「ええ、まあ、なんとなくて」

見ると、金髪のポニーテールが揺れていた。一瞬、メアリーを思

い出したが、どうも違う。メアリーは、救護された人にこんな跨る様な行為はしない。ならば誰だ、と顔を見た。そこにメアリーの面影は何一つとして無かった。

「ちえー、目が覚めちゃったかー」

「そこは喜んでくださいよ」

「喜べないよー。だって目を覚ましちゃったら、この注射の実験をあなたの体するのに許可を取らなくちゃいけないでしょー？」

左手に持った注射をこれ見よがしに見せつけてきた。なんか、緑の液体が入ってる……。

「……無断で実験するほうが間違ってますよ……」

メガネをした緑眼の女性は「仕方ないか」と言いながら俺の上から退いた。

「さーで、それじゃ、さっさと済ませちゃおっか！」

「は？ 何をです「えーい！」か!？」

一回退いたと思ったら、今度は俺を押し付けるようにしてベッドに乗ってきた。

「えへへー、これで動けないよー」

まな板！ いや、なんの話かは悟ってください。

てか、吐息が顔に掛かる！ 近い！ 顔近い！ 胸当たってる（まな板だけど）！

だが、こんなことになったらどうするか……選択肢は一つしかない。一つしかない選択肢を選択肢と言っているのか分からないけど。「退、いて……くだ、さい！」

俺の顔の近くにあるその顔を力任せに押しのける。

「やーん、いいじゃないちよつとくらーい」

全然良くない。

そんな緑色の液体、どつかのエイリアンの体液以外に見たことねえぞ。しかも映画の中だ。現実にあつてはならない……はずだ。

「みんなはふつーに受け入れてくれるよー！」

「嘘をついちゃいけません！」

「あひゃー！」

なんなんだ。この意味不明なやり取りは……。

「そこら辺にしてあげなさい。依姫」

そのやり取りを止めさせてくれたのが、救護室に入ってきたサラだった。

「ちえー、団長様。ドーピングって興味ないのかー？」

「ありません。私は自身の力で自身の力の限界を知る人が好みですから」

相変わらずお固いなー団長様ー、と口を尖らせている女性は依姫という名前らしい。

「あ、そうだったー。私の名前、教えてなかったなー。『かものたまより賀茂玉依姫』だー。覚えておいて損はないぞー」

そして覚えていなくても得はない、と。

しかし、依姫は白衣を着ている。ということは、つまり……。

「学校で言う保健医ってヤツだよー。一応ねー。免許は持ってるよー。ま、よろしくねー。悪慈くーん」

俺の名前を知ってる理由は、どうせサラだろう。この人が俺の名前を知ったところで、地球の一大事になるわけでもないから、別にいいけど。

「さてとー、じゃ、悪慈君のあだ名、考えなきゃね」

……俺の一大事だった。悪慈という名前からどんなあだ名が生まれるやら……。

「そついえばカルマは？」

「カルマもあなたと同じように、地下を走ってもらっています。まあ、彼女は人形ですからね。人間に比べれば体力は無限にあるようなものです」

元々比べる様な物でもないのですけれど、とサラは付け足した。

その後、俺が倒れた経緯などを聞いた。それから数分後にまた地下に来いと命令が下った。

## 襲撃

「地下に来ていただいたのは訓練するためではありません。時間が時間ですので、帰っていただくために来ていただきました。……それから、柿崎悪慈にだけ言っておきたいことがあります。まあ、その話はまた後で、ですが」

そう言うと、サラは指をパチンと音高く鳴らした。

それと同時に、なんの音も無く、始めからそこにあつたかのように、光の扉が現れた。

「……なんですか、それ」

「この騎士団の出入り口ですよ。カルマの能力でここに来たようですが……侵入者扱いされますよ？ これからはこの鍵をお渡ししますので、もう侵入するような真似はしないでください。では、私は忙しいので部屋に帰らせてもらいます」

そう言つてサラは地下室から出ていった。

「……カルマ、この鍵の使い方知ってるか？」

無言で首を振るカルマ。

「……まあいいか。」

光の扉に入ると、驚くことに俺の部屋へと繋がっていた。こんな異空間移動みたいなことあつていいのだろうか。そう突っ込もうと思ったが、俺も騎士団に行く時カルマの能力で瞬間移動じみたことをしたのだから突っ込まない方がいいかと考え直した。

「兄さん、帰つて来たんですか？」

部屋の扉が開き入ってきたのは黒いポニーテールがあほっぽさが滲みでてる伊織だった。

「おう……。伊織は俺とカルマが騎士団に行つてたこと知ってたの

か？」

「はい、サラさんから電話が来ました」

電話……。光の扉みたいなのを見せておいて、通信手段は科学的だなあ。

「そんなことより、早く下階に下りてください。カルマちゃんのために牛肉いっっぱい焼いたからね」

カルマが、目を輝かせた。それから大きく「ん！」と頷いた。

学校は相変わらずだった。由さんとは会わなかったけど、会わないで良いことに越したことはないわけだし。

「カルマ、いいか？　ここは——」

カルマに勉強を教えるときに、そいつはやってきた。

「おい！　柿崎悪慈はいるか！？」

教室のドアが思いつ切り開いた。そこに立ってたのは国語担当のゴリキだった……。

「えーっと、俺なんかしましたか？　万引きとか……」

「そんなことじゃない！　伊織って子が何者かに襲われたって……吉井って人が助けてくれたらしいが……今は病院に運ばれてるって！　とりあえず、お前に連絡すればいいって病院から言われたんだけど……」

……は？

今、なんて言った？

このゴリキは、なんて言いやがった？

妹……？　伊織？

「おい！　ぼーっとしてる場合じゃないぞ……とりあえず病院に行つてやれ！」

「あ、ああ………」

「悪慈……行こ」

俺は、動けなかった。足が震えた。

なんで……？

伊織が襲われた……？

誰に？

それは、言うまでも無く、見るまでも無く、聞くまでも無く……  
……人形。

「くそつたれ……。カルマ、行くぞ！」

「ん」

カルマの手を引いて教室を出た。

それから、ずっと走った。

「悪慈……瞬間移動すれば……」

「ダメだ、できれば力は温存させておきたい。伊織の無事を確認したら、すぐ伊織を襲いやがったヤツをぶん殴りにいく！」

それに、病院の場所は知っている。学校からかなり近いはずだ。

「伊織！」

伊織がいる病室を聞いてから無機質な廊下を走りまくった。何故か、その伊織の病室に行くまでの間がとても長く感じられた。

「お前が、このガキの兄か」

伊織の病室にいたのは、白い白衣を着た医者……。のはずなのに、どこか不良の様な男だった。チャラチャラしていないけど、学校で

たばことか吸ってそんな奴。

「来るのが遅いぞ。……このガキの命に別状はなかった。安心しとけ」

「くっ……う……」

伊織の手を握った。その手は、死んでる様に冷たくて……。

「カルマ……伊織に残った気配とかないのか？」

「……ある。けど、小さくて良く分からない」

「オーケイ。十分だ。小さくてもいいし、分かりづらくてもいい。

この際勘でもいいから、そいつの場所教える。お前と俺とで、お仕置きしてこようぜ……」

カルマは、間をおいて頷いた。

碧眼から紅眼に変わる瞬間を、俺は見届けた。

## 犯人

カルマの力で瞬間移動を果たした俺達が立っていたのは、公園だった。

『小鳥遊公園』

まだ両親が生きてた頃に連れてきてくれた、という話を兄貴から聞いたことはある。が、記憶は……ない。かなり昔のことだから、覚えていられるわけもなかった。そもそも、両親の顔さえ覚えていないのに……。

「ここに、『神隠し』の犯人がいるのか？」

「……たぶん」

自信なさ気に頷いたカルマ。さて、ここからどうやって探そうか

……。

「あれえ？ 悪慈君じゃない！ 学校どうしたの？ あ、伊織ちゃん……無事だった？」

「……由さん」

珍しく、ロングスカートを穿いた由さんが立っていた。

嫌な、予感がした。

「悪慈……気配が……」

気配が、襲った奴と一致した。

カルマがそう言おうとしたのが、伝わってきた。

ここで俺がするべきことは……冷静になることだろう。

「由さん、あんたが『神隠し』の犯人……なんですか？」

由さんの顔に陰りが見えた。

しかし、すぐにいつもの顔に戻り、いつもと違う口調で話始めた。  
「結果から言わせてもらうけど、『犯人』という立ち位置にはないわ。それに、私は人形遣いじゃないしね。……人形遣いはこっちの女の子よ」

「……………」

由さんの後から小さな女の子が出てきた。怯えている様な顔で。特徴が掴めない。どこにでもいそうな女の子。短いツインテールが、可愛さを引き立てていた。

「……どういうことです？ こんな小さな女の子が？ ふざけないでくださいよ、由さん」

「ふざけてなんかないもん。だってさ、悪慈君？ 君がその子を召喚した理由はなにかしら？」

俺がカルマを召喚した理由……？

理由なんかない、ただの偶然。……偶然？

「そう、偶然よ。この子も単なる偶然によって人形を召喚してしまった」

「……人形の名は？」

「ヘラクレス」

……ヘラクレス。俺でも知ってるギリシャ神話の英雄。

そんな英雄が、人形なんていう肩書の元に現代にやってきてしまったというのか……？

「もしかして、ですけど……ヘラクレスが犯人ってわけじゃあ」

「それも違う。ヘラクレスとこの子……かしおきさなえ榎荻早苗ちゃんは、どちらかというと、正義の味方っていう立ち位置ね」

つまりは、俺と同じ立場……？

犯人を捕まえる、正義の味方？

「ゼウスの子と呼ばれてるヘラクレスよ？ 天使タイプに決まってると思わない？」

なるほど。ゼウスの子、だなんていうのは初耳だが、天使タイプだといのならば納得だ。

「……由さんと早苗ちゃんは、もう犯人は分かっているんですか？」

「ええ。ヘラクレスが人形の気配を探って、見つけたわ。人形の名は『アヌビス』。人形遣いは……『佐藤望』よ」

——この時、俺の中の時間が止まった。だって、佐藤のヤツは……恭哉の手によって、死んだはずじゃあ……ないのか？

## 犯人（後書き）

徐々に犯人とかを明確にしていくつもりが、ズバツと犯人分かったやいましたね……。

まあ、役不足だったみたいです。次の事件（？）の話やるかどうかは分からないけど、その時はちょっと多めにキャラを出してみようかなーと思ってたり思ってたなかったり……。

評価とか、感想とか頂けると俺としては嬉しいです。

「生き返った人形遣い」 佐藤望

佐藤が生きてた。

あの時、肉片も残さず吹き飛んだと思われていた佐藤が、生きていた。

家に帰り、俺は部屋の隅に置いてある刀を鞘から抜いた。

「じっちゃん……」

はつきり言って、俺のじっちゃんが生きてた頃、俺はじっちゃんを嫌っていた。

蹴り倒して、罵倒して、酷いことをした。と、俺は思っていた。しかし、じっちゃんは「子供の遊びさね。あんなでいちいち気にしてられんよ。ありやあ元気に育つぞあ」と自慢げに親戚の皆に話していたらしい。俺がやっていたことは子供の遊びだと気付いたのと同時に、じっちゃんの心の広さに気付いた。じっちゃんは、きつとそうやって全てを受け入れて……全てを許容して生きていたのだろ。あの人が怒ったところを見たことは、一回もない。蹴り倒しても、「おう、いい蹴りだ！ 将来が楽しみだな！」と笑っていた。「……俺は、全てを許容できるような人間になれねえ」

じっちゃんみたいになりたいと、願った日があった。全てを許し、全てを受け止める。そんな心を持てる人間に、なりたいと思っていた。

「俺にはなれねえんだよ……じっちゃん……」

蘇る記憶。「悪慈、お前なら、悪にも慈悲を与えることができる立派な男になれる！」。じっちゃんの声が、リアルに響く。

「なれないんだよ、じっちゃん……！」

瞬間、部屋の扉が開いた。カルマだった。

「……悪慈？」

刀を鞘へ納めた。甲高い音が鳴り響き部屋に反響した。

「カルマ、佐藤を殺るぞ」

冷たく、伝えた。

「今度こそ、徹底的に、肉片も残さず、残骸も残さず、逃すことも無く、ただひたすらに、切り裂いてやろう」

カルマは、いつもと違う俺の様子に困惑しつつも静かに頷いた。

——じっちゃん。あんたに問いたいよ。もし、家族を傷つけられ  
ても、その傷つけた者を許すのか？

雨が、降り続いてた。いつから降っていたのだろう。家に戻った瞬間までは晴れていたのに……。

傘もささず、雨に濡れるのも構わずに、俺は佐藤のあの豪邸の様な家を目指していた。カルマは既に俺の中にいる。俺の体に触れた水が蒸発していくようなほどに、熱い。これは、たぶん怒りだ。生きてただけでなく、俺の家族に傷を付けた。ただでさえ伊織は、腹部の傷も完治していないというのに……。

アヌビス。

一体、どういう人形なのだろうか。アヌビスも、佐藤を嫌っているのだろうか。

「なあ、カルマ。お前は今、何を考えている？俺は、佐藤をグシヤグシヤに殺すことしか頭にない……」

「……それを聞いて、どうするの」

「ちよつとした気休めだよ。意味なんてない。……話題はなんてもいいから、お前の声を聞いていたっていうのが、一番の目当てかな」

あの、落ち着く音色を……ただ、聴きたい。

「……私は、ただ、悪慈の言うことを聞くだけ」

「悲しいことを言ってくれるな。俺は別にお前を縛ってるつもりはないんだけど……」

「ち、違う。私がそうしたいだけ。悪慈を守りながら悪慈の言うこ

とを聞く。これ、結構大変……」

そういえば、カルマの守りたい者は俺だったな。

カルマは、本当に大変そうに言った。

「悪いな、苦勞かけて」

「別に、私は私の好きなようにしてるだけだから」

そりやどうも。

心の中で呟いて、天を仰いだ。気付くと、既にそこには佐藤の家に着いていた。

佐藤の家には無断で入った。別に、門から堂々に入ったわけだし、不法侵入をしたという罪悪感は無かった。きつと、今の俺は、佐藤を殺してもなにも感じないのだろう。感じることも無く人を殺すことができる人間。俺がこの世で一番恐ろしい者に、俺はなろうとしているのではないだろうか。

罪悪感を持たない殺人者。

罪悪感とは、人間が理性を持っている故の物だ。理性を失えば、四足歩行の獣と変わらぬ者になってしまう。罪悪感がどれだけ重要な感覚なのか。俺は、身をもって知っている。まあ、その話はまた今度……。

佐藤の豪邸は相変わらずバカでかい。

三階建てで部屋の数は一十一。俺には、ホテルの様にしか見えないう家だ。メアリーの屋敷には劣るが。

「やあ、悪慈君。久しぶりだね。また会えて嬉しいよ」

背中を唾液たっぷりの舌で舐められるような不快な感覚。足の裏を、大量の蟻が這いずりまわっている嫌な不快感。

「ああ、久しぶりだな。佐藤」

後ろを向くと、前までの面影も少なくなった佐藤がいた。

メガネはなくなり、髪はぼさぼさ。服も、学生服なのは変わらな

いが、ボロボロに成り果てていた。

「随分な格好になったな。学校はどうした？　ああ、一度死んだから通い辛いのか？」

「……ああ、そうだな。僕は生まれ変わったんだよ。一度黒い炎に体を滅ぼされて尚、僕は生き返った。コイツのおかげでな」

スツと、佐藤の体が抜けてくるように音も無く現れたのは、たぶん「アヌビス」だろう。

「……………」

それは無言のままで立っていた。

「こいつはアヌビスって言うてね。僕に唯一肩入れしてくれた人形さ。もう、目も覚めたよ。この世界の王になるのは、とてつもなく難しい話なんだってね」

「へえ……一度死んで、頭も冷えたのか？」

「だけどねえ。王になれる道は、決して王道だけじゃない。外道だろうと邪道だろうと、なんだって構わないんだよ」

俺の話をかめま、佐藤は話し続けた。

「信頼を得て王になる必要なんてない……王になる材料なんて、恐怖だけで十分なんだよ悪慈君。その為には、まず力を付けなきゃね。そのために、コイツに対価を払いまくったんだよ。こいつの今の力は、プロセルミナのおよそ二百倍。あいつと同じ死霊使いみたいな奴だからね。とても厄介な人形さ」

瞬間、口を三日月の形に裂いた。

「さあ！　君は選ぶ権利があるよ！　幼い女子の魂じゃない君には選ぶ権利があるんだ！　僕に絶対の忠誠を誓って従い生きていくか……。この場合には、君は特別扱いしてあげるよ。殺しの自由も与えよう。金も、好きなだけ使っていい……。そして、もう一つの選択肢は、ここでアヌビスの手によって死ぬことだ。これは、とても最悪な選択だよ。アヌビスの力に加わることもできず、なんの意味もない死を迎えるなんて、嫌だと思わないかい？」

俺は、一つ、溜め息をついた。

「そうだな。お前の手に掛かって死ぬのは、本当に嫌な死に方だよ佐藤。でもな、俺がお前に従うと思うか？ ふざけるのも大概にしとけ。お前は俺の家族を襲った。そんなヤツに、従い忠誠を誓うわけがないだろうが」

俺は、冷めた目で佐藤を見下した。

「言っておいてやるよ。お前みたいに『王になりたい』って言うてる奴はどこにだっている。ああ、誰もが持つ『夢』だ。だがなあ、それは所詮『夢』なんだ。『夢』なんだよ佐藤。そして、その『夢』ってのは、子供の頃にしか見れない……今になって夢に縋ってどうするよ。現実を見るよ。お前、もう十七過ぎてんだろ。もう、将来の夢なんて言つてられないんだよ。未来には現実が待ち受けているだけだ。夢を見過ぎた幼稚な高校生は、とっとと殴って目を覚まさせてやんよ！」

佐藤は、無言でそれを聞いていた。

それから、俯き、目を閉じ、静かに口を開いた。

「僕達はまだ、子供だよ。そう、『夢』を見る子供だ。でも、子供の内に『夢』を実現させれば、それは現実と成る。現実となればそれは現実であつて夢じゃなくなるんだよ悪慈君。夢を現実へと変えることの何が悪い！」

俺は呆れていた。まだ、諦めないのかと。諦めたところで、俺はコイツを殺すのだろうけど、せめて諦めてほしかったと。

「……世迷い言もここまでだ、佐藤。お前の夢は夢であつて夢以外の何物でもない」

「黙れ！ お前こそなにをしている！ 夢だ夢だと諦めてなんになる！ 夢を現実に変えることのなにが悪いんだ悪慈！」

もう、俺が悪者みたいになっちまったな。と、心の中で苦笑した。「さて、言いたいことはそれだけか？ ……お前のそれは理想であり幻想。現実には、変えられないんだよ。さあ、お仕置き時間つてヤツだ。そのふざけてやがる理想も幻想も妄想も想像も、まとめてぶった斬つてやるからさあ。ちよつと頭、冷やしとけ」

左手に持った刀の鞘を抜き、掌に力を踏み入れる。

それから、刀を思いつきり横薙ぎした。瞬間、紅蓮の炎が廊下を包んだ。

「クフツ！ フヒヤハハハハハハハ！」

下品な笑い声と共に、燃え盛る廊下から現れた佐藤は無傷だった。

「……火加減を、弱めすぎたかな」

「悲観することはないよ悪慈君？ 君の力が弱いんじゃない、僕が強すぎるんだ！ さあ、叶えるよ！ 僕の『夢』を！」

「……………」

佐藤を睨みつける目に、自然と力が入った。

それは、瞬間的な出来事だった。

窓から、甲高い音を立てて何かが突入してきたのだ。耳を劈くような、甲高い音と共に。

「柿崎悪慈。なぜここにいますか」

「俺が聞きたいんですけど？ サラさん」

ペガサスから降りた白い戦士は、優雅に構えた。そして、そこに現れたのは純白の大剣。……その大剣が、半分に割れた。

「え……………」

「この大剣は元々二刀の大太刀なんですよ。まあ、リーチが長い双剣とも言いましょうか」

それはとても扱い辛いのでは……。

「ええ、これを扱えるようになったのは遂最近のことですからね。」

……さて、本物の王の力。お見せしましょうか。佐藤望<sup>アサー</sup>」

王の力。確かに、どこかでみた騎士王みたいだ。まあ、あれはア二メでしかみたことないけど。

「……咲け、月下美人」

サラが左手に持った大太刀を横に振った。

周りが、暗くなった。暗くなったという表現は良くない。闇に覆われた、とも言おうか。とにかく、周りが見えない。一メートル

先も見えない。それどころか、十センチ先も見えちゃいない。

「月下美人という花を知っていますか？ 夜に咲く白い花……。それはまあ美しいとしか言いようがありません」

どこからか聞こえるのはサラの声。

「では、お見せしましょう。月下美人という名を持つ技を……！」

言った瞬間、俺の背中の方が明るくなった。振り向き見ると……。

「なんだ……これ……」

闇に咲く白い花。これが月下美人……。そして、瞬く間にその花が次々と咲いていった。気付けば、闇は隙間からチラチラ見えるだけで、殆どが月下美人で覆われていた。

「うわああ！」

突然の浮遊感。無重力。気持ち悪い。

しかし、それも一瞬だった。

すぐに闇は消えさり、花も消えた。そこにあるのは、長い廊下だけ。

「……逃がしましたね。なるほど、アヌビスですか……」

白い戦士の手からは既に二刀の大太刀は消えていた。

「それにしても、まったく……。あなた、死にたいんですか？」

「いや、自殺志願者とかではないですね」

「じゃ、一体なんでこんなことを？」

「それは……佐藤を殺したかったから」

「私でさえ取り逃がした佐藤望を？ あなたが？ はあ……あなたが鍛えるべきなのは、身体じゃなくて心の方がよさそうですね。『覚醒』も、その方がコントロールできるようになるでしょうし。不本意ですけど、明日からは、心の鍛錬に切り替えますよ？ いいですか？」

怒られてる……まるで児童の様な心になった。

「……返事！」

「ハイイ！」

気付けば、俺は正座になり、いつの間にか姿を現したカルマも正

座になって、サラの説教を延々と聞かされてしまった。

「生き返った人形遣い」 佐藤望（後書き）

ちよつと、これからの更新が送れます。どうかご了承ください。

## 決着と覚醒

次の日。高校を休んだ。別に、行きたくないから行かなかったわけじゃない。勿論、理由は一つ。

世界の王を目指した男を殺しに行く。

昨日の晩、カルマと話合った。カルマは俺についてきてくれると言った。サラには悪いけど、心を強くする訓練なんてするだけ無駄だと思った。幾ら『覚醒』とかいうヤツをコントロールできたところで、それはきつと、俺の力ではない。佐藤を殺すのは俺の力ではなくてはいけない。実際、俺の力でなくてはいけない理由は何一つない。ただ、あいつとの付き合いは長い。せめて、その一生を『友人』であつた俺の力で幕を閉じさせたい。そんなバカなことを、考えていた。

行く場所は、とりあえず佐藤の家だ。まさか、まだ家にいるとは考えづらいが、佐藤がいきそうな場所が分からない。昨日歩いた道を歩く。変わらない道を歩く。ただ、雨が降っていない道を歩いた。

「おいおい、マジかよ……」

「……それはこっちのセリフだよ、悪慈君」

佐藤は普通に家の中にいた。それが当たり前であるように、ただ家の廊下を歩いていた。

「まさか、昨日の今日で来るとは、予想外だったよ。でもまあ、いいや。今度は邪魔も入らないだろう？」

「そうだな。昨日のあいつはホント邪魔だった。これでようやく、

お前のことを殴れそうだ」

俺は持っていた鞘から刀を抜いていく。昨日と同じように。その、刀が抜かれていく感覚を感じながら。

「お前の理想は間違っている」

そして、ゆっくり抜いていた刀を一気に引き抜いた。

「元友達の好だ。<sup>よしみ</sup>お前の間違った理想を、俺がこの手でぶち壊してやる」

空気を震えさせながら刀を一振り。威圧する様に睨む。

「間違った理想……か、そうだな。確かにそうかもしれない。けどね、悪慈君。僕にはもう、これしかないんだよ。例えば間違っていようと、王に成る夢は絶対叶えて見せる」

佐藤は俺の睨みに怯むことも無く、言った。

「例え……他の人間全てを殺してでも、か？」

「……ああ、僕は、君を殺して、騎士団を潰して、この地球を仕切ってる奴らを殺して殺して殺して殺して。殺しつくして、王になる」  
「……お前を生かしておく、この世が大変なことになりそうだ。残念だけど、お前はここで潰しておいてやる」

足に力を入れた。勿論だが、既にカルマは俺の中にいる。昨日の今日だ。きつと対価を払わなくちゃいけないだろう。それでも、いいと思った。首からは嫌だけど、腕からなら文句はないさ、と。

「いいよ、来いよ。王になろうとした男の力、見せてやる。……アヌビス！」

佐藤も構えた。そして、呼んだ。しかし、アヌビスは現れない。何故だ？

「たぶん、精神団体してるんだと思う。アヌビスは傀儡師だけど、精神団体できるっていう数少ない人形。気を付けて」

「ああ。分かった」

先手必勝。

俺は足に貯めた力を一気に放った。いつも通り、カルマは爆発を起こしてくれた。そして、俺が繰り出した刺突は、見事に佐藤の胸

部に突き刺さった。

「……これで終わり？ いや、そんなことがあるわけがない。

「その足の爆発、厄介だな。この際、足を切っちゃおうか、悪慈君」  
前からヒュンヒュンヒュン、と何かが飛んでくる音がした。

『悪慈、ジャンプ！』

カルマの声を聞いた瞬間には、俺はとくにジャンプしていた。  
着地をした後、後ろを見ると、立っている石像の足が切れた。当然、  
その石像は崩れた。

「……なるほど、糸か？」

「ご名答。アヌビスの力は糸を操ることだけ……傀儡師としての基本的な力しかない。代わりに、精神団体できる。そして、精神団体した俺はアヌビスの力を使える。だから、お前らを操り人形にすることだってできる」

言った瞬間、佐藤は腕を振った。

それが、糸を飛ばすためだと思った瞬間に嫌な感触が体中に纏わりついた。

「……なるほど、これで俺は身動きができないって訳か」

「ああ。更に言うと、この糸を引っ張るだけでお前の体はバラバラだ」

それは大変だ、とおどけて見せたが……これはかなり危険だ。

「……だが、考えてほしい。これは所詮、糸なのだ。

『焼き切れるか、カルマ？』

『……試してみる』

カルマが集中したことが伝わってきた。やはり、普通の糸というわけではない様だ。焼けない糸だったら、もう俺勝ち目ないなあ。

そう思い、嫌なビジョンが頭に浮かんだ瞬間。糸が燃えた。

「な……！ ……そうか、そういえば、炎を扱ったんだな。伝説上、そんなこと全然書いてないから覚えてなかったよ。不覚だ……」

だが、判断を間違えたかもしれない。ここで雷撃をしていれば、  
今頃佐藤は倒れてたわけで……。

しかし、悔やんでる暇もない。相手がいつ、もう一回糸を使って俺の体の切断を試みるか分からない。

「っはあ！」

気合一閃。相手の糸が来る前に斬ろうと突進した。……炎が出なかった。

『悪慈、避けて！』

突進、なんて判断こそが誤りだった。

カルマの声は、ちよつと遅かった。

——佐藤が、ニヤリと笑った。

「……！？」

左腕の感覚が、一瞬なくなった。それは、とても恐ろしいこと。感覚が無くなつてから押し寄せてくる——痛み。

「ぐあああああ！」

切れた。左腕が。ぶつりと。まるで、ロボットの玩具の腕の様に、簡単に。切断された。

「もうちよつと、気を付けるべきだったかな」

佐藤のいうことなんて、もう聞こえていない。

俺は床に倒れ伏し、左腕を……左腕があつた場所を抑えた。嗚咽が漏れる。刀など、持っていないわけもなかった。視線だけ動かしてみると、刀はすぐそこに堕ちていた。

「はっ……はっ……」

呼吸をする度に、ジンジンと痛みが走る。その痛みは、もう痛みと言つていいのか分からない。感覚が麻痺してくれ、と願ったが、麻痺するどころか、痛みが増してきた。

「悪慈！」

カルマは、俺の体から出ていた。痛みには耐えきれない俺は、気絶しそうだった。そんな意識の中で、カルマの顔を見た。泣きそうに歪んでいながらも、切断された腕はどこにいったかと探す様に右往左往していた。そして、そのカルマの後ろから……カルマの首を、糸が捉えた。

「……え……？」

「お前は動くな。もとより、僕は君が欲しかったんだ。吸血鬼の形カルマ。動けば、それは抵抗と見てその首を飛ばす」

カルマの頬、額、鼻、体中から汗が噴き出てるのが見えた。

どくん、と。心臓が一つ高く鳴った。そして、久しぶりに思えるあの感覚が、押し寄せてきた。

——あなたは、何を求めるの？

「カル……マ」

カルマは喋れない。喋れば喉が動く。その瞬間、首と同体が別れを告げることとなる。

「ごめ……。騎士団に任せておけばよかったんだよ……。な。ホント……俺みたいな素人が……。出る幕じゃあ……。無かったんだ……。ごめんな……。カルマ……。さよならだ、佐藤」

カルマが「え？」と目を見開かせた。

俺は、左腕の痛みを耐えて立った。刀を右手一本で拾い上げる。

いつもなら、軽く持ちあげる事のできた刀は、今回に限ってとても重く感じた。

「お、おい悪慈……。なにをしようか……」

「ごめんなカルマ。俺、もう感情制限、できそうにない。ごめんな佐藤。俺、お前のこと、殺しちゃうわ」

俺を囲むように、炎が踊った。その炎は徐々に大きくなっていき、最終的に、炎の壁とごつごつした岩だらけの世界になった。

「できれば、この『覚醒』っていうのは……。使いたくなかったんだけど。抑えるのきついんだわ」

この前より、心が落ち着いていた。カルマが、驚いたようにこちらを見ているのが分かる。そうか、カルマはこれを見るの初めてだったっけ。

……落ち着いていられるのも、カルマが近くにいてくれるからか

もしれない。

カルマは「なに、これ」とキョロキョロと周りを見ている。纏わりついていた糸など、疾うに切れている。

「ごめんな、佐藤。これで終わりだ」

佐藤はなにがなんだか分からないと、カルマ以上に目を見開いていた。

「くっそ！」

毒づきながら、腕を振るった。しかし、振るった瞬間に、糸は燃えた。

「な、なんなんだよ……これ……！？」

そして、あの……幾つもの刀が現れる感覚。

俺は腕を上には振り上げた。

……そこに、人の形は無く。

ただの、雷炎の人形が一人。

紅蓮に爆ぜる墓場から。

夜空に浮かぶ月に吠える。

身体は虐殺の炎に包まれた。

闇から生まれるは光。生から生まれるは死。

灰から生まれるは、紅蓮の業火。

戦場を駆ける無限の刀剣。

剣の丘にて、血肉を喰らう。

咲狂う、剣の乱舞。

また、聞こえてきたあの言葉……。その言葉に付け足された、新たな言葉。

瞬間、後ろの刀達が共鳴する様な感覚がした。

俺は腕を振り下げた。

「あつ——」

悲鳴は一瞬。刀は肉片をぶち撒けながら、佐藤の体を余すところな

く突き穿つ。刀が突き刺さった場所から砂埃と鮮血が舞った。

## 入院

俺が目を覚ましたのは、佐藤との決着から数日後のことだった。奇跡的に左腕はくつついていた。切った奴の腕前が良かったのだろう、とのことだった。

この病室の臭いは、どうしても慣れないなあと思っっているときだった。病室のドアが思いつ切り開いたのは。

「悪慈……」

「……ナンデショウカ、カルマサン」

気まずく目をそらす。目が覚めてから、起きようとして激痛が走った時に思い出した言葉があった。

——自分の体を大切にして。

確か、カルマにそんなことを言われていた……。

兄貴と伊織も部屋に入ろうとしたが、空気を読んだのか、部屋から出て行った。いや、この場合兄貴と伊織には近くにいてほしかったと思うのだが……。

「悪慈……なんで私の望みは叶えてくれないの？」

「……ごめん。何度も何度も、心配ばかりかけて」

俯いてしまつて、カルマの表情が見えない。肩がふるえている。

ああ、もしかして

また、泣かせちゃったのか……。

「カルマ、もうちょっとこつち来い」

カルマは意外と素直にベッドの近くに来了。

それから、まだ動かない左腕は無視して右腕でカルマの体を包んだ。俺はベッドで寝ている状態だから、かなり不格好だが……この際そんなことはどうでもいいだろう。

右腕で、カルマの綺麗な髪を撫でた。カルマは、まだ俯いていて表情を見せてくれない。

「……抱き合つてれば、顔は見えないよカルマ」

そう言うと、カルマはあの時……メアリーの別荘で泣いた時の様に、ビクツと体を震わせた。

「……ん……………」

小さく頷いて、カルマは俺の首に腕を絡ませた。

カルマの顎が左肩に乗った。ちよつと、左腕が痛かった。

……きつと、カルマは嗚咽を堪えて泣いているのだろう。

「……兄貴とか伊織には聞こえないよ。我慢すんな。謝るから、我慢はしないでくれ」

カルマは首を振った。それから、肩に乗った顎が動いた。

「守りたい者の目の前では、絶対泣かない……。遠い昔に、そう決めた」

遠い昔……そういえば、カルマは何歳なのだろうか。人ではない人形に年齢なんてものがあるのか分からない。けれど、誕生日くらいは、あるんじゃないだろうか。いや、あつてほしい。

「私に、誕生日はない」

ないのか……。……。なら、作ればいい。

「五月二十日。それがお前の誕生日だ」

「え……………」

「お前が、俺の家に来た日だ」

カルマは、俺の胸の中で震えた。カルマの顎が乗った肩に、冷たい……。けど温かい雫が滴り落ちた。

——我慢はすんじゃないねえ。泣きたきや泣けばいいんだよ、カルマ。お前が俺を守ろうとしてくれるなら、俺もそれに応えよう。お前を守ってやる、カルマ。

心の中でそうさやいた時だった。

「ちょ！ ダメですって由さん！」

「いいじゃない。大体、私が救急車を手配したのよ？ 私が悪慈

君の見舞いに来るのは当たり前でしょ？」

ああ、嫌な予感がするなあ。

そして、予感ほ当たり前様の的中してドアが開いた。

「……お取り込み中だったかしら？」

「いえ、お構いなく……」

ドアの前で硬直した由さんに、俺は苦笑いした。

「そう、まあいいわ。その子だって心はあるものね……」

どこか優しそうなおばさんの様な顔をした。そう思ったけど、言わない。この人に「おばさん」って言うと、百二十パーセントの確率で殺されかける。

「あ、そうそう。私のこと感謝して崇めなさいよ？ 救急車呼んだの、私なんだから」

「そうだったんですか……、ありがとうございます」

「そして崇めなさい！」

「うるせえフリーター」

これでも頑張ってるのよ……と、由さんは泣き崩れた。意外とダメージ、デカかったみたいだ。

「兄貴たちも、もういいよ。空気読んでくれてありがとう」

「……ああ。そうそう、悪慈。これ見舞いの果物とルービックキューブな」

そう言いながら置かれたのは、果物が入った袋とカラフルな四角い物体だった。

オーケイ、果物は分かる。だが何故ルービックキューブ？

「退屈しないようにって、秋太さんが……」

「そ、そうか。ありがとな……」

カルマはまだ俺から離れない。できれば、恥ずかしいから離れてほしい……。

『悪慈にも羞恥心はあるんだね』

『……当たり前だろ』

そんな念話をしても、カルマは離れようとしなない。念話をした理由は、きつと泣いてるからだろう。

それから、由さんを弄って兄貴に怒られ、伊織に果物を切ってもらい……そうこうしてる内に面会の時間は終わった。

「おい、カルマー。もう時間だから離れろって」

「……………」

看護婦さんが苦笑を浮かべてこちらを見ていた。

「カルマーちゃん。焼き肉屋行くから、もう行こう。お店、閉まつちやうよ?」

伊織、カルマーは子供じゃないんだから……。

そして、カルマーは俺の肩部分で顔をゴシゴシと擦ってきた。なんか、猫みたいだなと思った。

それから、カルマーは顔をあげた。既に涙はなく、いつもの無表情があつた。いや、微妙に笑ってる?

「じゃあね、悪慈」

病室から出る間際、カルマーが小さく手を振った。その姿は、なんだか新鮮だった。

その後、妙に静かな時間が過ぎた。個室、というのはなんだか落ち着く。静かな時間は、嫌いじゃない。でも、暇だ。

俺は、せっかく兄貴が持ってきてくれたのだから、とルービックキューブに手を付けた。

「……まずは、一面だけ完成させるんだっけな」

ルービックキューブの攻略法を思い出しながら、右手をスムーズに動かした。しかし、完成したのは五分後だった。

## 入院（後書き）

更新スピードが遅れるとお気に入り数が減っていくことに気付いた今日この頃。

どうも、桜楼です。

今回はエピソード的な何かですね。とりあえず、書いていくしかない。だってお気に入り数が減っていくから。

実は現在、二の腕が筋肉痛です。何故かは知りません。ちょっと脂肪増えたかな、と思って腕立て伏せを三回くらいやったからかもしれない。今度はスクワットでもやってみようかな。

できれば！ できればいいです！ お気に入り登録してください！  
いいいい！

理由はなんとなく書く気力がアップするからです。

それと、感想だとかレビューだとかも書いてくれると嬉しいです。  
いやマジで。

## 退院

入院してから数週間。やっと退院ができた。久しぶりに見る我が家は、どこも変わっていないかった。

玄関に入りリビングに行く……。

「おお！ 悪慈ではないか！ やっと退院できたのだな！」  
銀髪が目が悪い。

「おいリズ。テメーはなんで俺の見舞いに来なかったんだ？」  
勿論、そんな目が痛むような銀髪を持っているのはただ一人。リズだけだ。

「むう、仕方なかるう。団長からは自業自得だから見舞いに行く必要はないと言われておったし……。なにより、現在進行形で任務中なのだ。見舞いになど、行く暇がない」

「任務？」

「ああ。なんだか、わし等が知らないタイプの人形が現れたらしくてな。またそいつの性質たちが悪くてなあ……」

……なんだか、また怪我をしそうである。まあ、今回は俺にその任務が廻ってくることも無いだろうし、リズには悪いがゆつくり休ませてもらおうと思った。

カルマは伊織と服を買いに行ったらしい。兄貴はその付き添い。

イブは現在、その性質の悪い人形とやらの居場所を探しているということだった。

つまるところ、それはリズを二人きりを示す。

だからどうした、ホントどうした。と思いながらも緊張している自分が怖い。

なんとか自由に動く様になった左手で自分の部屋のドアを開けた。ここを管理していたのはリズか伊織かカルマか……。その誰であろうとも感謝すべきだろう。埃も目立つ程はなく、散らかっていただろ  
う本なども綺麗に片付いていた。ビックリなことに、密かに貯めて

いた秘蔵工口本までもが行方をくらませた。

さて、と。窓を開けた。すると六月の下旬には相応しい生ぬるい風が吹きこんだ。部屋のエアコンを付け、ベッドに腰掛けた。

庭にある小さなクレーターを見ると、カルマとの出会いがイメージとして脳の中で再生される。

あのボロ布コートを着た金髪少女。あの時の俺は、こんな非現実的なことに巻き込まれるとは予想もしていなかっただろう。

「おーい、悪慈い。飲み物いるか？」

部屋の外からノックの後、リズの声が聞こえた。

「おーう、今下階に下りるから待っててくれ」

俺は窓を閉めた。それから、下階に下りた。

「なんで牛乳？」

下階に下りて出された飲み物は牛乳だった。もっと、なんかこう

……オレンジジュース的な物を期待したのだが……。

「牛乳は成長に良いとメアリーに言われたのでな。さあ、悪慈も飲むがいいぞ！」

そう言ってから、リズは牛乳を一气飲みした。

「成長……ねえ」

コイツのことだ。きっと発育のことを言っているのだろう。

「な……！ どこを見ている！」

「え？ いや、別にどこも見えてないけど」

「嘘だ！ わしの体の一部を完全にロックオンしておったぞ！」

「いやいや、見てないって」

本当は見えてたけど。主に胸を。

「嘘だ！ ぜつつつたい、嘘だ！ 貴様……この不埒物、変態ド変態！」

いや、そんな腕を振り回されても……。

まあいいか、と俺も牛乳を一气飲みした。

「その飲みっぷり……まさか貴様も胸の成長を……！？」

ブツと、牛乳が口から吹き出そうになった。

「違うわああ！！俺は男だぞ！！？」

「なに騒いでるんですか、兄さん？」

「うわああ！い、伊織？」

いつの間にか帰っていたのか伊織と兄貴が立っていた。

「いやーはは、女の子の買い物は大変だね……」

兄貴は苦笑を浮かべながら言った。見れば、兄貴は荷物持ちに使われたようだ。可哀そうなことに。

「悪慈！」

兄貴の後ろにいて見えなかったが、カルマもちゃんとそこにいた様子。ステテテという効果音が合いそうな走り方で俺に抱きついてきた。随分と積極的にナリマシタネ。

「カルマちゃん、兄さんに会える時間が短いから寂しかったんですよ」

えー、寂しいって言われても……。しかし、カルマの笑顔を見ると満更でもない自分がいた。

「あ、それと遅れたけど、退院おめでとう、兄さん」

「ん、ああ、ありがと」

そうそう、と兄貴が買い物袋のうちの一つを机の上に置いた。

「ん？なんじゃ、これは」

牛乳を二本も飲んでやがるリズは、興味津津と言ったご様子で袋を凝視した。

「これは退院祝いのケーキだよ」

「おお、ケーキとな？いつ食べるのじゃ？」

「うーん、夜ごはんを食べ終えてからかな」

「……そうか」

冷蔵庫に仕舞われるケーキを名残惜しそうに見つめるリズはちょっと可愛いと思った。

「悪慈……」

「……なんでしょうか。……いたっ！痛いってカルマ！」

耳を引っ張るだけでは飽き足らず、上下左右に捻ってきやがった。  
「もう、また変なこと考えてたんですか、兄さん？ あのエロ本と  
いい……ちょっとそこに正座なさい！」

「は、はい」

ここ最近、説教されることが多いと思う。

その後、数分で伊織の説教は終わり、晩御飯のハンバーグを食べ  
た。そして、俺の退院祝いとしてのケーキはとても美味しかった。

闇が侵食するか、光が侵食するか。住宅街の道に二人の影。手を  
繋ぐ双子の少女。

「黒鳥舞う月出ぬ夜 知らぬが花の仏の道 明星に見える絶望に写  
る光」

聞こえるは、二人の声。

「通しゃせん、杯満ちるその日まで」

月夜に写る、三日月の口。

「般若の面に映るは、織月」

「般若の面に写るは、満月」

双子は跛た歩く。次なる血を求め。摩く黒髪は、満月に輝く。そ  
の姿は、宛ら、かぐや姫の様。  
さながら

## 双子の人形

退院してからも数日安静にしているとのことだったので、学校は休んでいた。そして今日、久しぶりの登校中。

時間をずらしたおかげで由さんに会うことはなかった。

「おう、久しぶりじゃねえか。お前がいなかった間に大変なことになっただろ」

「ん？　なんかあったのか？」

「ああ、新しい人形の出没。それと……」

その時、ガラガラと教室の入口が開いた。なんか神々しい光が見えた気がした。

「では、ホームルームを始めます」

教団に立っていたのは、メガネをかけた騎士団長だった。

「……………」

「…………？　どうかしましたか、悪慈さん？」

「あとで話があるんで、屋上来てくれますか」

「ええ、私も丁度、あなたと話をしたいと思っていました」

シニカルに笑うサラ。睨みつける俺。周りから見たら、俺とサラは一体どういう関係に見えたのだろうか。

「で、話ってなんですか、柿崎悪慈？」

屋上はとても涼しかった。これからサボるとしたら屋上に決定だな、と思った。

「サボる話ですか？　立場上、怒りますよ？」

「その立場って教師、ですか？」

「ええ、正しく」

「なんで急に教師何かに？」

「今回の件で、あなたがどんなに危険か分かりましたからね。監視させていただきます」

「……そうですか。それで、サラさんのお話って言うのは？」

「任務のことです」

あー、早速嫌な予感がする。

「もしかして、新しいタイプの人形の話……ですか？」

「ええ、その通りです」

俺は脱力した。

「あのですね。俺は退院したばかりなんですよ。休ませてくれたりはしないんですか？」

「今回の人形はとても性質がわるいんです。寄生型、とても言いましようか」

俺の話は無視かコンチクショ！。

「無視してるつもりはありませんよ。ただ、このままではあなたのお家族も寄生されてしまうかもしれない……」

「……ちなみに寄生されるとどういう風になるんですか？」

「死にます」

……その短い単語が、どれだけ危険な人形なのかを俺に示した。

寄生型、か。

「更に、死ぬだけならまだしも、死ぬ間際まで好き勝手に体を操られる……傀儡師に近いタイプですね。しかし傀儡師と違い、糸は不要。更に意識、記憶、言語……体の全ての機能を操られます」

それは、死ぬよりも酷い話しなのではないだろうか。

「今のところこの町で確認されている変化は、日本人形のような双子の人形がこの町に出現したということです」

「そいつが犯人なんですか？」

「ええ。まだ、推測ですがね。……いいですか、会ったら必ず精神同体してください。カルマが近くにいる限り、その双子は必ずあなたを狙います」

放課後になるのは早かった。カルマは、兄貴に勉強を教えてもらっていたらしく、今では指摘されてもすぐ答えを言える様になっていた。

「どうする、今日はケーキ買っていくのか？」

「ん！」

久しぶりに一日俺と過ごしたカルマはどこか上機嫌の様に見えた。でなければ、こんな笑顔にはならんだろう。

「今日の夜は対価払ってね」

……。

「え」

「だって入院してるとき全然血を吸えなかったし……本当なら、この場で吸血したいくらいなんだけど……」

「分かったよ」

「ん」

対価を払うのだって早い方がいいだろう。と、袖を捲りカルマの前に出した。

「ごく……ごく……」

久しぶりの血を飲まれる感覚は、気持ち良かった。

「……悪慈、マゾ？」

「ないわー……」

しかし、強く否定できないのが悲しい。

そんなこんな話をしながら、由さんがいつも転がってくる坂が見えてきた。とすると、もうすぐケーキ屋も見えてくるはずだが……。

「……ん？　なんだあれ」

夕日に写る、二つの影が見えた。同じ身長で同じ格好をしているらしい。……双子？

クスクスと笑う二人。違うのは髪の毛の長さだけ。左の子はショート、右の子はロング。しかし、そのどちらも日本人形のような美

しい黒髪を持っていた。服も巫女服のようなものを着ているので、余計に日本人形のイメージが重なってしまう。

しかし、双子……か。聞こえてくるのはあのサラの言葉。日本人形のような双子の人形がこの町に出現した。

正しく、その双子が俺の目の前に立っているわけで……。

「……行こうカルマ」

「……ん」

坂道から帰るのは諦めて、横の細い道に入る。そこを抜けると更に細い道が現れる。その階段を登れば、あとは真っ直ぐ歩くだけ。なのだが……。

——クスクス。

「な……！？」

さっき坂道に立っていたはずの双子が、瞬間移動でもしたかのように俺の目の前に立っていた。

「……鬼ごっこは飽きたよ。おにーちゃん」

鈴を弾いたような高い声。

「そうか、そりゃ残念だ」

日本刀は無い。当たり前だ。もし今持っていたら銃刀法違反で捕まってしまう。小型ナイフでも持つてくれば良かった……。

「じゃ、なんの遊びがいい？」

嫌な汗が全身の毛穴から噴き出てきた。余裕ぶってられるのも、いつまでか。

そして、また聞こえるクスクスという笑い声。

「もう、ね。疲れちゃって遊ぶ体力なんて実はないんだ。私たち」

「だから、ね。おにーちゃんのお家で休ませてほしいな」

「ダメかな？」

一体どうなっているのだろう……。寄生型。寄生されると死ぬ。そんな人形を、家に休ませる？

「悪慈……」

カルマが袖を引っ張ってきた。

「な、なんだ？」

「あの子たち、悪い子じゃないよ。悪魔タイプ。それに、対価を貰ってないみたい」

「……そんなこと、分かるのか？」

「ん」

まあ、疑って後悔するより信じて後悔した方がいいだろう。そう判断した。

「……分かったよ。良いよ、俺の家に来い。んで、お前らの主は誰なんだ？」

「もう、ね。死んじゃったからいないよ。数年前に」

「だから、ね。新しい主になってくれないかな」

「……とりあえず、家に帰るか。ついてこい」

「はい」

主が数年前に死んでも尚、この場に留まっていられる人形。そんなものが存在するのだろうか。

なんだか、謎の多い双子である。

## 契約

「あ……え……？」

「「こんにちわ！」」

「あ、はい。どうもこんにちわ……じゃない！　なんだこの子たちは！　どういうことだ、悪慈」

「えっと……双子？」

「そんな見れば分かることを聞いてるんじゃないよ、悪慈。……えっと、君達？　なんでこのお兄ちゃんについてきたのかな？」

「「私たちの新しい主だし、ついていくのは当たり前でしょ？」」

「カルマ一人でも結構大変なのに、更に二人増えてどうすんだよお

……」

「騎士団から支援貰ってるし、あれでなんとかしようぜ、な。」

家に帰ったときのやり取りは大体こんな感じだった。

とりあえず、兄貴にはこれ以上の苦勞をかけるわけにはいくまいと、いうことで俺の部屋で過ごしてもらおうと思ったのだが……。

「んで、どうすれば主とかって言うのにはなれるんだ？」

「契約すればいいんだよ」

「だよ」

「……その契約方法は？」

「「わっかんない！」」

さて、これはどうしたものか……。契約方法が分っかんないんじゃない、主にはなれない。

……とりあえず、対価だけでも払っておかないと、こいつらは消えてしまうのだろう。

「じゃあ、対価ってのはなんだ？　何を払えばいい」

「今のあなたには払えないよ。私たちの対価は、主の命令」

ショートヘアの子が、そう言った。

「命令？」

「そう、なんでもいいの。主の命令なら、ね」

今度はロングヘアの子が言った。微妙に声の高低が違うのに今更気付いたが、今はそれどころじゃない。主の命令それ自体が対価なら、やっぱり主にならないといけないのか……。

「悪慈……ホントにその子たちの主になるの……？」

カルマが不安そうな顔でそう言った。……そうか、自分だけの主が他人の主になるというのは、不愉快なのかもしれないな。

「大丈夫だよ、一時的なもんだ。対価を払ったら騎士団に引き渡すよ」

「でも、たぶんその子たち処分されちゃう……」

「あ……そうか」

天使タイプ以外の人形は処分する、というのは騎士団の基本的なルールじゃないか。更に、この双子の人形は寄生型の人形だと疑われている。この疑いを解いたところで、処分されるのは仕方のないことだろうし……。

「仕方がないな、半永久的に主になるしかないか……」

「……ん」

カルマが俯きながらも答えた。

「お困りの様ですねえ、兄さん」

いつの間にか部屋の入り口に立っていたのは伊織だった。

「まあ、そうだな。契約だとか、方法が分からないんじゃない仕様がない」

「ふっふっふー、そんな時はこれですよ、兄さん」

そう言いながら取り出したのは携帯電話。

「美香さんに、契約方法を聞けばいいんです！」

なんと大胆なことをしようとしてるんだ。

そう考えてる間にも、伊織はピッピッと番号を探し、美香に電話をかけた。

「あ、もしもし。——はい。——そうです」

そうこう通話すること一分くらい。

「さて、分かりましたよ。兄さん」

「マジかよ……」

教えちゃっていいのか騎士団副団長。

「まずは六芒星を描いて……」

どっから取り出したのか白いチョークで魔法陣を描いていく伊織。たぶん、契約陣というヤツだろう。佐藤がカルマに使った……ものと同じなのだろうか。

「佐藤っていう人が使ってた契約陣はプロセルミナを使った強制的な契約。これは人形と主の同意のもと契約陣だから、あれとは違う。これに人形の力は要らない」

さすが、カルマは俺の問いに的確に答えてくれた。

そして、数分後。契約陣は描き終わったらしい。

「これで、この魔法陣の中心に兄さんの血を垂らせばいいんですけど……」

「ああ、いいよ。カルマの対価ついで」

そう言って手をカルマの目の前に突き出した。

「……いいの？」

「ああ、いいよ。対価は払っておけば払っておく程がいいんだろう？」

「ん」

短い頷きと共に、噛まれる感触。手、というか指をかまれるのは初めてだが……。あ、ちよつと痛いかも……。

「ぷはっ」

という声と同時にカルマの口が離れた。ちょ、唾液……まあいいか。

それから血が止まらぬうちに契約陣の上に垂らす。

「それじゃあ、双子ちゃんも魔法陣の上に乗って」

「「はい」」

二人で息ぴったりの返事をしてから、契約陣の上に乗った。

「それじゃあ、兄さん。あの詠唱を」

それから、伊織に事前に教えてもらった契約詠唱を唱える。

「我、汝の主となりし者。我、汝の契約者となる者。悪魔の刻印を胸に刻みつけ、更なる不幸と幸福を。汝、我の盾となる者。汝、我の剣となる者。我を汝の主と認めよ」

「我は主の盾となり剣となる者。汝を我の主と認めよう」

その時、契約陣から眩い光が発せられた。これで、契約は済んだ様だ。しかし、右手の甲が熱い。なんだ？ ……！？ 魔法陣……？

「な、なんだこれ」

「それは多分、主としての証。召喚じゃなくて、契約の時にだけ体の一部に刻まれる」

カルマが、ちょっと物悲しそうにそれを眺めながら言った。

見ると、双子の右手の甲にも、同じ物が刻まれていた。

「……カルマも契約、しとくか？ てか、できるか？」

「え」

「いや、お前とも、身体に残る絆的なものを刻んでおきたいなと思つてさ」

「……ん！」

と、いうことでカルマとも契約をした。契約自体できるかどうか分からなかったが、無事契約できたらしい。双子の人形は右手に黒い魔法陣。カルマは右胸のちよつと上部分に赤い魔法陣。そうして、契約の証が、二つ刻まれた。

「さうそう、私たちの名前。教えとかなきゃね」

「私、織月」

「私、満月」

ロングが織月、ショートが満月らしい。

しかし、なんで巫女服なんだ？ そりゃ、カルマの時みたいなボロ布コートよりはいいけどさ……。あとで、服を買ってやらないとということを思い、気が滅入った。

## 老紳士

土曜日、双子の織月と満月の服を買いに行くことになった。この町には幾つも衣類専門店があるが、一番品揃えがいいのは町の中心にある大型デパート。つまり、人が多い所に行くこととなる。できれば、人形という存在は人の多い場所に行かない方がいいと言ったのは、カルマ自身である。人形は殺戮の血に濡れた兵器。どこで襲われ、どこで殺し合いになってもおかしくない。それが、殺すことしか能がない人形と人形遣いであれば尚更……。しかし、カルマを言い任せたのは俺の一言だった。

「なら、犠牲者を出さずに迅速に処置をすればいいんだろ。これでも、一日一時間以上の訓練はされてるんだ。俺も、前よりちょっとは強くなったと思うよ」

笑顔でそう言う、カルマは押し黙った。自惚れるな、と言われてそうで怖かった。

さて、そんなわけでデパートに来たわけだが……。

「うわー！」

「人が多いね！」

双子のテンションはマックス。そこら辺で踊り狂ってもおかしくなさそうである。

「あんま騒いで、迷子になるなよ？」

「それは命令？」

「命令？」

「そう、命令」

「「はい」」

ちなみに、俺の右手と双子の右手には包帯が巻かれている。理由は、人が見れば刺青に見えてしまうような契約の証が刻まれているからだ。これでも、外ではちょっとした優等生でいたいのだ。なら、授業をサボるなと怒られそうだが……。まあ、それはそれ。これはこ

れ、ということだ。

衣類専門店は大型デパートの二階全体である。殆どが女物の服で、一部、男の俺としては見てて恥ずかしい物もある。更に言ってしまう、ここはコスプレまである。ここで巫女服を着ている人は少ない。故に、この双子も違和感なしでここに存在できる。ある意味、ここを選んで良かったと言える。

「カルマも、欲しい服とかアクセサリーとかあったら言えよ？ 高くなければ買ってやる」

「ん」

いつものように頷いた。

さすがに、いつまでも伊織の服ばかり貸してもらうのもちよつと気が引けるからな。と言おうとしたが、結局のところ、伊織が着れなくなつたからカルマに貸してるわけなのか……。

「さて、と」

気付くと、双子は既に服を見て騒いでいる。……命令無視して、迷子にならなければいいけど。

そして数時間後。服を五着ほど買った双子はご機嫌だった。勿論、俺の財布の中身が空っぽになったのは言うまでもないだろう。何故、女はここまで服に拘るのだろう。

「……まあ、いいか」

双子の楽しそうな顔を見ると、そんなこと考えないでもいいかという気がしてしまう。ちなみに、カルマも二着ほど買った。

まあ、いいさ。買ってやるって言ったのは俺だし。

大型デパートからの帰り道。不審な気配がした。後ろから、ずっと切っ先を突き付けられている様な恐怖も感じた。

そして……その気配の主は、あっさりと姿を現した。

「やあ、こんにちは……。そして、さようならだ」

ヒウンという空気を斬る音と共に俺の目を貫かれそうになった。あと少し、反応が遅れていれば、とんでもない激痛に襲われていた

ことだろう。

目の前に現れたのは、イギリス紳士の様なスーツに身を纏った男だった。帽子を深く被っていて、表情が見づらい。良く見ると、鼻の下には髭が生えている。どうやら老人のようだ。

後ろを見ると、電柱に突き刺さる小さなナイフが見えた。そして不思議なことに、そのナイフは勝手に老人の手に戻っていった。

「糸……？ 人形遣いか。糸を使つてるということは、傀儡子」

「ふむ、惜しいな。人形遣いであることは正解だが、傀儡子ではない。この糸は、私自身が身に付けたものだ」

老人は白い手袋を付けたその手を高く振り上げた。それと同時に、何本ものナイフが空気を斬りながら飛んできた。

「ちっ！」

避けきれず、頬から血が滴るのが分かった。

「ほう……。良い動きをするね。だが、その程度では私のナイフを避けきることはできないよ」

一体どこに隠していたのだろうか。両手には数十本のナイフが握られていた。

『カルマ！』

『分かつてる』

視界にカルマは映っていない。それでも、カルマが俺の中に入ってくる感覚は良く分かった。

そして、飛んでくるナイフを炎で風払う。

いつも思うのだが、この炎は一体なにできているのだろうか。

炎でナイフを風払うなど、できるものなのだろうか……。

「ふむ……なら、私も精神団体と行こうか」

「あ、あああああああ！」

後ろに立っていた双子が突然、頭を抱えて叫び出した。

「おい、どうした！」

「まだ、抵抗するのか……」

男は澄ました顔で、その異常な光景を見ていた。

「おい、ジジイ。テーマ何をした！」

「私は精神同体するように命令したにすぎんよ」

「なに？」

「じゃあ、まさか……この老紳士が、こいつらの主……？　だが待て。こいつらは、数年前に主は死んだ、と。」

「ああ、死んだよ。だから、私が代わりに主になろうとしたのだがね……。私も丁度、人形が世界に帰ってしまったところだったからね」

「私たちは、あなたを主だと認めて……いない！」

織月が頭を押さえながら叫ぶように言った。

「何故だ？」

「あなたが、人形に酷いことをしていたのは……知ってる！　だから、いや！」

「はあ……。人形は所詮、人形。人間ではないのは、分かるだろう？　サーカス団が動物を調教するのは当たり前だと思わんかね」

それは――。

「動物を、人間と同等に並べるのか？　動物が人間に従うのと同じ。」

人形は、人間に従うべきだろう」

「それは……それは違うぞ」

反論したのが俺だったからだろうか。老紳士は目を点にして言った。

「キミは、何が違うと言いたいのだ？　だって、キミもその人形を従えているじゃあないか」

「そ、それは……」

「結局、人形は兵器。そもそも、動物よりも冷酷な存在なのだ。人形と人間を殺す物なんだよ」

居心地が悪かった。どう反論すればいいのか、分からなかった。

「と、とりあえず！　人形であろうとも、酷い扱いをするのは良くねえだろ！」

「まったく、理屈が通っていない反論だな。それはただの感情論だ

よ、少年」

そう言うと、右手を振り上げた。

「さあ、少年。キミも人形遣い。死ぬ覚悟はあるだろうか？」

その時、……嫌な感触がした。……覚えがあるぞ。これは、糸が体に纏わりついた時の感触。

『カルマ、電撃。できるか？』

『ダメ。これ絶縁体……この絶縁電圧以上の電撃は、私には出せない』

『そうか……なら、炎で焼き切れるか？』

その瞬間、俺の体の周りに炎が纏わりついた。

『ほう……』

老紳士は意外なものを見る様な目でそれを見ていた。

「いやはや……、私の糸を焼き斬るとは、想定外だ……」

双子は、既に気を失ってしまったらしい。後から聞こえていた悲鳴は、もう聞こえない。

『カルマ、逃げよう。双子も一緒に瞬間移動できるか？』

『ん』

瞬間、俺の体は炎に包まれた。

## 一時休憩

すみません、こんなタイミングですが、ちょっと休憩です。

いや、本当は描きたいんですよ？ 続き。

でもなかなか話が進まなくて……。

うん、ホントすんません。

後々、再開するんで、その時にも生易しい目で読んでくれると嬉しいです、

復活するその時まで、どうか……。ていうか、書き込まなくなった途端お気に入り数が減ったのはビビった。

どうしよう、文字数が足りない。

ああ、そうそう。

最近ですね、夢を見るんですよ。

妄想とかしていると、いつの間にか無意識のうちに妄想しちゃうものなんでしょうか。  
謎です。

## 再戦開始

カルマの力で瞬間移動した俺達は家の前にいた。

織月と満月も近くで気絶していた。本当はあの老人を今すぐぶん殴ってやりたいところだが、今は双子の安全を確保することに専念しよう。

「カルマ、老人がここに気づくまでにどれくらい時間が掛かと思う？」

俺の質問に、カルマはいつもの表情のまま答えた。

「織月と満月の力が漏れ出してるから、そんなに時間は掛からないと思う。良くて也十分」

あと十分……。

日本刀を持つておく必要があるそうだ。

「とりあえず、部屋に入るか」

双子をなんとか抱くことに成功。両手がふさがっている俺の代わりにカルマが玄關を開けてくれた。

さて、双子の力の封印をする必要がある。カルマ曰く、それで十分から十五分くらいは稼げるらしい。

「……これで、いいのか？」

封印できたのかが分らん。なんせ、外見的には何も変わっていない……。

「大丈夫、力は漏れてないよ」

カルマのその一言に安心。カルマも力の封印をした。碧眼のカルマは、どこか姉の様な面持ちで双子の寝顔（？）を見ている。

……ああ、カルマにとっては妹みたいなものなのか。

いや、後輩？

「……こいつらの目が覚める前に老人は倒しておきたいな。全部夢だった、と言えるように」

「……うん」

部屋の隅にある刀を取り、鞘から少し抜く。

輝きが一切失われない刀。カルマがいなかったら錆だらけだった。カルマがいる限りは、錆が付くことはないのだろう。

そこで、考えてしまうことが一つ。

……俺が死ぬまでカルマは一緒にいてくれるのだろうか。一緒にいてくれたとして、俺が死んだらカルマはどうなってしまうのだろうか。

すぐ人形の世界に帰ってしまうのだろうか。それとも、この双子の様に新たな主を探すのだろうか。

どれくらいそんなことを考えていたのか、時計を見ると、既に老人がここに気付いてもおかしくない時間である。キン、という音を立てて刀を鞘に納めた。

立ちあがり、部屋を出る。カルマはどこへ行くの？　と言う様な目をしていたが、気にしない。

家を出て、右を見る。

「……さっきぶりだな、少年。それで、改心してくれたかね？」

いやーびっくりだ。嫌な予感がしたから出てきたらこれだもん。予感って怖いですねー。とか言ってる場合じゃないっての。

「改心？ あんた、ふざけてんの？ 俺がそんなもんするわけねえだろう。それとも、ここで『人形は危険ですね、はいそうですね』って言えば、戦わずに済むのか？」

不敵な顔を表情に張り、動揺を隠す。

「ふむ……、では、人形は人間と同等と考えるのだな」

「当たり前だ」

「では、戦うとしよう。構えなさい、少年」

刀を鞘から、その感触を確かめるように、ゆっくり抜く。そして鞘を邪魔にならない様に家の敷地内に放り込む。

——パリーン。

……なんか窓が割れた音がしたが気にしない。

「……なんというか、君は締まらないな……。これから戦うと言うのに、自分の家の窓を割るとは……」

「う、うっせー！ いいんだよ、どうせ俺の家なんだから！」

さっきまでの緊張感滅多刺し。

「今度こそ、始めようぜ。ジジイ」

今度こそ真剣に構える。

下手をすれば、腕がちょん切れる程度じゃ済まないだろう。なんせ、相手は人形の力を借りずに糸を扱う男。一から積み上げてきた達人だ。佐藤などより強いのは当たり前だ。

……だからどうした。

当たって砕けるだ。

足に力を集中させる。精神同体してる時の名残りか。体に力が充満している感覚になる。

……なんでカルマを呼ばないかって？

そんなん、俺のプライドがあるからに決まってんだろ！

## 再戦開始（後書き）

短けえ！

すんません、とりあえず、ちょっとくらい続きは書いておこうと思  
ったんです。

そしたらこんな短い続きになりました。

来週か再来週にはまた続きを出そうと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3299t/>

---

人形遣い

2011年8月2日03時38分発行